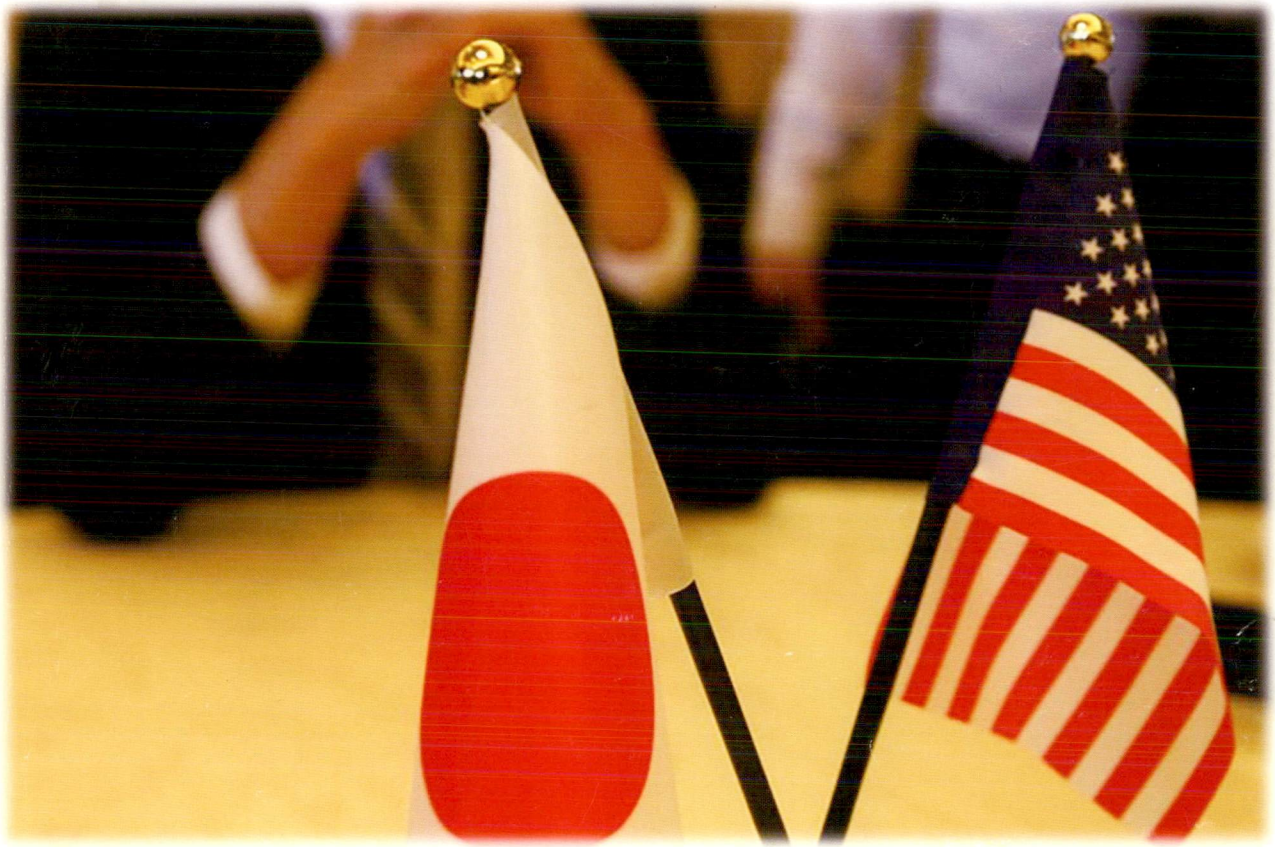
過去と向き合い未来を拓く

～衝突と多様性から生まれる新たな相違理解～

Coming Together to Confront our Past, Present, and Future



第 67 回日米学生会議　日本側報告書

67th Japan-America Student Conference Bulletin

第 67 回 日米学生会議 日本側報告書

目次

第 1 章 日米学生会議とは 7

実行委員長挨拶 8

日米学生会議の歴史 10

第 2 章 第 67 回会議概要 13

本会議における主な活動 14

実行委員紹介 18

参加者名簿 20

内閣総理大臣からのメッセージ 22

第 3 章 事前活動 23

第 66 回報告会 兼 第 67 回説明会 24

選考 26

春合宿 27

防衛大学校研修 29

原子力発電研修 32

勉強会 35

宗像国際環境 100 人会議 37

YFJ ヘリテージ 39

参加者による感想文 41

第 4 章 直前合宿及び本会議 45

開催地概要 46

直前合宿 50

広島 51

島根 63

京都 70

東京 75

第 5 章 分科会活動 81

現代の安全保障 82

企業の社会的責任とリーダーシップ 91

宗教の意義とその役割 100

格差と社会 119

21 世紀におけるメディア 100

今日の教育とこれからの取り組み 126

エコハザードと資源の持続可能性 135

第 6 章 日本側代表団の声 143

実行委員会 144

参加者 150

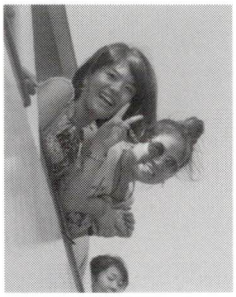
第 7 章 第 68 回会議概要 171

第 8 章 ご協力頂いた方々 175

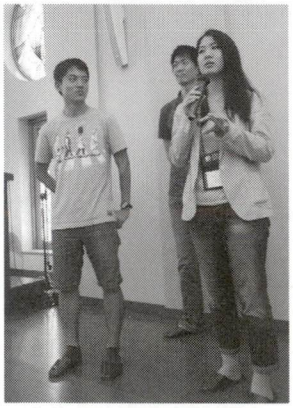
ご協力頂いた方々 176

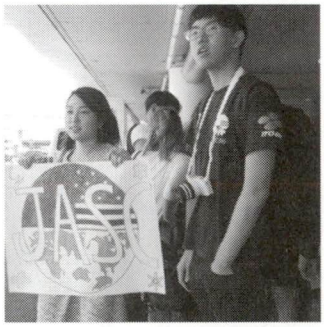
ご賛助頂いた企業・団体様 188

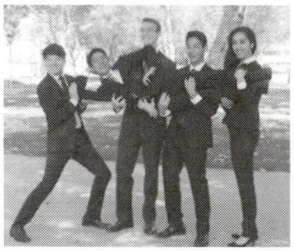
第 9 章 メディアへの掲載 191

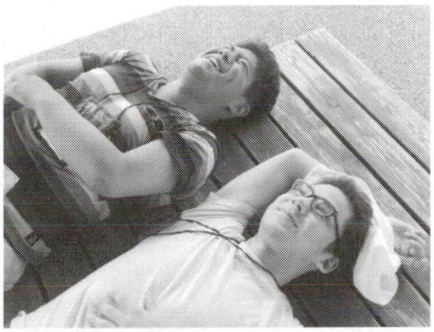


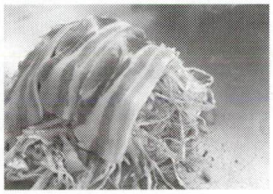
JASC MEMORIES

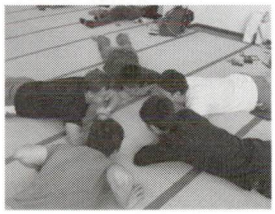


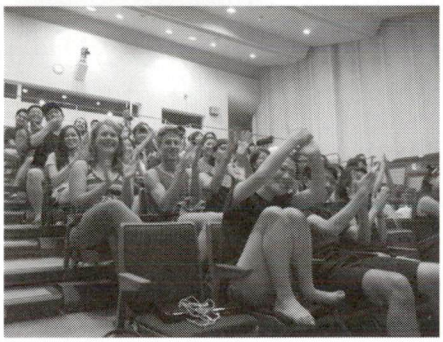












3
SPAIN

■□第１章

日米学生会議とは

―第１章　日米学生会議とは―

第 67 回日米学生会議実行委員長挨拶

「なぜ、今、日米なのか。」これは、私が会議を運営するにあたり常に脳裏をよぎる問いであった。1939 年に開催された第 6 回日米学生会議参加者である宮澤喜一元首相は、会議中にナチスドイツのポーランド侵攻を耳にした。戦時中には、会議で夢を語り合った仲間と戦地で敵として向かい合った者もいた。しかし、会議が創設された当時の日米関係と戦後 70 周年を迎えた現在の日米関係とは隔世の感がある。では、歴史上最も成熟した二国間関係と言われるようになった今、「日米」を再考する意義とは何か。

2015 年は、日米関係にとって重要な年となった。7 月 1 日には集団的自衛権の行使を容認した閣議決定があり、国連 PKO における自衛隊の役割も変化することが想定される。また、第 67 回日米学生会議開催中の 8 月 14 日には安倍談話が発表され、安倍内閣は、過去を振り返り、未来への知恵を学ぶ中で世界の平和と繁栄に寄与することに意欲を示した。経済関係においても TPP 交渉の議論が白熱しており、農林水産業やモノづくり産業にとって、ジャパンブランドの真の価値が問われる時代が到来したともいえる。さらに、世界地図を鳥瞰してみても、ウクライナ紛争やシリア問題に見え隠れするロシアとの関係構築や、北朝鮮・中国との関係構築に加え、非国家主体によるテロの脅威など、世界全体で取り組むべき深刻な課題は未解決のままである。マルチな協力が求められる現代、日本もごく身近な存在となったアメリカと正面から向き合い、共通の課題に対して一層強い信念で取り組み、未来を拓く姿勢が問われていると言っても過言ではない。

また、国家の関係に囚われない企業や市民が社会に与える影響も拡大した。SNS や E コマースなどのインターネット技術の進展は、ますますオープンな社会に向けて革新を続けていく時代を切り拓いた。さらに、2015 年は「フィンテック元年」とも言われる

ように、モノのインターネットや人工知能の発達により、従来の金融サービスの定義を変えうる第四次産業革命に突入した。電子マネーや仮装通貨などの出現は「お金」や「銀行」の役割を問い、Airbnb や Uber など民間主体の C2C の登場は「宿泊」や「送迎サービス」のビジネス概念を変え、ドローンの発達は「配達」の概念を変えた。このような既成概念に囚われない民間主体の革新は人々の行動様式を変え、国家関係にも大きな影響を与えかねない。そのような視座で日米関係を俯瞰すると、日米を取り巻く環境も刻々と変化していることを、常に認識する姿勢が求められるという結論に辿り着く。

200 名以上の来場者に恵まれた今年の報告会も、非常に多くの世代の会議関係者の方々にご来場頂くこととなった。このとき私は、当会議には時代を越えて受け継がれる共通の志があり、これが脈々と受け継がれてきたことを再確認した。特定の利害や立場に囚われない我々学生が、昼夜を問わず腹蔵のない対話を交わすことで、国境を越えた友情や相互理解を育み、次代を築いていく上で互いを支える礎になるのである。

本報告書は、私たち 71 名の学生たちが、現代を取り巻く諸問題の解決に向けて仲間たちと率直な対話を重ね、相互理解を育むことに一夏を捧げた活動の記録である。異文化衝突の荒波を幾度となく経験した我々が、変わりゆく未来に立ち向かい、各々の目線から社会の一隅を照らしていくことを願って止まない。

第 67 回日米学生会議実行委員長
松居　純平

日米学生会議の歴史

日米学生会議は、1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情の改善、日米相互の信頼関係の回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである。」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会(日本国際学生協会の前身)を母体として、準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも、4名の学生使節団が渡米し、全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名(うち22名は大学教授、およびその夫人でオブザーバー)の米国側代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国(当時)への視察研修旅行も実施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、第2回日米学生会議が翌年米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以降1940年の第7回会議まで、以下の通り日米両国で毎年交互に開催されることとなる。第3回(1936年)早稲田大学。第4回(1937年)スタンフォード大学。第5回(1938年)慶應義塾大学。第6回(1939年)南カリフォルニア大学。第7回(1940年)津田塾大学。しかし、太平洋戦争の勃発に伴い、日米学生会議も中断を余儀なくされた。

終戦後、会議復活の声が上がり、当時の学生とかつての参加者の努力により、日米学生会議は1947年に再開し、第8回会議を開催することとなった。しかし、当時日本は占領下にあり、米国から学生を招くことが不可能であったため、在日米兵および軍属の中から、大学生の資格を持った者を選んで会議を再開し、1953年の第14回会議まで日本で開催された。翌1954年、第14回会議に参加したコーネル大学の学生の提案により、第15 回会議が戦後初めて米国の同大学で開催されることが決定した。しかし、当時の日本の経済状況では、日本側参加者の渡米費用を捻出することは容易ではなく、米軍の輸送機の提供を受け、15名のみの日本側参加者が参加するに留まった。

これがきっかけとなり、日本に留まった参加者の中から「両国間関係のみならず、多国間での学生による交流が行われるべき」との声が強まり、日米学生会議を国際学生会議に発展的に解消することが決定され、1954年、アジア地域の学生との会議を主目的に、第1回国際学生会議が開催された。なお、国際学生会議は、世界各国から学生を招集する形で現在も継続されている。一方の日米学生会議はこの決定により、1954年をもって再び中断された。

1963年に至り、翌1964年が会議創立30周年でもあり日米双方で会議再開を望む声が高まった。これを受け、会議創始者である板橋並治らが理事を務めていた財団法人国際教育振興会が、日本側主催者を担う形で会議を再開することが決定された。第1回、第2回の米国側参加者の努力もあり、1964年、日本側77名と米国側62名で第16回会議がリードカレッジで開催された。この年は東京オリンピックが開催された年でもあった。

その後、日米相互開催の下会議は継続されるが、1973年第25回会議において、当時の学生によって抜本的な改革がなされ、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎年の会議ごとにテーマを設定する、期間を1 ヵ月間とするなど、現在の会議の基本形態が整備された。この年は円が変動為替相場制に移行し、米軍が南ベトナムより撤退した年でもあった。1978年には、戦前の日米学生会議参加者有志により、会議の経済的支援を主目的とする国際教育振興会賛助会が設立され、会議永続への道が開かれた。また第31回会議が開催された1979年には、戦前の米国側参加者によりJASC,Inc.が設立され、米国側実行委員会をサポートする体制が確立された。

その後日米学生会議は、財団法人国際教育振興会とJASC,Inc.を主催者として、日米両国学生が主体的に企画・運営を担うという形態をとる中で、継続されることとなる。そして2007 年度にアメリカ側主催団体であるJASC,Inc.はInternational Student Conferences,Inc.と名称を変え、米韓学生会議も開催している。創設時と今日では日米両国を取り巻く環境は大きく異なり、会議の形態自体も変化している。現在の日米学生会議は、会議創設時の理念を受け継ぎつつも、時代の変化に対応し、今日に至っていると言えよう。

本文中の略語

JASC(ジャスク)　：日米学生会議(Japan-America Student Conference)
JASCer(ジャスカー)　：日米学生会議の現役および過去の参加学生
IEC　：日本側主催団体の国際教育振興会(International Education Center)
ISC　：アメリカ側主催団体(International Student Conferences)
EC　：実行委員会、または実行委員(Executive Committee)
AEC　：アメリカ側実行委員会(American Executive Committee)
JEC　：日本側実行委員会(Japanese Executive Committee)
デリ、デリゲート：日米学生会議参加者(Delegate)
ジャパデリ　：日本側参加者(Japanese Delegate)
アメデリ　：アメリカ側参加者(American Delegate)
アラムナイ　：日米学生会議の過去の参加者(Alumni)
サイト　：本会議開催地(Site)
RT　：分科会(Round Table)
安保分科会　：「現代の安全保障」分科会
ビジネス分科会　：「企業の社会的責任とリーダーシップ」分科会
宗教分科会　：「宗教の意義とその役割」分科会
格差分科会　：「格差と社会」分科会
メディア分科会　：「21 世紀におけるメディア」分科会
教育分科会　：「今日の教育とこれからの取り組み」分科会
エコ分科会　：「エコハザードと資源の持続可能性」分科会
リフレクション　：参加者が腹を割って会議の感想や反省点を話し合う場(Reflection)

■□第 2 章

第 67 回会議概要

―第 2 章　第 67 回会議概要―

＊本会議における主な活動＊

■第 *67* 回会議概要

-Coming Together to Confront Our Past, Present, and Future-
過去と向き合い未来を拓く
～衝突と多様性から生まれる新たな相違理解～

日米学生会議は、その誕生から 80 年の歳月を経た 2014 年の日米共同声明に初めて、日米交流において「不可欠なものである」と明記された。日米関係も今や歴史上最も成熟した二国間関係と言われ、会議が創設された当時の両国関係とは隔世の感がある。しかし、日米学生会議の掲げる世界平和構築の理念は達成されたと言えるのだろうか。

戦後 70 周年の節目となる 2015 年に開催する第 67 回日米学生会議は、「過去と向き合い未来を拓く～衝突と多様性から生まれる新たな相違理解～」というテーマのもと開催する。そこでは多様な個性と異文化が交錯し、個々人の多様な価値観や思考様式の違いにより摩擦や衝突が繰り返されるだろう。参加者はこの「衝突と多様性」の渦に巻き込まれ、自分とは違う個性や多様性の中から互いの相違点を認識し、相互に学べる価値、歴史、ビジョンを理解する。この未来のための「相違理解」があってこそ、初めて相互理解が可能となり、その礎となるのである。

また、来年の会議では、学生会議創設の理念である世界平和の構築が実現できたのか「過去と向き合い」検証したい。世界平和とは何か、世界平和構築のために日米両国はどのような役割を果たし、学生には一体何ができるのかを考察し、「未来を拓く」のである。そして分科会討論や政府、企業訪問、専門家との対話、広島の平和フォーラム、島根の地方創生フォーラム、会議終盤に開催されるファイナルフォーラムで会議成果を社会に発信していく。日米学生会議は、参加者一人一人がこの壮大な問いに対して、自分なりの答えを見つけ出し、自らの「未来を拓く」絶好の場なのである。

■分科会活動

本会議において活動の中心となる分科会は 7 つ設けられており、日米双方 5 名ずつの学生（実行委員 1 名ずつを含む）が、本会議期間中に議論を重ねることとなる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪問するなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。第 67 回日米学生会議における分科会は以下の通りである。

(1) Security and Non-Traditional Threats
現代の安全保障

(2) Power and Responsibility in the Business World
企業の社会的責任とリーダーシップ

(3) Religion as a Means, Religion as Meaning
宗教の意義とその役割

(4) Society and Inequality
格差と社会

(5) Media in the 21st Century
21 世紀におけるメディア

(6) Educational Approaches Today and Tomorrow
今日の教育と未来への取り組み

(7) Global Eco-hazard and Resource Sustainability
エコハザードと資源の持続可能性

■フィールドトリップ

分科会の議題や各開催地に対する理解を深めることを目的に、政府機関、国連機関、企業、大学、NGO、NPO および研究所などへ訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることができる貴重な機会であり、現場や現状を知り、議論に必要な具体的視点を得るための重要な活動となる。

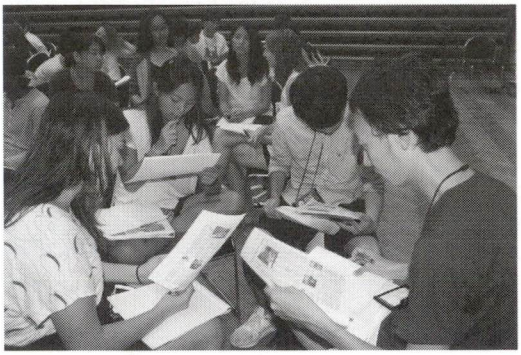
■フォーラム

第 67 回日米学生会議の各開催地で、サイトテーマに関する問題や日米両国に深く関わるトピックについて、一般公開するフォーラムを開催し、第一線で活躍する専門家、有識者の講演や学生を交えたパネルディスカッションなどを行う。これにより、参加者が各開催地で学んだ知見を深め、新たな問題意識や興味を持つ機会になることを期待する。

■スペシャルトピックディスカッション

同年代の学生である参加者が、個々の関心に沿った議題を自由に設定し、多角

的な議論を行うことを目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見および議題設定能力を養うと同時に、より広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想を得ることで、会議をより充実させることも求められる。



■ファイナルフォーラム

最終開催地で行われるファイナルフォーラムでは、1ヵ月の総まとめを行う。主として分科会における議論の概要を発表することにより、現代社会が抱える問題とそれに対する学生なりの見解や視点を第67回日米学生会議において得られた会議の成果として社会に発信する。

■リフレクション

参加者が一同に集い、1ヵ月の共同生活や、会議中に感じるであろう、議論の違いから生まれる悩みなどを自由に話し合う。参加者自身が心を開き、自ら思うことを率直に語り合うことによって、それぞれの間に相互理解が生まれ、信頼構築の一助となることを期待している。また、他者を理解する場を通して、より充実した会議に向けての姿勢が参加者の中に生まれることを目的としている。

外務省主催 第67回日米学生会議レセプション
Reception for the 67th Japan-America Student Conference
by Ministry of Foreign Affairs

Japanese Executive Committee

日本側実行委員会

松居純平
青山学院大学
法学部法学科 4 年
担当：実行委員長
財務　報告書　東京サイト

森鞠乃
学習院大学
法学部政治学科 3 年
担当：副実行委員長　「現代の安全保障」
財務　報告会　京都サイト

岡崎栞
慶應義塾大学
法学部政治学科 3 年
担当：「格差と社会」
広報　広島サイト

鈴木良祐
明治大学
商学部商学科 4 年
担当：「21 世紀におけるメディア」
選考　報告会　島根サイト

藤井一衆
シェフィールド大学大学院
法学研究科国際犯罪学専攻 M1
担当：「エコハザードと資源の持続可能性」
選考　東京サイト

村井咲絵
国際基督教大学
教養学部 2 年
担当：「企業の社会的責任とリーダーシップ」
広報　報告書　広島サイト

モンタニョミチェルルイス
京都大学
総合人間学部総合人間学科 4 年
担当：「宗教の意義とその役割」
選考　報告書　京都サイト

矢島ショーン
東京大学
経済学部経済学科 3 年
担当：「今日の教育とこれからの取り組み」
広報　島根サイト

American Executive Committee

米国側実行委員会

Hannah Jun
Smith College
Government Major 3rd
担当：実行委員長
島根サイト

Takeshi Hidaka
Carleton College
Cinema and Media Studies Major 3rd
担当：副実行委員長
「現代の安全保障」 広島サイト

Harrison Bade
Villanova University
Communications Major 3rd
担当：「エコハザードと資源の持続可能性」
広島サイト

Ken Covey
University of Hawaii Manoa
Finance & International Business Major 4th
担当：「格差と社会」
京都サイト

Lisa Kanai
DePauw University
Psychology Major 3rd
担当：「今日の教育とこれからの取り組み」
リエゾン 東京サイト

Takuo Koyama
Whitter College
Business Major 3rd
担当：「企業の社会的責任とリーダーシップ」
東京サイト

Isaac Min
University of Southern California
International Relations Major 4th
担当：「21 世紀におけるメディア」
交通 京都サイト

Sakura Takahashi
Duke University
Psychology Major 2nd
担当：「宗教の意義とその役割」
京都サイト

Japanese Delegates 日本側参加者

名前	大学	学部・専攻	学年	分科会
浅倉　由香	福島県立医科大学	医学部医学科	4 年	宗教
飯田　夏木	東海大学	教養学部国際学科	4 年	エコ
今井　けい	上智大学	総合人間学部看護学科	1 年	格差
植田　真衣	上智大学	法学部地球環境法学科	3 年	宗教
梅原　彩花	国際基督教大学	アーツ・サイエンス学科	3 年	宗教
大蔵　嶺冠	慶應義塾大学	法学部政治学科	2 年	格差
大谷　慧	東京大学	教養学部理科二類	2 年	エコ
荻原　沙理	明治大学	政治経済学部経済学科	3 年	格差
加藤　優一	東京大学大学院	公共政策大学院	M1	安保
河島　慧美	筑波大学大学院	教育研究科	M1	メディア
川端　明日香	徳島大学	医学部医学科	2 年	メディア
川部　好輝	京都大学大学院	公共政策教育部	M1	メディア
菅野　緑	筑波大学	生命環境学群地球学類	研究生	エコ
北原　祐理	東京大学大学院	教育学研究科	M1	教育
窄口　修兵	創価大学	法学部法律学科	2 年	宗教
佐藤　陽太朗	東京外国語大学	国際社会学部ラテンアメリカ学科	3 年	ビジネス
澤　晃太郎	岡山大学	工学部機械システム系学科	3 年	ビジネス
庄司　玲菜	立命館大学	国際関係学部国際関係学科	3 年	格差
白石　拓也	早稲田大学	基幹理工学部応用数理学科	2 年	エコ
杉本　夏来	慶應義塾大学	法学部法律学科	2 年	ビジネス
鷲見　まどか	京都大学	経済学部経済経営学科	2 年	メディア
竹下　友貴	大阪大学	外国語学部外国語学科	3 年	安保
伊達　佳内子	慶應義塾大学	法学部政治学科	1 年	安保
塚本　大志	徳島大学	医学部医学科	2 年	教育
野澤　知亜	大阪大学	外国語学部外国語学科	2 年	ビジネス
萩原　夏花	東海大学	観光学部観光学科	2 年	教育
矢部　真裕子	慶應義塾大学	文学部人文社会学科	3 年	教育
湯川　利和	東京大学	教養学部教養学科	3 年	安保

American Delegates 米国側参加者

名前	大学	学部・専攻	学年	分科会
Teresa Anselmo	University of California, Berkley	Anthropology & Latin American History	3rd	格差
Jacqueline Barr	Syracuse University	Public Relations & Information	4th	メディア
John Carlson Ⅲ	University of Southern California	Regulatory Science	4th	ビジネス
Robert Duanmu	Cornell University	Asian Studies & Information Science	2nd	教育
Kevin Errico	Villanova University	Economics	3rd	メディア
Stephane E. Fouche	Harvard University	East Asian Studies	4th	ビジネス
Yingzhe Fu	University of California, Berkley	Mechanical Engineering	4th	エコ
Remy Gates	Williams College	Japanese	3rd	宗教
Johanna Gunawan	Northeastern University	Political Science	3rd	安保
Caitlin Hoppel	Villanova University	Marketing & International Business	2nd	ビジネス
Dong-Hyun Jeon	Johns Hopkins University	International Studies & East Asian Studies	2nd	安保
Lillia Khelif	College of Saint Benedict	Communication	4th	宗教
Ryo Kono	Columbia University	Operations Research	2nd	教育
Jordan LaPointe	Washington and Lee University	Japanese & Global Politics	2nd	格差
Hanae Miyake	Smith College	East Asian Studies & Economics	3rd	宗教
Yuki Naruoka	University of California, San Diego	International Relations	3rd	安保
Camille Nguyen	Boston University	International Relations & Communication	M1	格差
Nicole Oka	University of Hawaii Manoa	International Business & Finance	2nd	ビジネス
Emily Okikawa	Franklin & Marshall University	Environmental Studies	2nd	エコ
Walter Pugil	Carleton College	Undeclared	1st	教育
Nicholas Reiter	Duke University	International Comparative Studies	1st	安保
Sabrina Ruiz	Wellesley College	International Relations	1st	格差
Kyle Schiller	Carleton College	East Asian Studies	2nd	宗教
Lia Wang	Wellesley College	English	3rd	メディア
Catherine Warmuth	Ivy Tech Community College	General Studies	2nd	教育
Emma Woodyard	University of Colorado	Political Science	3rd	メディア
Chiao Chun Yang	University of California, Berkley	Chemical Engineering	4th	エコ

安倍晋三
内閣総理大臣からのメッセージ

第67回日米学生会議の開催を心からお祝い申し上げます。

日米学生会議が，両国の学生の企画・運営により1934年にその活動を開始されて以来，長きにわたり両国の相互理解と友情の促進に大きく寄与してこられたことを非常に喜ばしく思います。

日米両国は，自由，民主主義，人権，法の支配といった基本的価値の下で，強固な同盟の絆で結ばれています。私は先般の米国連邦議会での演説において，その日米同盟が，21世紀において「希望の同盟」として世界が直面する諸課題に手を携えて取り組み，より良い世界を実現するために協力していくというビジョンを示しました。

日米学生会議の先輩方は，戦前から続く強い友情と信念に基づき，今日まで会議が継続されるよう不断の努力を重ねてこられたと伺っています。日米学生会議によって育まれ，脈々と引き継がれてきた皆様の友情が，日米両国間の国民交流を，一つの大きな柱として支えてきたのだと言っても過言ではないでしょう。

本年の日米学生会議のテーマは，「過去と向き合い未来を拓く～衝突と多様性から生まれる，新たな相違理解～／-Coming Together to Confront Our Past, Present, and Future-」と伺っています。この夏，皆さんが率直に議論を重ねることで，新たに日米の友情を育まれることを期待しています。

皆さんは両国の未来への希望です。皆さんが「希望の同盟」の将来をしっかりと支える，心の紐帯で結ばれた友人同士となることを心から祈念し，私のお祝いのメッセージといたします。

平成27年8月4日

日本国内閣総理大臣　安倍　晋三

■□第 3 章

事前活動

ー第 3 章 事前活動ー

＊報告会＊

■概要・目的

第67回日米学生会議実行委員会が発足してから 3 ヶ月。第 66 回日米学生会議報告会兼、第 67 回日米学生会議説明会を開催した。会の趣旨としては、アメリカで開催された第 66 回会議の報告を通して、会議にご協力していただいた全ての方々への感謝の意を表すとともに、日米学生会議の社会的意義を広く世間に発信することである。また、第 67 回会議の会議概要を初めて公式に発表する場でもあった。青山学院大学にて開催された会には、応募を考えている大学生や高校生、日米学生会議のアラムナイなど 140 名を超える方々にお越しいただき、大盛況のもとに終えることができた。

■スケジュール

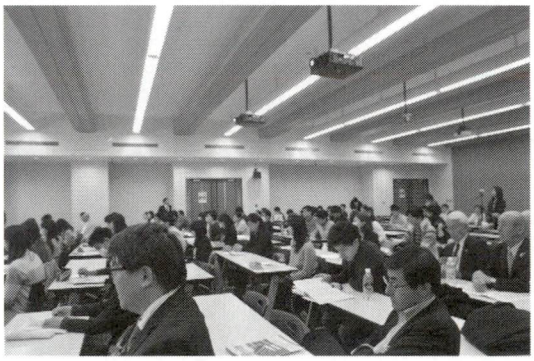
【日時】2014 年 12 月 6 日(土)

【場所】青山学院大学青山キャンパス 17 号館

■コンテンツ

◇第 66 回日米学生会議報告

会議報告のパートでは、第 66 回会議の事前活動や、アメリカで訪れた 4 つのサイトの活動報告、また各分科会の議論の報告が行われた。当会議の 1 年間の歩みを報告することを通して、日米学生会議がどのような活動を行っているのか発表した。



報告会当日の様子

◇基調対談

基調対談では、多方面で活躍されている日米学生会議の先輩方をお迎えしてお話を伺った。日本経済新聞社関口和一氏（第 31 回、32 回参加）、三井不動産株式会社冨川秀二氏（第 32 回、33 回参加）のお二方にご登壇いただき、日米学生会議での体験談やご経験がその後のキャリアにどう活かされているかお話を伺うことができた。お二方とも過去の日米学生会議にて実行委員長を務めており、ハーバード大学大学院に留学されていたという共通点を持つ。お二人のお話から日米学生会議に参加した先輩方の行動力や、その幅広い知見を知ることができ、来場者にとって今後の人生の見本となるような対談であった。

◇パネルディスカッション

モデレーター1 名を含む、第 66 回日米学生会議参加者 4 名によるパネルディスカッションを開催した。日米学生会議に応募した理由や、会議で一番印象的であったこと、会議を経てどのように成長したかなど、実体験を交えてお話いただき、次年度参加者が日米学生会議とはどのようなものであるかイメージできるようなパネルディスカッションであった。また会場からも質問をいただき、多くの方に興味を持って頂けた。

◇第 67 回日米学生会議説明

2015 年 8 月に開催される第 67 回日米学生会議のテーマ、開催地、分科会、選考試験概要について初めて披露する場となった。第 67 回実行委員が創り上げてきた会議の構想を発表し、次年度会議がどのようなものになるのかを参加者に伝えた。

＊選考＊

■概要・目的

参加者選考は 1 月から 3 月にかけて、二段階で実施された。一次選考は論述試験を課し、二次選考は一次選考合格者に対して、最終合格を決めるため面接形式の選考をおこなった。二次選考に関して、今年度は京都、広島、東京の三つの会場で、以下の日程の通り開催された。

■スケジュール

◇京都選考

【日時】2015 年 3 月 12 日(木) ~3 月 13 日(金)

【場所】京都大学 吉田南キャンパス
吉田国際交流会館

◇広島選考

【日時】2015 年 3 月 15 日(日)

【場所】広島大学 東千田キャンパス

◇東京選考

【日時】2015 年 3 月 21 日(土) ~3 月 24 日(火)

【場所】日米会話学院 四ツ谷校

■コンテンツ

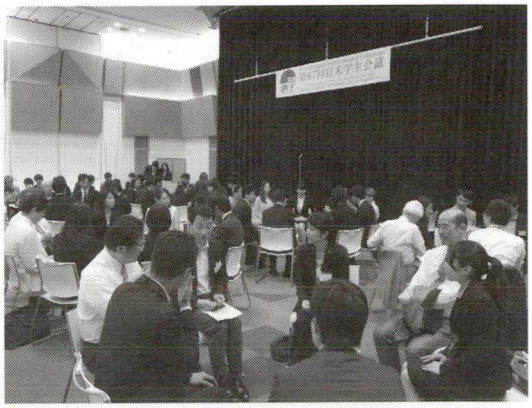
京都選考では、例年通り西日本に在住する学生を中心に選考を行った。今年度は京都大学で 2 日間に渡り試験を開催した。また今年度は例年二次選考が開催される京都・東京に加え、広島を試験会場として設置した。広島のみならず、四国や九州地方からも応募者が集まった。最後の二次選考は東京都にて行った。例年通り東北及び関東圏を中心に多くの学生が集まる選考であるため、4 日間日米会話学院で開催された。

京都選考にて

＊春合宿＊

■概要・目的

４月の選考委員会により最終決定した28名の参加者が２泊３日の合宿で初の顔合わせを行う。本合宿において、参加者は過去の会議参加者との交流を深め、日米学生会議の歴史を学ぶとともに、英語でのディスカッションや分科会活動などを初めとする日米学生会議の基礎を身に付け、夏の本会議に向けて最初の一歩を踏み出す。



ようこそ先輩にて座談会

■スケジュール

【日時】2015年５月２日(土)~５月４日(月)

【場所】国立オリンピック記念青少年総合センター

■コンテンツ

◇ようこそ先輩・懇親会

日米学生会議過去参加者の方々にお越しいただき、会議が現在のキャリアにどのように活かされているのかというエピソードや参加者に向けたアドバイス等様々な貴重なお話を伺う機会を頂いた。また、懇親会でも過去の会議における思い出話に花を咲かせる場面も見受けられ、大変有意義な時間となった。

アラムナイの方々との懇親会

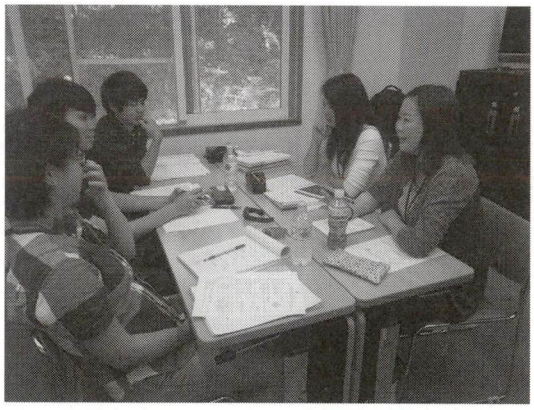
◇日米関係勉強会

日米関係について深く考え議論する時間を設けることで、参加者はディスカッションを行うことの楽しさを実感し、本会議に向けてのウォーミングアップとなった。現在の日本を取り巻く安全保障問題やテロへの脅威などについても触れながら、日米両国がどのような関係を築いていくべきなのか、熱く語りあった。

日米関係勉強会

◇分科会発表

最終日に行われた分科会発表は、三日間を通して分科会内で話し合ってきたことを英語で参加者間に共有する時間である。本会議までの準備期間でどのような議論に焦点を当てたいのか、本会議においてアメリカ側参加者と何を話し合いたいのかを10分間で伝え、5分間のフィードバックを他参加者からもらうという構成であった。フィードバックでは、多くの質疑応答が飛び交い、お互いの発表を熱心に聞き合っていた。



参加者同士のディスカッション

＊防衛大学校研修＊

■概要・目的

本研修の目的は、神奈川県にある防衛大学校での一日の研修を通して、日本の安全保障について見識を深めることにある。当日は、教官の方々による講義、防衛大学校内の見学ツアー、そして防衛大学校生の方々との討論会が行われた。一日の最後には防衛大学校生との懇親会も開催されるなど、学生同士の交流を促す場も設けられた。

今年は戦後70周年の節目の年であったのに加え、国会における安全保障関連法案の審議が世間を賑わしていたのもあり、例年にも増して、自衛隊および日本の国際貢献のあり方について真剣に考える良い機会となった。

自衛隊の海外派遣はどうあるべきか、また日本を取り巻く安全保障上の変化にどう対応するべきか、そしてこれからの日米同盟はどうあるべきか、というような本質的な問いについて現場の自衛官の方々からお話を伺い、防衛大学校生の方々と議論を交わしたことは、8月に本会議を控えていた私たちにとって大変貴重な経験となったと言える。

■スケジュール

【日時】2015年6月5日(金)

【場所】防衛大学校

■コンテンツ

◇特別講義① －日米関係・軍事技術－

午前中の特別講義においては、加藤准教授から日米関係について、そして大久保１陸佐から日本の軍事技術についてご講演頂いた。それぞれ45分ずつの短い講義であったが、パワーポイントや資料を使用して、専門性の高い内容を分かりやすくご説明頂いた。日本の軍事技術というセンシティブな内容についても、アメリカの国家戦略と具体的な研究開発との比較を通して、日本の研究体制とこれからの取り組みについて丁寧にご説明頂いた。

日米関係についてのご講演

◇防衛大学校ツアー

防衛大学校内を巡るツアーでは、本部庁舎、記念講堂、資料館を案内して頂き、自衛隊の歴史や、防衛大学校生の方々が日々どのような訓練を受けているのかについて、そして留学生も受け入れていることについてご説明頂いた。資料館では防衛大学校について解説したビデオを鑑賞したほか、自衛隊の設備も間近で見ることができた。ツアーの最後では防衛大学校生が隊列を組んで行進する様子も見ることができ、その姿に学生会議参加者は感銘を受けた。

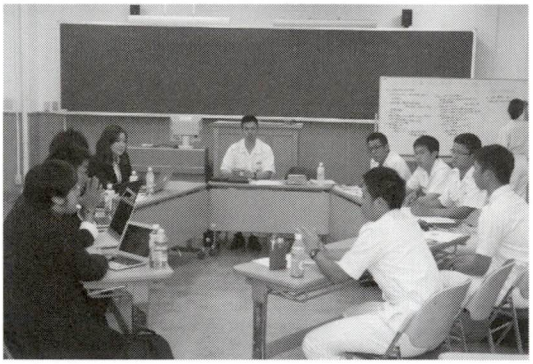
防衛大学校ツアー

◇特別講義② －武器輸出・海外派遣－

午後の特別講義においては、大井２海佐から日本の武器輸出の今後について、そして中野２陸佐から自衛隊の海外派遣についてご講演頂いた。お二人のほかにも、教室の後ろに多くの自衛官の方々に座って頂き、講義後の質問に対して皆さんに補足の説明を頂いた。海外派遣の講演では、安保法制の議論について、駆けつけ警護を例に挙げた上で法整備の必要性を力説頂いたほか、今後の課題として、自衛官の帰国後のケアを挙げて頂いた。

◇学生討論会

分科会ごとに行われた討論会では、100分の時間を半分に分けた上で、前半では「日米同盟の将来」または「自衛隊の国際貢献」について討論し、後半では各分科会が予め用意した質問に沿って討論が進められた。分科会のテーマに沿って行われた後半の討論では、議論が進まなかったところもあったが、学生会議側の学生による素朴な疑問についても話し合われた。防衛大学校生の方々に議長を務めて頂き、建設的な議論を行うことができた。



学生討論会

◇懇親会

一日の研修の締め括りに、食堂において学生同士の懇親会が行われた。学生討論会の時の緊張した雰囲気と異なり、お互いに打ち解けた雰囲気の中で、討論会での話し合いの続きを行った。同年代の学生として、各防衛大学校生の考えを知る良い機会となった。最後に全員で集合写真を撮り、防衛大学校の正門前に移動して最後のお別れをすることになった。雨の中、私たちを見送って頂いた防衛大学校の方々の姿が強く印象に残っている。

懇親会

全体集合写真

＊原子力発電研修＊

■概要・目的

当研修は『原発再稼働問題』をテーマに、福井県にて問題を現場で体験することで、問題意識を高め、解決に向けて意欲的に取り組めるような環境作りを目指し、開催された。

福井県は日本最多の原発を抱え、その経済を原発に依存していることで知られている。行政や地域住民の生活も原発抜きに語ることはできない。しかし、老朽化した「高浜原発」や、安全性が疑問視される「もんじゅ」、断層上にある「敦賀原発」など数多くの原発を有する福井県は、東日本大震災での原発事故以降、岐路に立たされている。私たちは、原発再稼動が議論される現在、実際に福井県に赴くことで、地元の方々が原発をどうとらえているか、また、行政、企業はどのような視点を持っているのかを伺うのと同時に、原発賛成・反対の二元論のみに留まることなく、さらにその先の問題解決に向けて、地元・行政・企業の3者と議論する場を共有していきたいと考え、当研修を企画した。

■スケジュール

【日時】2015年6月26日(金)~6月28日(日)

【場所】福井県(福井市、敦賀市、三方郡美浜町等)

■コンテンツ

◇美浜発電所見学・関西電力講演

美浜発電所内の施設を実際に見学し、関西電力様より原子力発電に関して「企業」の目線からご講演を頂き、その後質問にもお答え頂いた。関西電力様の安全対策や原子力発電にかける思いや、日本がなぜ原子力発電を行うのかという背景、またエネルギー自給率の低い国に存在する電力会社としての使命等を、利益活動のみを行う企業の視点ではなく、国の一事業を担う企業としての視点から、多岐に渡るお話を頂くことができた。

美浜発電所見学

◇福井新聞社訪問

地元に密着し、長年原子力発電報道を続けてきた福井新聞社様を訪問し、メディアによる原発報道の在り方を考えた。ご講演では、賛成・反対どちらに偏ることもなく、あくまで中立の姿勢を貫き、全国紙とは異なり、地元新聞社だからこそ

できる紙面作りに取り組む福井新聞社様のご意向を伺うことができた。ご講演後には質疑応答の時間を設け、地元新聞社として行う原発報道をいかに全国に伝えていくか等、活発に質問が寄せられた。

福井新聞社訪問

◇敦賀駅前商店街訪問

敦賀駅前商店街を実際に見学し、商店街の皆様によるご講演を頂き、地元「市民」の視点を伺った。原子力発電所の稼働停止によって実際に雇用面や需要面でどれほどの影響を受けたか、商店街にて行われたアンケート調査を使いながら、市民目線の率直なお話を頂くことが出来た。また、原発との関連だけではなく、地方の商店街がいかに今後生き残るかに関してもお話頂き、新たな地方の課題にも目を向ける機会となった。

敦賀駅前商店街訪問

◇敦賀市企画政策部原子力安全対策課職員の方による講演

敦賀市の職員のお二方をお呼びしてご講演を頂き、「行政」の視点を学んだ。原子力発電と敦賀市の行政の関係や、市が行う原発の立ち入り調査について非常に詳しく教えて頂いた。また、原発関連の補助金について、補助金を考慮せずに財政計画を立てている現状等まで踏み込んでお話を頂くことができた。ご講演だけではなく、敦賀市が地元市民に配布する資料や、報告書、データ等を提示しながら説明をして頂いた。

◇福井から原発を止める裁判の会松田様、市議会議員今大地様 ご講演

福井地裁による高浜原発再稼働差し止め仮処分を受け、実際に反対活動を行っている市民団体「福井から原発を止める裁判の会」の松田様と、数少ない原発反対派の市議会議員の今大地様にご講演を頂いた。松田様からは、原発再稼働に明

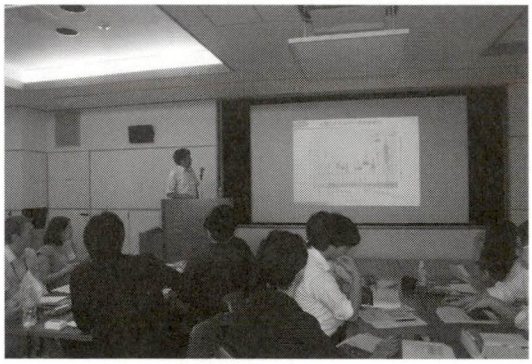
確に反対する理由やその思い、どのような行動を起こしているのかについて伺い、今大地様からは原発賛成派が多数を占める中で政治的活動を行うその状況やその思いを伺った。

今大地様ご講演

◇地元学生との勉強会

当研修の集大成として企画した当勉強会は、福井大学にて原子力を専門に学んでいる大学生 10 名と共に行った。冒頭に日本原子力研究開発機構より入江勤様をお呼びし、原子力発電の仕組みを始めとした技術面のご講演を頂いた。その後、「3.11 以降の原発に対する危機意識の変化」「原発報道の在り方」をテーマに、両学生がプレゼンテーション・スピーチを行った。最後に、日米学生会議参加者と地元学生全員によるディスカッションを行い、当研修は幕を閉じた。

地元学生との勉強会



JAEA 入江様ご講演

＊勉強会＊

■概要・目的

第67回日米学生会議では、集団的な学習機会を提供すべく、いくつかの勉強会を企画した。毎年行われる防衛大学校研修翌日の勉強会に加え、今年度は専門性高い英語講義の提供やプレゼン、ディスカッション、ディベートの練習機会を増やすことで、アメリカ側の学生と合流する本会議に万全の態勢で臨めるように準備することを目的としており、日頃の学習環境とは異なる環境を提供することを趣旨としている。

■スケジュール

◇勉強会

【日時】2015年6月6日(土)

【場所】日米会話学院　四ツ谷校

◇オンライン討論会

参加者の予定に合わせて随時開催

■コンテンツ

◇勉強会

勉強会は主に4つの柱から構成されている。①防衛大学校研修のリフレクション、②英語ディベート、③アメリカに関する講義、④原子力発電研修事前学習である。防衛大研修リフレクションでは前日訪問した防衛大学校について他の参加者と共有し、体験したことをインプットのみならず、アウトプットすることを目的としている。次の英語ディベートでは英語で自分の意見を伝えるのみならず、相手の意見に対しきちんと反応する練習機会を提供する。アメリカ人に議論の主導権を握られ、日本人があまり対応できないという例はよくあることであり、きちんと日本人が自らの意見を発言し一方的な議論にならないことを意識することを目的としている。アメリカに関する講義では日米会話学院の大井理事長からアメリカ政治についての講義を拝聴した。これはアメリカ側と合流時にありがちな文化的衝突の緩和のみならず、基本知識としてアメリカ側がどのような考えを有しているのかを共有し、有意義な本会議を迎えることを目的としている。最後には原子力発電研修事前学習として、福島県双葉郡で医師会長を務め、震災当初から仮設診療所の立ち上げに尽力、救急隊との連携を強化し、地域住民のために全力で取り組んでいる井坂晶氏による「東日本大震災と原発事故時の医療について」と題してご講演を頂いた。参加者にとって東日本大震災時の医療について現地の声や様子を直接伺うことが出来たのは貴重な経験であった。井坂先生が指摘していた、行政、企業、個人間の溝に関する問題が如何に難しいのかを直接経験した上で尚もその課題に取り組んでいる方か

ら聞くことで、その課題をより現実味を実感し、その困難さを痛感したのではないだろうか。本当にご多忙の中、貴重な時間を割いていただいた井坂先生に心より感謝申し上げたい。

◇オンライン討論会

オンライン討論会の趣旨は三つある。一つ目は英語力の向上である。この討論会においては、日本語を使用することは厳禁であり、全て英語で行われた。二つ目は論理力である。論理力を高めるためにシンプルな議題を毎回設定し、参加者は時には深く哲学的な問いまで突き詰めていった。この討論会ではただ自分の意見を発言するだけではなく、お互いの意見に対し、反論や疑問を投げかけることで意見交換ではなくディベートのような議論が展開される。参加者はお互いに反論されないように試行錯誤し、自分の主張を論理的に組み立てることで論理力に磨きをかける。そして三つ目はグローバルレベルでの知識共有である。議題は結婚や宗教などシンプルに設定しているが、議論の主張や根拠は日本に限らず世界レベルでの歴史や事例を提示し、より広く物事を捉えられるようにした。参加者は回をこなす毎に世界の時事や歴史に目を向けて調べるようになり、討論会では常にグローバルレベルでの議論が展開された。このように英語を使用し、広域な視点で論理的に考える環境を提供することでアメリカ側と合流した時に自分の意見を提示する力を身つけた。

勉強会での様子

＊宗像国際環境 100 人会議＊

■概要・目的

2015 年度に開催された宗像国際環境 100 人会議は、古来国際交流の拠点として栄えた福岡県宗像市において地球環境保全と次世代の人材育成を目的として 2014 年より毎年開催されるものであり、今年度は「海と生きる～海と森との共生～」をテーマに学者や専門家、国際機関関係者、企業家、金融機関関係者、国や自治体関係者、市民活動家、文化人など地球環境保全の為に前線で活躍されているリーダー達に加え、未来を担う大学生が国内外から招集され、国や文化、世代を超えて、地球が抱える問題を理解し、お互いの価値観を共有しながら協議した。地球が抱える問題を理解し、解決策を議論し合うのみならず、いかにして行動へ移す事ができるのかを考案するなど、青少年の知識と関心を高めつつ、未来の国際人を育成しながら、地球市民として何ができるのかを有識者・企業人・学生が一体となって考える貴重な体験であった。

■スケジュール

【日時】2015 年 5 月 22 日(金)~5 月 24 日(日)
6 月 21 日(日)

【場所】福岡県宗像市のオテルグレージュ
日本赤十字九州国際看護大学

【主催】宗像国際環境100人会議実行委員会／UBrainTV株式会社

【共催】宗像市／宗像市教育委員会

【後援】環境省／福岡県／ユネスコ政府間海洋学委員会（IOC）／WWF Japan 東京大学大気海洋研究所／United Brain Networks Ltd.／朝日新聞社／西日本新聞社／毎日新聞社／読売新聞社／NHK 福岡放送局／RKB毎日放送／九州朝日放送／FBS福岡放送／TNCテレビ西日本／TVQ九州放送

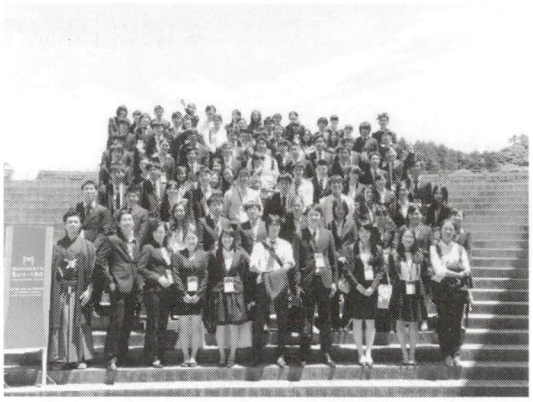
【公式サイト】
http://www.munakata-eco100.com/2ndMUNAKATA.html

【イベント内容】
http://www.munakata-eco100.com/2015programme0518.pdf

■総括

三日間にわたる濃密な時間を過ごし、知識を吸収し、それを生かした議論と交流を繰り返し、学生にとってはまたとない貴重な体験となった。屋内で議論するのみならず、宗像にある海や森林などの大自然を満喫することで自然と一体化し、

こうした環境下に触れた学生は都会では感じることのない恵みを得たことで、環境に対する心理的変化が起こったことは間違いない。既に積極的に環境に取り組んでいた者、興味がある者、興味はあったが理解できなかった者、興味がなかったが芽生えた者等、多種多様な学生が全国から集まりその知識の断片を共有することで議論を促進させ、交流が深まったはずである。インプットとアウトプットを同時にできる環境は少ない。だがこうした貴重な会議に日米学生会議は昨年に引き続き招待されており、それに応えるべく日米学生会議所属の学生の多くが本年度も参加した。ここで知り合った仲間は共に環境問題に何らかの形で取り組み、再会することになるだろう。



全体集合写真

レセプションにて

＊YFJヘリテージ＊

■概要・目的

ヘリテージとはYouth Forum Japanが開催する二大行事のひとつであり、その年の日米学生会議参加者への激励会としての意味を持つ。今年は戦後70年ということで、学生は世界の将来を視野に入れるべきである。学生の描くべき未来は何か、各界第一線でご活躍中の島田誠一氏(津田塾大学理事長)、羽場久美子氏(青山学院大学大学院教授)、そして渡部恒雄氏(東京財団上席研究員)のご講演を通して答えを見出したのではないだろか。

島田誠一氏の「第三の坂の上の雲」、羽場久美子氏の「パワーシフトとアジアの地域協力」、そして渡部恒雄氏の「米中関係と日本の戦略」はとても聞き応えがあるものであった。特に興味深かったのが日中米関係についての話である。アジア諸国の関係を説明した上で、これからどのような手法をもとに改善すべきなのかを説かれ、日本の経済成長の背景、アジアにおける日本の立ち位置の変化、米中関係と日本への影響についての分析がわかりやすく説明されており、その純粋な分析力が参加者を魅了していた。日米学生会議ということもあり、主に日米関係を中心に考えることが多いが、改めて日米関係のみならず日中関係からも物事を違う角度から見る必要性を感じた。各講演ともそれぞれ違う味の内容ではあったが、世界を舞台にして働くことへの面白さと国際関係の難しさを話の中から感じとることができたのではないだろうか。参加者からは「純粋に知識として新鮮」という感想が圧倒的であったが、中にはもっと国際関係について学ばなくてはならないという危機感を感じていた参加者もいた。これをきっかけにして是非、参加者には今後もこのような機会を生かして、様々な有識者による多様な観点からの講演等に参加して欲しい。

講演の前後には国際海洋裁判所判事であり Youth Forum Japan 会長の柳井俊二氏が学生への激励講演を行い、懇親会では Youth Forum Japan 特別顧問である愛知和男氏(日米地域間交流推進協会理事長)より乾杯のご挨拶を頂くなど豪華な方々との交流が果たせた。

【主催】ユースフォーラムジャパン
(略称 YFJ)
【協力】(財)日米地域間交流推進協会
【公式サイト】http://youthforum.jp

■スケジュール

【日時】2015年6月7日(日)
【場所】日本外国特派員協会
有楽町電気ビル北館20階

■コンテンツ

◇第 6 回 YFJ へリテージ
(学生激励講演会)

ご挨拶 柳井俊二 YFJ 会長(元外務次官)

講演及び質疑(40 分程度)

1 島田精一 津田塾大学理事長 元三井物産副社長
“第三の坂の上の雲”の時代

2 羽場久美子 青山学院大学大学院教授 ISA 世界国際関係学会次期副会長
“パワーシフトとアジアの地域協力”

3 渡部恒雄 東京財団上席研究員
“米中関係と日本の戦略”

学生紹介(第 67 回日米学生会議日本側参加者／国際学生会議実行委員)

第10回ユースフォーラム結果報告と次回フォーラムの案内

レセプション 乾杯 愛知和男特別顧問

■総括

日米学生会議参加者の激励会、へリテージ。今年度も本会議を前にして期待と好奇心に満ちあふれる学生たちを、元三井物産副社長の島田様、青山学院大学大学院教授の羽場様、そして東京財団上席研究員の渡部様からの基調講演と、交流会を持って激励して頂いた。 前半の講演はアジア情勢を踏まえた内容となっており、第一線でご活躍される中で蓄積された最先端の知識を踏まえた国際社会における日本のポジションや将来性を再認識する絶好の機会であった。戦後日本の経済成長の背景、アジアにおける日本の立ち位置の変化、米中関係と日本への影響などは純粋に知識として新鮮なだけにとどまらず、日米関係だけでなく中国にも目を向けた方が良いというメッセージを受け取り、参加者もその重要性を噛み締めているのではないだろうか。各国から見た日本という視点で物事を深堀りする重要性を改めて認識し、本日受けたインパクトが学生の今後の成長にも影響しているのではないかと願っている。またレセプションは、多様な方々との交流の機会として有意義な時間となった。こうした社交の場で普段は接することのない社会人の方々と意見交換をすることが学生の今後の成長を促していると感じており、今後もこのような機会を活かし、我々自身もその関係性をその先へ繋げていきたい。総じてへリテージは、防衛大学校研修から始まった JASC 行事にあふれた 3 日間に相応しい締めくくりとなった。改めて関係者の皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げたい。

＊参加者による感想文＊

■春合宿

春合宿を通じて、「自分」という物を真剣に見つめなおすことができた。収拾がつかなくなるほど個性豊か、心から尊敬できるメンバーとの議論は、自分の立ち位置を考えるきっかけとなり、本会議に参加するにあたり、改めて「自分」がどうなりたいのか深く考えることができたように思う。そして、個性を表現することを受け入れてくれる仲間に出会うことができたのも、自分の人生にとって大きな財産になった。（澤晃太郎）

今回の春合宿ではさまざまな経験をして多くのことを感じた。今までのディスカッション経験がほぼなかった自分は、合宿前は正直自分がみんなとのディスカッションについていけて、うまくやっていけるのかが不安だった。しかし、様々なアクティビティを通じてみんなとすぐに打ち解けることができ、自由時間には親友のように深い話ができたのは非常に印象的だった。初日の懇親会で改めて自分が日米学生会議の一員になれたことを実感し、本当に光栄に思い、この機会を今後も存分に活かしたいと感じた。

（佐藤陽太朗）

■防衛大学校研修

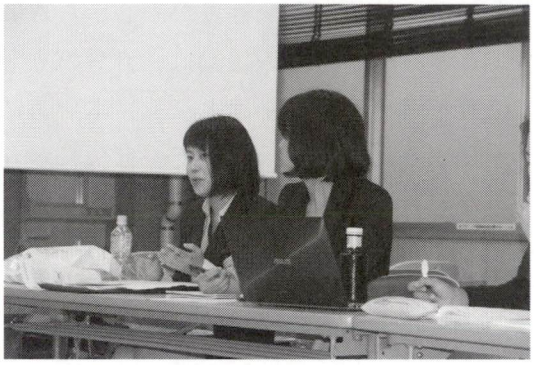
本研修を一言で総括するとすれば、自衛隊を海外派遣することの意味を再考する一日であったと言えよう。防衛大学校研修は、安全保障関連法案に関する与野党の議論が盛り上がり始めていた、まさにその時期に行われた。大学学部時代から国際政治や国際法を学習し、「現代の安全保障」分科会に所属している私にとって、格好の学びの場であった。

そして防衛大学校の諸先生方の講義を聴き、将来の幹部候補生との議論を通して改めて思ったことがある。それは、外交の重要さである。自衛官は、有事となれば自分の意思とは無関係に必ず現地へ向かい、任務を遂行しなければならない。上官の命令は絶対だからである。従って幹部候補生には、すでに国を背負って立つ矜持のようなものを感じ取れた。一方で、彼らの漏らした次の言葉を見逃してはならない。「そもそも自分たちが必要とされるような事態が起こって欲しくない。」これが本音である。ならば国家が最重要で為すべきことは何か。それは、国の存立を脅かすような危機を未然に防ぐことである。将来の自衛官と親しくなることで、ますます外交の重要性を思い知らされた、密度の濃い研修であった。

（加藤優一）

学生討論会にて

防衛大学校には、全身真っ白な制服に身を包み颯爽と歩く学生がいる。大学の4年生といえば自分と同い年だが、学生にしてすでに数百人の部下を指揮する防衛大学校生の思考や立ち居振る舞いは、明らかに他の同年代よりも成熟している。そしてひとたび議論となれば、戦争と国防について大きな危機感を持っていることが伝わってくる。私にとって、そして大多数の日本人にとって新聞やテレビの中の出来事である戦争は、彼らにとっては当事者問題なのである。それと同時に、彼らにも「普通の大学生」と変わらない一面があり、社会に出ていくことへの不安も同じようにあるのだということが分かってきた。厳しい訓練や集団生活は防衛大学校の学生を強くたくましくかつ冷静な人間にするかもしれないが、彼らもほんの数年前まで同じ高校生だったのであり、実際に話してみれば親しみを感じた。国防というミッションを果たすために遠泳、部活動、夏の訓練などにいそしむ彼らの姿を目の当たりにして、自分も戦争や日本の自己防衛というものに興味を持ち、理解し、日本の平和を陰ながら支える社会人にならなくてはいけないと考えた。（浅倉由香）



学生討論会にて

■原子力発電研修

今回の研修を通じて、原発を取り巻く様々な立場に置かれている方のお話を伺えたことで、私は原発に対する理解を深めることができた。原発をより安全なものにしようと設備の改善をしておられる関西電力の方や原発が停止した後に衰退してしまった商店街の方、さらに地元の脱原発派の女性議員、それから地元の福井新聞社の方など、それぞれの原発に対する思いは葛藤が混じる複雑なものだった。私は「21世紀におけるメディア分科会」に所属していることもあり、メディアの原発に関する報道の仕方に興味があった。改めて感じたのは、新聞という一私企業が紙面の限られたスペースを使って中立に報道することには限界があると

いうことだ。私たちはこの報道の限界を再認識し、今回の研修のように実際に足を運んで地元の人たちに耳を傾けることが必要である。こうして地元を訪れることで、メディアの報道では分からなかった現状を把握することが可能になり、当事者意識が芽生えるのだと思う。(河島慧美)

今回の福井研修のテーマは原発である。この自主研修は異なる3つの立場から意見を伺うという風に成り立っていて、1つは原発施設、2つ目は地元の商店街、3つ目は福井新聞社である。また、原発推進の立場である方と原発反対運動を行っている市議の方のお話を聞く機会も設けられている。現地に行って感じたことは「原発がタブー視されているということ」だ。敦賀市には原発関連施設で働き生計を立てている方も多く、地元は原発と共存している。しかし、話の中では話題を避けている印象を受ける。このことを克服するには「国民が原発を安全だと根拠を持って信じることができる」状態に持って行く必要があるのだろう。政府、関連団体が声を大にして発言しても、地元の方にとってはまるで他人事のように議論しているというような印象を抱きかねない。なぜなら、彼らは原発とは遠いところに住んでいるのだから。一方で反原発の立場を見てみると科学的根拠が足りない気もした。莫大なエネルギーを生む以上、完全に安全な発電所というのもない。運営上でのリスク、費用、代替となり得るエネルギーの発電方法などを理論立てて取り組むことで他者の理解が得られるのだと思う。(竹下友貴)

■その他事前活動–勉強会

全体的に学ぶことが多い一日であった。特に印象的だった、JASC論、ディベート、井坂先生のお話について述べると、まずJASC論については、JASCer内で話すようであまり話さないトピックだなと感じた。他のメンバーがどのようにJASCに対して思っているのか、これからどうしていきたいか改めて知ることができてとても有意義な時間だったと思う。ディベートについてはとても勉強になった。その後、大学の授業でもディベートをする機会があり、ここで学んだことを活かすことができた。今回教えてもらったことはディベートの中でもほんの一角だったのだろうと思うので、もっとディベートの方法や考え方を学習したい。そして、井坂先生のお話については福島の現地で生活している方からお話を伺えて、リアリティーを持って聞くことができた。震災と医療というテーマについて初めて考えましたが、どの分野に関しても社会制度と人員不足は大きな問題だと感じ、お話を聞いて原発問題も含めて、震災について知識をもっと深めていきたいという刺激を受けた。(梅原彩花)

勉強会はJASCについて一旦振り返り、さらに今後の JASC の活動を考えていく上でも非常に有意義であった。一番印象に残ったのは井坂様の福島県での医療活動の講演。テレビや新聞でしか見聞きした知識しか自分にはなかったが、実際にお話を聞くことにより福島県の医療に興味を持つことができ、現地の人に寄り添う医療活動の大切さを再認識した。勉強会の中では、今年の JASC のテーマの一部でもある「相違理解」という言葉についてもう一度考え直し、私にとってのJASC はどうあるべきなのかを再び自分自身に問う良い機会でもあった。今回の勉強会を通してディベートのスキルなど、自分にまだ足りていない面も発見できたので、今後の改善点として素晴らしい会議にするためにも取り組んでいきたいと思う。(飯田夏木)

■その他事前活動–YFJ へリテージ

国際関係、特に日米関係を中心とした情勢の専門家や実業家が集う機会で、普段あまり深く議論したことのないトピックについて考える時間となった。英語での講演も、内容・プレゼンの仕方を学ぶ上で大変興味深かった。また他の学生団体と場をともにして、他者が挙げる質問とそれに対する応えを聞くことが刺激になった。ただし自分の勉強不足や国際関係学領域に関する講演が多かったことに起因して、全ての講演を積極的に聴き、議論し、理解するのにはやや難しさがあったように感じる。最後のレセプションは、少しでも人と交流する時間があり大変有意義であった。(北原祐理)

日本文化勉強会に参加した関係で途中参加となったが、改めて JASC というプログラムの持つ影響力・その歴史の重みを自覚する機会となった。各界の著名な方々にご講演いただき、たとえば日中関係の基礎的知識についてはもちろん、第一線で活躍なさるからこそ得られる最先端の流れなどをご教示いただいたことは国際社会における日本のポジションや、将来性を再認識する絶好の機会となった。会の後開かれた懇親会では、自分自身少し緊張していてあまり積極的に参加された方と交流ができなかったのが残念でしたが、JASC から派生した他のプログラムや、OB のご活躍などを知ることができ、プログラム後の展望なども少し見えてきたように感じる。JASC の行事にあふれた 3 日間の締めくくりとして最高の機会であった。(杉本夏来)

■□第４章

直前合宿及び本会議

—Hiroshima —

August 3rd-8th

1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、世界で初めて原子爆弾が投下された広島は、この夏、被爆 70 周年を迎える。当時は 70 年間草木も生えないと言われていたが、被爆 3 日後に市内電車の運行が再開され、キョウチクトウはどの草花よりも先に開花した。また戦後の食料不足を解決するためお好み焼きが開発され、カルビーも創設、 現在では牡蠣の水揚げ量やレモン出荷量が日本一となるなど、広島は予想を遥かに超えて発展した。2015 年は戦後 70 周年という節目の年であるが、参加者は平和祈念式典の参列や平和フォーラムの企画により原爆投下の惨禍に向き合い、現地の市民や学生と共に意見を交わす。また、広島における産学金官の強固な関係構築や、 新たな成長分野の育成を目指す現在の産業戦略にも目を向ける。

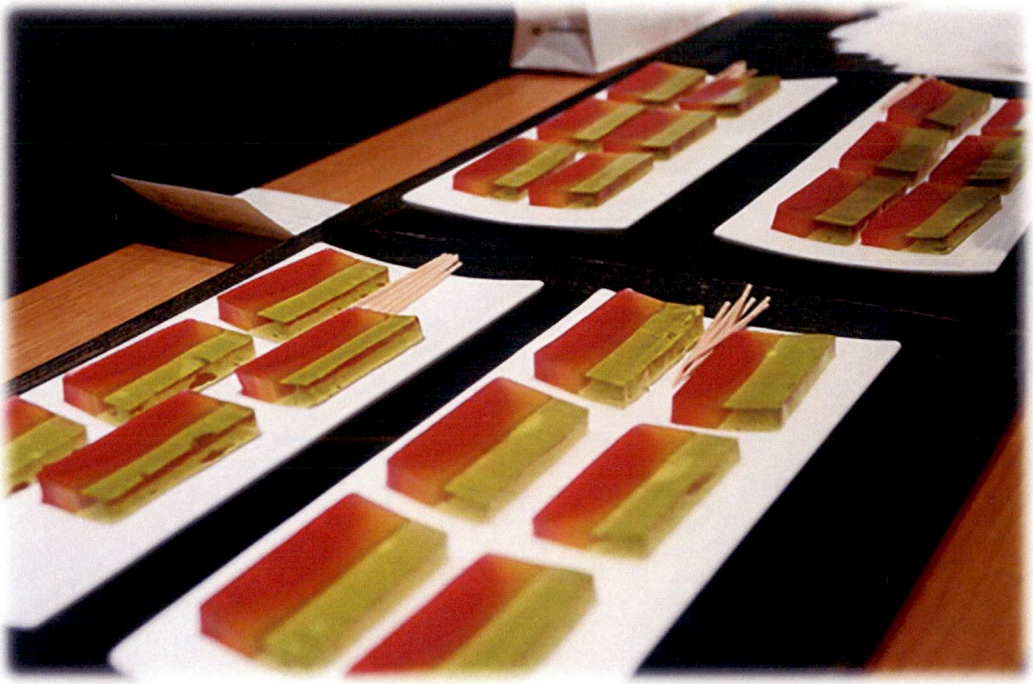
—Shimane —

August 8th-14th

山陰地方の西部に位置し、古くから栄えてきた島根県。日本海に面し漁業が盛んに 行われ、中国・四国地方有数の漁獲高を誇る。世界ジオパークの一つである隠岐島 やラムサール条約に登録された宍道湖など豊かな自然を有している。文化の面では、 日本神話と関わりの深い出雲大社が代表的である。また美しい城下町松江は、ラフ カディオ・ハーンが教鞭をとった場所である。このように様々な魅力を持つ島根県 であるが「過疎」発祥の地ともいわれ、深刻な人口減少に直面している。本会議で は日本全国、そしてアメリカから集まった様々なバックグラウンドを持つ学生がこの問題を議論し、地方活性化に貢献することを目標とする。

—Kyoto —

August 14th-17th



美しい自然に恵まれ、古来の伝統や歴史の重みを感じる文化的遺産が生活の中にも溶け込む京都。グローバル化の進展により固有の伝統的価値観や生活様式が消失し、文化の画一化が加速する中、京都は日本の伝統と現代社会が融合し共存する文化の交差点でもある。一期一会の精神を尊重する茶道を始めとする日本の文化に触れ、日米両国間の「相違理解」を図ると共に、古代と現代が織り成す斬新でユニークな文化に着目する。また教育研究機関が数多く存在し日本一の学生数を誇る当地で日本の最先端技術について知見を深め、日本人が生み出すクリエイティブな精神を今後どのように日本社会の発展のために活かし、世界を牽引していくのかを検討する。

—Tokyo —

August 17th-23rd

世界最大のメガシティ首都東京。江戸開府から四百年有余、東京は日本の政治、経済の中枢であると同時に伝統を守りつつも常に新しいものを取り入れ、その魅力は外国人の好奇心を刺激している。国会や宮内庁、米国を始めとする外国の公館、企業、国際機関が集中する一方、上野、浅草に見られる下町情緒溢れる古き良き日本の一面も持つ。また、ファッションやアートの分野で国際交流が盛んな原宿、秋葉原はもとより、博物館や美術館など文化施設にも恵まれ、文化芸術の中心地としてプレゼンスを発揮する。戦後 70 年という歳月を経て改めて平和の構築に対して日米が果たすべき役割とは何かを考えるとともに、第 67 回日米学生会議の活動を総括し、分科会の議論や成果を社会に発信する。

ー第四章　直前合宿及び本会議ー

＊直前合宿＊

■コーディネーター
村井咲絵　藤井一衆

■スケジュール
【日時】2015 年 8 月 2 日(日)～8 月 3 日(月)
【場所】合人社ウェンディひと・まちプラザ／アステールプラザ／広島女学院高等学校

8 月 2 日(日)
・日本側参加者集合
・スキット練習
・分科会
・リフレクション

8 月 3 日(月)
・分科会最終準備
・実行委員会業務紹介

■概要・目的
直前合宿は、日本側代表団における最後の事前準備の機会である。日本開催の場合、直前合宿は第一開催地で行われるため、今年は広島県にて集合し、直前合宿を行った。本会議開催のために約半年間準備を重ねてきた参加者たちは、翌日から始まる本会議、とりわけアメリカ側代表団との対面に胸が高鳴る中、これまでの分科会活動の総括やスキット(寸劇)の発表練習などに勤しんだ。

第一サイト
広島

■サイトコーディネーター
村井咲絵
岡崎栞
Takeshi Hidaka
Harrison Bade

■サイト日程
2015年8月3日～8月8日

■サイトスケジュール

8月3日
- アメリカ側　広島空港到着
- 自己紹介及びアイスブレイキングタイム
- 広島女学院高等学校生徒との交流会

8月4日
- イノベーション戦略セッション　於マツダ株式会社
- 開会式
- 湯崎英彦広島県知事訪問　於広島県庁
- 広島女学院高等学校生徒による広島平和祈念公園案内
- 広島平和祈念資料館見学

8月5日
- お好み焼き作り体験　於オタフクソース株式会社
- 宮島散策
- 広島経済大学セミナーハウス成風館にて宿泊

8月6日
- 広島平和祈念式典参列
- フィールドトリップ

8月7日
- ヒロシマフォーラム

8月8日
- 第二サイト島根県に向けて出発

■第 67 回日米学生会議開会式

日時：2015 年 8 月 4 日
場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ　マルチメディアスタジオ
司会：岡崎　栞／村井　咲絵

開会の辞
　日本側副実行委員長　森　鞠乃

主催者挨拶
　一般財団法人国際教育振興会理事長　大井　孝

来賓挨拶
　広島市長　松井　一實
　広島日米協会会長　山本　一隆
　日米学生会議同窓会会長　今井　義典

内閣総理大臣メッセージ
　代読：日米学生会議事務局長　伊部　正信
　英文代読：アメリカ側実行委員　Harrison　Bade

日米学生会議参加者代表挨拶
　日本側実行委員長　松居　純平
　米国側実行委員長　Hannah　Jun

第 67 回日米学生会議ビデオイントロダクション

閉会の辞
　米国側副実行委員長　Takeshi　Hidaka

■各コンテンツの感想

◇開会式

開会式は、第 67 回日米学生会議の起点であると私は考えている。国際教育振興会の伊部様をはじめとして、開会式では非常に多くの方々にご登壇いただいた。JASC を支えて下さっている方々の参加者に対して抱いている期待を一身に背負って前へと進んで行く、そう強く決意をした瞬間であったのではないだろうか。

開会式の後半には JASC が NHK World 様に取り上げられた時の映像が流された。1934 年、満州事変の直後という状況の中で日米関係悪化に憂いた日本人学生 4 人が日本郵船の氷川丸に乗り込んでアメリカへと渡った。81 年前の話で、これが日米学生会議の起点であった。66 回にも及ぶ会議、そして 2 度の中断という道を歩みながら、第 67 回目である今回の JASC が存在している。

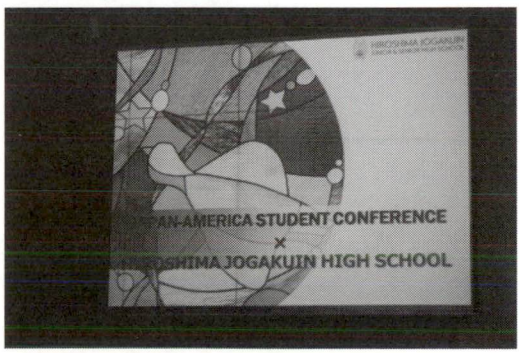
81 年という時間を遡って存在する JASC の起点、そしてこれから 3 週間に渡って行われる JASC の起点、正しく過去と向き合い、未来を切り拓くための旅路へと発った瞬間であった。(今井けい)

◇広島女学院高等学校生徒との交流会

広島女学院高等学校は 1886 年に創設され、1945 年の広島原爆でも 300 名以上の生徒が犠牲になったなど、長い歴史を持つ学校である。現在はその過去の悲劇を後世に継承していくため、平和学習に力をいれ、中四国地方で初の SGH(スーパーグローバルハイスクール)に指定された。訪問当日は、広島サイト初日であったことから、広島女学院高等学校有志の生徒による「広島とはどんなところか？」「広島女学院とは何か？」などといったプレゼンテーションが行われた。自分達よりも若い世代によるプレゼンテーションに、日米学生会議一同感銘を受けた。その後、広島女学院高等学校で独自に行われている GI(Global Issues)コース選択生徒も混ざり、大学と高校の違いやグローバル化についてディスカッションを行った。

［広島女学院高等学校有志プレゼンター］

高校 2 年　守下　綾乃
　　村上　円佳
　　京本　りりあ
　　内田　遥



広島女学院高等学校にて

◇イノベーション戦略セッション

私たちは、イノベーション戦略セッションと題し広島県に本社を構えるマツダを訪問した。マツダは戦前から操業を続ける自動車製造会社だ。戦後の貧困の中、「70 年間草木も生えない」と言われた土地でモノづくりを続けるのは、企業にとって絶望的な状況だったと思う。そして、当時日本で唯一の移民県であったという背景は、言い換えるなら、顧客のありとあらゆるニーズや価値観が存在し、顧客の信頼を勝ち取るのは困難だったと言えるのではないだろうか。しかし、マツダの活動は、例え一度全壊した都市であっても、モノづくりには都市を復興させ、人々を幸せにできる力があるということを証明しているように感じた。今回の経験で、大学で工学を専攻する立場として、モノづくりが人々、社会に与える影響の大きさ、偉大さを実感できたと思う。そして、マツダは広島で生まれ育った誇りを胸に、今後も人々を幸せにするモノづくりをしてくれると期待している。

（澤晃太郎）

マツダ本社にて

◇湯崎広島県知事訪問

広島県庁の一室に、日米学生会議のメンバーは招かれた。その部屋には大きな楕円形のテーブルがあり、重要な会議などを行うために設けられた部屋なのだということが見て取れた。そのような正式な部屋に招待していただける日米学生会議の伝統の重みや意義の大きさを、私はこのとき初めて実感したのである。

湯崎英彦広島県知事からお言葉をいただき、かつ質問をさせていただく機会もあった。8 月 6 日の平和記念式典を間近に控えた時期でとてもお忙しい中、日米学生会議のためにお時間を割いて下さったことに、知事の平和に対する強い想いを感じた。アメリカの学生と日本の学生が広島に集ったことの価値を、県知事訪問を通して再認識することが出来た。

（浅倉由香）

湯崎広島県知事訪問

◇広島平和祈念公園案内

広島女学院の学生ボランティアに引率され、爆心地に点在する石碑を巡った。

この「碑めぐり」は二つの点で意義深い。一つは、これが地元の高校生有志によって行われていることである。案内してくれた女子生徒たちは、碑めぐりの準備を通して戦時下の広島を知り、具体的な数字を通してリアルな被害状況を把握することが出来たと語ってくれた。原爆記憶の伝承を促進する優れたしくみであると思う。

もう一つは、原爆資料館との差別化がなされている点である。原爆資料館は、豊富な資料と写真を通して筆舌に尽くせない原爆の破壊力を来訪者に強く印象付ける。それに対して碑めぐりは、現在の復興した街並みとの対比を通し、当時の被害の凄まじさを推し量る想像力を喚起させる。この先数十年は草木も生えぬと言われた爆心地一帯が、わずかに原爆ドームを残して発展しており、それは過去を見つめ、そして未来の平和を希求する良い機会を私たちに提供してくれた。

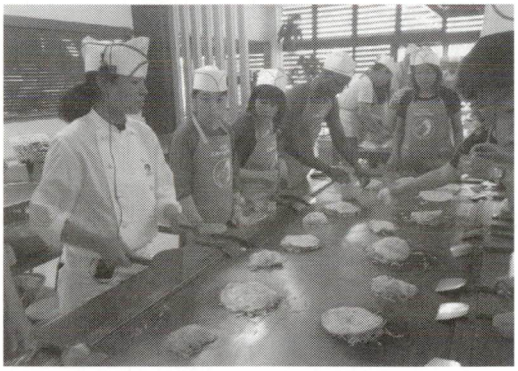
（加藤優一）

碑めぐりの様子

◇オタフクソース株式会社訪問

広島のソウルフードである広島焼。それに欠かせないものはオタフクソースである。オタフクソース本社訪問を通して、広島焼の食文化は広島に深く根付き、戦後の日本を支えたものであったことを実感することができた。現在では、世界中から輸入された多様な食材を使いソースを製造している面や海外工場があるなどとオタフクソースは想像した以上に国際的になっていた。

そして、オタフクソースが製造されている工場見学もし、最後には広島焼の作り方も学んだ。広島焼は私の普段作るお好み焼きと異なり、具材は混ぜずに一層一層重ねて調理されていく。自らの作った広島焼にオタフクソースをかけた瞬間には何とも言えない達成感があった。色々と学んだ後に食べる広島焼はより美味しく感じられた。（飯田夏木）



オタフクソースにて広島焼づくり

◇広島平和祈念式典

戦後七十年を迎えるこの記念すべき年

に、日本とアメリカの両国の学生がこうして広島平和祈念式典に参加したことは意義のあることだと思う。開会の合図とともに演奏が始まり、厳かな雰囲気に鳥肌がたった。というのも七十年前、互いにいがみ合っていた者同士がこの式典に参加し、恒久の平和を同じ場所で共に祈っている尊さを感じたからだった。近頃、日本では憲法九条の改正の問題が騒がれ、遅かれ早かれ日本が再び残酷な戦争へと向かっていく動きがみられる。今私たちの世代は戦争を知らない。だからこのような道に進んでしまっているのかもしれない。広島で感じた、広島の人々の平和に対する強い思いを私たちも同じ日本人としてしっかり受け止めていかなければならない。この節目の年に、日本が原子爆弾を世界で唯一投下された国として進むべき道は、この平和の尊さを世界中に伝えていくことなのではないだろうか。

（野澤知亜）

広島平和祈念式典

◇フィールドトリップ

・本川小学校

第 1 サイトの広島も大詰めを迎えた 8 月 6 日。平和式典に出席し 70 年前の広島の悲劇に思いを馳せたあと、数カ所に分かれてフィールドトリップを行った。その一つである本川小学校は、原子爆弾投下地点から最も近い小学校で、被曝当時校舎にいた 1 人の生徒を除く全ての児童が亡くなる甚大な被害を被った場所である。私たちはまず中国新聞ビルにて本川小学校を題材にしたドキュメンタリー映画を鑑賞した後、実際に小学校を訪ね、被曝当時の校舎内の資料館を見学した。「ヒロシマの校庭から届いた絵」と題したその映像は、被曝の苦しみにも関わらず明るく色彩豊かなタッチの本川小学校の児童達の絵が偶然アメリカのある教会で発見されたことで新たな相互理解の輪が深まっていったことが描かれており、原爆の苦しみに力強く立ち向かった広島の子どもたちに感銘を受けるとともに、人と人同士の相互理解こそが平和を創るのだということを実感した。資料館では爆風を受けて破壊された壁など、生々しい原爆の傷跡を確認することができ、改めて子どもたちの体験した原爆の恐ろしさを実感することができた。日米双方の参加者が積極的な質問を通して多くの学びを得、充実した時間であった。

（杉本夏来）

・中国新聞社

広島の平和式典に参列した後、平和公園の近くに位置する中国新聞社に FT に伺った。かつての建物は原爆により倒壊し、多くの記者の命も失われたそうだ。ビデオに残る当時の記者の言葉からは、広島の街と共に復興を遂げる新聞社の使命にかける並々ならぬ思いが感じられた。

日本で唯一被爆した新聞社として、中国新聞社は Junior Writer という青少年活動を通じて平和教育に力を入れておられる。広島の中高生が世界各国の悲惨な過去をもつ地域に赴き、現地の人々から当時の話を直接伺うというこのユニークな取り組みは、国内外から高い評価を受けている。「広島はどうしても原爆を通じた平和教育に偏りすぎてしまう。より多角的な面から平和について学び、考えを深めてほしい。」という担当者の方の願いから生まれたものだ。現在 Junior Writer として活躍している中高生との懇談会では「活動を始めてからテレビで報道されているニュースを客観的に見れるようになった」「平和についてより身近に、深く考えられるようになった」等の意見が聞かれた。(川端明日香)

中国新聞社にて Junior Writer と

・ワールドフレンドシップセンター

ワールドフレンドシップセンターの外観は、どこにでもある日本民家という印象だ。だが一歩その中に入ると、日本語と英語が同時に飛び交う環境がある。外観とのギャップにまず魅せられた。

そして、センター内では映画を鑑賞し、それに関するディスカッションを行った。映画のタイトルは「Atomic Mom」。はじめはよく分からなかったタイトルの意味だが、映画が終わる頃には納得した。ディスカッションには、映画の登場人物であるお二人の女性も参加してくださった。私は福島県の出身であるが、そのお二人は福島の原発事故にも心を痛めて下さったようで、広島と福島の共通点や違いについて語れたことが心に残った。

私は、原子爆弾の被害者は主に日本人だと考えていた。だが、原子爆弾の開発に携わったアメリカ人も同じく被害者だったのかもしれないということを、ここ

で学んだ。（浅倉由香）

ワールドフレンドシップセンターにて

・広島女学院

英語で精一杯、自らの考える「平和」を発信する広島女学院の高校生の姿を見て、自身の平和に対する意識を顧みなかった参加者はいないだろう。生徒たちとの少人数グループでの自由討論を通して、いかに広島の人々が「平和」を個人の日常的な意志の積み重ねで目指しうるものだと考えるかを知った。それと同時に、日本の平和教育には様々な形があることを実感した。例えばそれは戦争や核の恐怖を知ることであり、戦争体験者の話を聴いて何かを感じ取ることであり、特攻隊や在日米軍基地の意味を考えることであり、あるいはもっと身近な個人対個人の平和を再考することであろう。しかし、どのような形をとるにせよ、広島の地と人々が示すように、決して過去の敵国を敵とするのではなく、人間にとって取り返しのつかない事実や“過ちを二度と繰り返さない”未来の構築に必要なものに直面し、考え、発信する姿勢が、平和を広げるためにあるべき土台のように感じる。（北原祐理）

広島女学院訪問

・広島東洋カープ

広島東洋カープの本拠地である広島ズームズームスタジアムへ訪問し、初代カープのプレイヤーだった長谷部様のお話を伺うことができた。今回の訪問では、広島市民の希望として市民と共に戦後を歩んだ広島カープの歴史から、現在もなお広島市民に愛される球団の特色を学ぶことができた。球団設立当初は経済的に困窮している状況であったが、広島市民の寄付金に支えられており、スタジアム建設時も市民に支えられた。現在でも樽の中に募金をする風習は残っているなど、球団を市民がサポートする精神が根強い。また、球団側も市民がより足を運べるように独自のリニューアルを行っており、数年前からは８月６日に試合を設け野球を通して平和の大切さとスポーツができ

るありがたさを訴えている。このように、球団も市民に還元する姿勢が見え、地元民に愛される球団の歴史と成長を知ることができた。（矢部真裕子）

・広島県立美術館

広島サイトでは、広島県立美術館で開催されている「戦争と平和展」を訪れた。芸術という少し違った角度から戦争について考えるのは新鮮であり、貴重な経験であった。展覧会では、ナポレオン戦争期から第 2 次世界大戦に至るまでの戦争絵画が展示されていた。勝者の栄光に焦点が当てられた絵もあれば、戦争の苦しみや残酷さが胸の奥まで突き刺さってくるような作品もあり、さまざまな視点から戦争や平和について考えさせられた。

当時の芸術家が、自身の戦時中の体験と向き合いながら作品に込めた思いを汲み取ることは、戦争の記憶の継承に欠かせないものである。この展示会が 70 周年という節目の年に、過去を振り返り平和を考える良いきっかけとなったと同時に、芸術家がこのような惨劇を伝えていく必要がない世界を実現していくのは自分たちであると強く感じた。（鷲見まどか）

広島県立美術館訪問

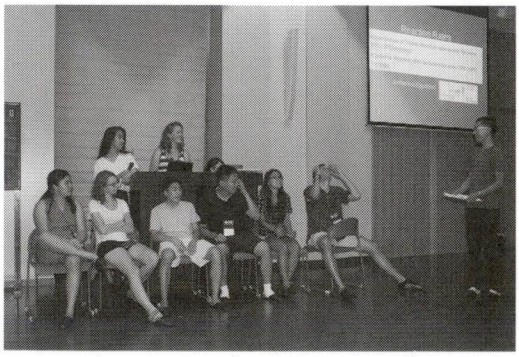
・ヒロシマフォーラム

広島で第一回となるフォーラムが行われた。ヒロシマフォーラムは平和をテーマに過去・現在・未来のパートに分かれて進められた。過去パートでは被爆者による被爆体験をお聞きし、現在パートでは国連訓練調査研究所の隈元様と広島市立大学の水元教授による核抑止論などをテーマとしたパネルディスカッションが開かれ、最後の未来パートではフォーラムの参加者とともにグループに分かれ、沖縄米軍基地問題、安保法案などについて議論を行った。中でも印象に残ったことが被爆者の方のお言葉である。被爆者の観点から、安保法案などでもめている政治に対し何を望みますかとの一人の参加者の質問に対し、国際社会の中で世界各国としっかりと対話をし、二度と戦争のない社会にしていただきたいとお答えしていただいた。被爆を経験されているからこそ、その平和に対する率直なお言葉にはとても重みがあった。平和に向け

た前進の姿勢を絶対に忘れてはいけないと被爆者の方から、またこのヒロシマフォーラムを通して感じた。(窄口修兵)

ヒロシマフォーラムにて集合写真

碑めぐり後、広島女学院の生徒と



参加者によるスキット(演劇)

■広島サイトを経ての感想

広島サイトは第 67 回日米学生会議が始まった場所であり、日本側の参加者とアメリカ側の参加者が初めて出会った特別なサイトである。そんな広島での大きなテーマは「平和」であった。過去に何が起こり、現在どんな活動がなされているのか、そして私たちは未来の平和への実現に向けて何をするべきなのか、地元の人との交流やフィールドトリップを通してさまざまな学びがあり、考えさせられた 5 日間であった。広島は原爆を落とされたという過去を持っているからこそ、人々の平和への想いはとても強かった。戦争を経験した人に直接話を聞くことができる最後の世代と言われている私たちができることはその強い想いを後世に伝えていくことである。戦後 70 年という節目の時期に日本の学生とアメリカの学生が共に戦争について学び、考えることができたのは、平和の実現に向けて大きな一歩となったと思う。(梅原彩花)

＊＊＊＊＊サイトコーディネーター後記＊＊＊＊＊

◇岡崎栞

戦後 70 周年に日米学生会議として広島を訪問する。私のサイトコーディネートは、その意味を考えることと常に共にあった。平和を考える上で欠かすことのできない地、広島。その地を日米の学生が訪れ、何を見て感じ、何を学ぶのか。私と村井のサイト運営はテーマを据えることから始まった。考えたゴールを達成するために必要なコンテンツを考える。ゼロの状態から一つのプログラムを創り上げるという経験は何事にも代えがたい達成感を伴うものであった。広島は第一サイトであることに加え、日米双方にとって重い歴史を持つことから、イベントの内容や目的、その時間的配置にも気を配った。最終的には、平和面に焦点を当てた内容、その平和を支える経済面に焦点を当てたもの、そして広島の文化に注目したイベントをバランスよく取り入れたスケジュールを組むことができたと考えている。とりわけ、戦後 70 周年 8 月 6 日という節目に、日米学生会議参加者 71 名全員で平和祈念式典に参列し、現場の雰囲気を肌で感じることができた事実は、私を含め全ての参加者の印象に強く残ったことであろう。広島の明るい未来と暗い歴史。両側面を目の前に突き付けられ、1 人ひとりの参加者が何を感じ取ったのか。 第 67 回日米学生会議ヒロシマフォーラムは、参加者の思いを纏める集大成として企画した。この地で参加者が形あるものを学び、感じ、それを今後忘れず心に留めていてく れれば、サイトコーディネーターとしてこれ以上に嬉しいことはない。 最後に、共にサイトコーディネーターを務めた村井、アメリカ側実行委員の Takeshi と Harrison、そして会議運営にご尽力くださった全ての方々に心より感謝申し上げたい。特に達川様、川村様を始めとした広島サポート委員会の皆様、地元広島の皆様のお力なしには、会議の成功はあり得なかった。細かな相談から、会議の運営、経済的な御支援まで、多岐に渡るご協力を頂き、本当にありがとうございました。

◇村井咲絵

「戦後 70 周年という重要な年に、自分の生まれ故郷広島で、日米学生会議を開催したい。」これが私の、実行委員を志すきっかけだった。

アメリカの様々な地域を訪問し、そして全く専門分野ではない分科会での議論に苦しみながらも多くの学びを得た昨年の夏。しかし私から参加者へ与えられたものは少なかったように感じた。そんな自分から何か議論の種となるものを提供できないだろうか、そう考えた時真っ先に思い浮かんだのが「広島」だった。日米関係 においても重要で

あり特別な都市に生まれ育った身として、やはり日米学生会議を「広島」なしに考えることはできなかった。それゆえサイト運営に関しては、恐らく人一倍思い入れも強かった。しかし与えられたのは「6 日間」の真っ白なページ。どう描こうか、何色をぬろうか、自由とはこんなにも難しいものかと、日頃の生活がどれだけ型にはまったものであるかということを痛感した。

しかし結果として、いったいどれだけのことが可能になったことだろう。お好み焼き作り、宮島での宿泊、6 つもの機関で開催されたフィールドトリップ、最初は難しいと言われていた広島平和記念式典への参加者全員の参列。そして何よりも、一年で広島が最も混雑するこの時期に会議が開催できたということ。これらの成功は私達学生だけではなく、県や市のサポート、そして広島サポート委員会の皆様の存在無くしては語る事ができない。

「村井に恥をかかせるわけにはいかない」 サポート委員会の方のこの言葉を忘れない。本当に沢山の地元の方々に支えられ、気付けば真っ白だったページは数えきれないほどの鮮やかな色で彩られていた。こんなにも我が儘を貫き通すことを許してくれた岡崎をはじめとする実行委員、そしてそんな企画を実行に移すためご尽力して下さった広島県、広島市、そして広島サポート委員会の皆様には今一度御礼申し上げたい。

（広島サイトコーディネーター　福井研修にて）

第二サイト
島根

■サイトコーディネーター
鈴木良祐
矢島ショーン
Hannah Jun
Sakura Takahashi

■サイト日程
2015 年 8 月 8 日～8 月 14 日

■サイトスケジュール

8 月 8 日(土)
- 島根サイト開会式
- ホームステイ

8 月 9 日(日)
- ホームステイ

8 月 10 日(月)
- 出雲大社訪問
- American Cultural Presentation
- タレントショー

8 月 11 日(火)
- 中村ブレイス株式会社訪問
- 石見銀山訪問
- 邑南町訪問
  (邑智病院／素材香房 ajikura 訪問)

8 月 12 日(水)
- サバニー試乗
- 隠岐島前高校魅力化プロジェクト
  岩本悠様ご講演
- Ruby 開発者
  まつもとゆきひろ様ご講演
- 島根サイトリフレクション

8 月 13 日(木)
- 地方創生フォーラム
- レセプション

8 月 14 日(金)
- 第三サイト京都府に向けて出発
-

■各コンテンツの感想

ホームステイにてホストファミリーと

◇ ホームステイ

８月８日から９日まで、アメリカ側、日本側参加者がペアになり、島根県出雲周辺地域のご家庭でホームステイをさせていただいた。本会議のテーマである「相違理解」を達成するためにも互いの文化を肌で感じることは不可欠だ。特にアメリカ側参加者にとっては直に日本の生活や文化に触れることのできる貴重なチャンスとなった。地元の方との交流を通して感じた地域コミュニティの密接なつながり、受け入れてくださったご家族の温かい会話、腹に響く和太鼓の音と長く続く盆踊りの輪は、大変新鮮で心地よいものだった。アメリカ側参加者はもちろん、日本側参加者にとっても日本の魅力を再発見する絶好の機会となった。

（伊達佳内子）

◇ 出雲大社訪問

「神々の国」出雲にある出雲大社にて、日米学生会議全参加者は正式参拝を行った。厳かな雰囲気が言葉に表せないような神秘的な気持ちにさせられた。出雲大社での参拝と宮司さんによるレクチャーを通して、いかに神道が日本人の習慣に根付いているのかを考えさせられた。

たとえば縁結びの神様が祀られていることで有名な出雲大社では、毎年10月になると神々が集い会議をするという。その期間になると周辺に住んでいる人々は大きな音を立てないようにするそうだ。それほど、出雲大社が地元の人々の生活の中にあるのだということを実感させられる話だった。

日本の文化や日本人の価値観に大きな影響を与えている神道の行事を体験できたこと、また日本の三大社の一つである出雲大社で日米の学生が神道を学ぶことができたのは、日本人として大変に貴重な経験であったと思う。

（梅原彩花）

出雲大社のしめ縄の前で

◇ 大森地区訪問

島根には誇るべき史跡や地域があるが、

中でも大森銀山は世界遺産として世界的な評価を得ている。江戸時代に銀の世界市場の三分の一を供給する銀の要所だっただけでなく、鉱山でありながら周りの自然や地域を保全したことが評価されている。

その努力もあって、島根サイトの四日目に訪れた大森地区は自然が本当に美しく、また自動販売機まで木の枠で覆うくらいに街並みの保存に力を入れている。その大森をこよなく愛し、交通網が発達しているとお世辞にも言えないにも関わらず長年拠点を置き、世界的なシェアを誇る義肢装具の中村ブレイスにて社長の中村さんからアメリカから帰国後の苦労話や義肢への想いを聴けてとても勇気づけられた。

その後、実際に見せて頂いた義手の本物に似た質感は圧巻だった。自分自身、映画の「アイ・ラブ・ピース」でしか知らなかった島根をより深く知れたことで、地方創生が叫ばれる昨今の中での島根の在り方を深く考えさせられた。（大谷慧）

本物とそっくりな義指

◇ 邑南町訪問

8月11日に島根県邑南町を訪ねると、町のゆるキャラ「オオナン・ショウ」が迎えてくれた。邑南町は島根県中部にある県内で一番大きな町である。

広島から70キロ離れていて、町長のお話によれば、原爆投下後は広島から邑南町まで歩いて避難したということだ。現在では戦争を忘れることのないように毎年広島—邑南町を夜通し歩いて「追体験」するイベントを実施しており、今年で40回目を迎える。戦争の記憶という意味では展示会が先に思い浮かぶが、長距離を歩いて当時の人の想いを推し量ることも大切なことかもしれない。

一方で邑南町は「日本一の子育て村」を掲げており、第二子以降保育料無料や中学校卒業まで医療費無料など、美しい田園風景に加え、社会保障も充実している。唯一ネックとなるのが都市部へのアクセスであり、今後の課題と言えそうだ。

（竹下友貴）

邑南町のゆるキャラオオナンショウと

◇ 隠岐島前高校魅力化プロジェクト
岩本悠様ご講演

隠岐島前高校に魅力化コーディネーターとして携わっていらっしゃる岩本悠さんのお話を伺った。人口減少で存続の危機にあった島で唯一の高校を、日本各地、また海外からも生徒を集めるスーパーグローバルハイスクールへと立て直された方だ。

教育における“グローバル化”といえば、英語教育、ディスカッションなどに力を置き、「日本の教育はよくない」というような自己否定的方向に向かってしまうことが多い印象がある。だが、島前高校が大きく異なるのは島での活動、交流を重視している点だ。学校の寮で生活し、島親と呼ばれる里親制度を通して第二の両親と出会い、地域の行事にも主体的に参加していく。

世界で活躍していくうえで、自己肯定感は欠かすことのできない重要な要素だと考えている。岩本さんのお話を伺って、自己肯定感（自信・自尊心）を高める教育が、グローバルな感覚を身につけるのと同時に行うことができるのが、大きな魅力だと感じた。（荻原沙理）

◇ Ruby 開発者
まつもとゆきひろ様ご講演

島根サイトではまつもとひろゆきさんの講演を聴いた。まつもとさんは日本人で初めてプロングラミング言語の開発に成功したエンジニアである。彼がプログラミング言語を開発するきっかけは高校生の頃にさかのぼる。当時、当たり前のように存在していたプログラミング言語をみて彼は「他人が作ったものであるならいつかは自分でも作れるのではないか」と考えたのだ。そして自分の情熱に正直になり、プログラミング言語開発を純粋に楽しみながら10年もの間モチベーションを保持しつつ、日本発としては初めてとなるプログラミング言語「Ruby」の開発に成功したのだ。

当時、周りの誰もが当たり前のように、だれかが作った言語を使う中、「その言語を自分でつくってやる」という考えは常識に縛られない広い観点からくるものだ。今後の自分の生活の中でもこの広い視野を持つことを心がけることで常識にしばられない考えを持てるようにしていきたいですね。（大蔵嶺冠）

◇ 地方創生フォーラム

地域創生に関して考察したことを多くの島根県の方々の前で発表する集大成の場を持てたことはとても有意義だったと思う。発表したメンバーは、それぞれの分科会活動と併行して、限られた時間の中でフォーラムのためのリサーチ・議論を経て、観光・産業・教育の 3 つの観点からプレゼンをまとめていた。今回多くの学生が島根県を初めて訪問したが、普段都会に住んでいる学生や海外から来た

学生ならではの視点を交えて発表していた。島根での滞在期間中、「現在島根県が直面している問題は、島根県だけの問題ではなく、日本全体が直面している問題である」という言葉を何回か耳にしたが、都会在住で問題意識が欠如していた自分を含め、より多くの人が当事者意識を持って地方活性化について考えなければいけないと痛感した。当事者意識を持つために、実際にその場に行き、現地の方と話して、その地方を理解することの重要性を実感した。(湯川利和)

地方創生フォーラム「観光」チーム発表

■島根サイトを経ての感想

今回の参加者で唯一の島根県出身のものとして振り返ってみても、かなり満足の行く旅だったと思う。島根の世界に誇るべき名所、出雲大社や大森地区を訪れることが出来たことは勿論、ホームステイにて日本人のおもてなしの心だけでなく、日本人の心の故郷と言える田舎での生活を実際に体験することは多くの参加者の心を射止めたようだ。また、日本の中でも注目を集める Ruby 開発者の松本さんや隠岐の教育モデルの話を聴けたこと。それらの体験を経て、日本中の田舎が直面する地方衰退問題をどのように解決していくのか、そのことを日米の若者が真剣に考えて島根の舵取りをしている方々に対して提言できた。実際にその土地を訪れ、その土地の人と触れ合い、その人たちと同じ問題を考え、自分なりに答えを出してみる。日本について本当に知るという意味での文化交流事業としての日米学生会議の神髄を見たように思う。(大谷慧)

タレントショーでダンス披露する参加者

＊＊＊＊＊サイトコーディネーター後記＊＊＊＊＊

◇ 鈴木良祐

島根サイトコーディネーターに就任した時、期待よりも不安を強く感じていた。私自身島根県には一度も訪れたことはなく、島根の観光地や歴史、文化も知らない。そんな手探りの状態で島根サイトの準備は始まった。「地方創生」というテーマこそ決まったものの島根で何が体験できて、島根の何が魅力なのかイメージを持たぬまま年明けを迎えた。

2015 年 1 月。初めて出張という形で島根を訪れる機会をいただき、サポート委員会の皆様とお会いした。出張を通して今まで持っていた不安が、期待に変わったことを昨日のことのように覚えている。宍道湖をはじめとする東京では見ることのできない豊かな自然、日本創生神話の舞台ともなった歴史深い出雲大社、地方にありながらも世界に誇る技術を持つ企業や、最先端のノウハウを持つ人々。そして何より島根県の協力者の方々の温かいおもてなしを感じ、島根滞在はアメリカ側参加者だけでなく、日本側参加者にとっても有意義なものになると確信した。

そしてむかえた本会議。毎日が噛み締める間もなく高速で過ぎる。その中で今まで企画してきたプログラムが実現していくことにやりがいを感じた。特に印象に残っているのは、学生会議参加者から島根への提言を発表する「地方創生フォーラム」である。短い準備期間の中、参加者からの島根の魅力を引き出す提案の数々に心から感動した。

コーディネーターとして学んだことは、会議は決して学生の力だけでは成り立たないということ。我々学生ができることはほんの一部に過ぎず、多くの方々の心からのご好意の上に成り立っていることをひしひしと感じた。サポート委員会の皆様をはじめとする素晴らしい機会を与えていただいた全ての方に心より御礼申し上げたい。

本会議が終わった今でも、テレビで島根のニュースが流れると、ついつい目で追っている自分がいる。私と同じように多くの参加者が島根に魅せられ、島根のファンになったに違いない。

◇ 矢島ショーン

まず始めに、このたびの日米学生会議島根サイトの実現をささえて下さったサポート委員会をはじめとした地元の方々に心から感謝を申し上げたい。現地での様々な準備やプログラムへのアドバイス、ファンドレイジングなど、地元の皆様のご支援があって初めて今回の訪問は実現した。学生プログラムといえども多くの方々の支えによって成り

立っているということは、実行委員として島根サイトの運営を通して学んだ、もっとも大きなことの一つである。

「島根」—昨年の 10 月頃に、この場所が訪問サイトの一つに決まったときの印象を今でも覚えている。この素晴らしい場所について何も知らなかった。その後、まさか自分がサイト担当になるとも思ってもみなかった。パンフレットに載せる島根サイトの説明文を書き進めるなかで、少しずつ理解していった。そして最終的にはチームの一員として、この土地での 1 週間のプログラムを実行することができた。こうした機会がなければ、もしかしたら一生関わることがなかったかもしれない。そう考えるとこのご縁を大切にして今後を関わっていければと感じる。

1 年間かけて、日本側の鈴木、アメリカ側の Hannah, Sakura と 4 人で島根サイトの企画を進めてきたが、とても楽しく学ぶことが多かった。アメリカ側の二人は、やはり普段生活している環境が違うからだろうか、プログラムに関していつも新しい視点をもたらしてくれる。日本側で行き詰まったときにはそうした視点によって乗り切り、プログラムをより良いものにしていくことができた。そしてなにより日本側のパートナーの鈴木から得るものが多かった。プログラムの企画を作っていく中で、能動的に取り組む姿や関係者と一緒に仕事をする上で大切なこと、アメリカ側の巻き込み方など多くのことを彼から学んだ。こうしたメンバーに囲まれながら 1 年間仕事ができたのは素晴らしい経験であり、今後に活かしていきたい。

島根サイトコーディネーター(お世話になった島根県庁の方々と)

第三サイト
京都

■サイトコーディネーター
森鞠乃
モンタニョミチェルルイス
Isaac Min
Ken Covey

■サイト日程
2015 年 8 月 14 日～8 月 17 日

■サイトスケジュール

8 月 14 日(金)
・ 島根県から移動

8 月 15 日(土)
・ 文化体験
　－裏千家今日庵茶道総合資料館
　－西本願寺
　－株式会社虎屋
・ 京都サイトリフレクション

8 月 16 日(日)
・ 京都五山送り火講演会
・ 五山送り火見学
・ 自由行動

8 月 17 日(月)
・ 第四サイト東京都に向けて出発

■各コンテンツの感想

◇ 文化体験

・裏千家今日庵　茶道総合資料館

海外 109 箇所に出張所や協会がある裏千家は、海外でも名が知られており、アメリカ学生にも知っている人がいたことにまず驚きを感じた。訪問では、裏千家の長女千万紀子様から、直々に、英語でお作法を学ぶ得難い経験を得ることができた。特に印象的だったのは、茶道で使う和敬清寂という言葉を、"harmony, respect, purity, tranquility" という言葉で一つ一つ説明されていたことである。和とは、心を開き仲良くすること。敬とは、互いに敬い合うこと。清とは、見た目の美しさだけでなく、心も清らかであるということ。寂とは、どんなときも動じない心のこと。お茶室では誰もが互いに敬い合い、フラットな関係になるという感覚が新鮮であった。部屋に入る前に潜る小さな扉は、姿勢を屈めて謙虚さを表す動作を生むという。日米学生での共同生活も、これらを心に留め率直な対話をしていこうと感じた瞬間であった。(松居純平)

・ 西本願寺

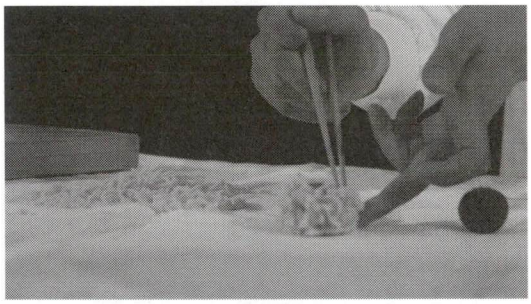
京都サイトに到着した翌日、我々のグループは京都駅にもほど近い浄土真宗本願寺派の本山、西本願寺を訪れた。最初に寺の事務所に案内された我々は、担当者による英語の講義を拝聴し、仏教の持つ精神性やそれが日本の文化と密接に関わりながら発展してきた経緯、また浄土真宗の歴史や現在宗教法人として行っている平和への取り組みなどを学んだあと、世界遺産や国宝に指定されている境内を実際に見学した。本堂だけでなく、通常はあまり観る機会がない書院や飛雲閣などを拝観させていただきながら、桃山文化を代表する装飾や技工に彩られた建造物や庭園に、日本が長年にわたって培ってきた伝統を垣間見た。アメリカ側参加者だけでなく日本側参加者にとっても大変貴重な経験となった。（塚本大志）

西本願寺にて

・ 株式会社　虎屋

京都サイトでは日本文化を体験するため、老舗和菓子メーカーの虎屋を訪問した。職人による実演の後、数名の参加者が和菓子作りに挑戦した。長い時間をかけて培われたであろう職人の技術、そこから作り出される美しく繊細な作品に参加者一同は心を奪われた。欧米諸国にも出店し、世界にその存在感を知らしめる虎屋の和菓子は職人一人一人の洗練された技によって作られていた。今回の訪問はそれを間近で実際に体感できる貴重な

機会となった。日本の四季、風土、生活様式、味覚等が一体となった和菓子は、日本の文化を体現するものである。日本人と米国人ではその美的感覚は異なるだろう。今回の訪問で私たち日本側参加者は、日本人の美的感覚を再確認した。また米国側参加者はその違いに驚くとともに、日本のそれを肌で感じ取っていたようであった。(川部好輝)



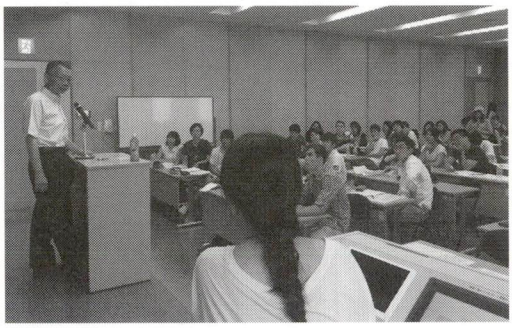
虎屋訪問

◇ 京都五山送り火講演会

京都で8月16日に五山の送り火を見るという絶好の機会を得た私たちは、同日に京都市歴史資料館主任研究員の宇野日出生さんから送り火に関する講義を受けた。京都市無形民俗文化財に指定されている送り火の由来は諸説あり、詳細は研究されているらしい。しかし、1年をかけて準備される送り火は京都の人にとって欠かせない伝統行事であることは確かである。

私たちは夜20時20分の点灯に間に合うように宇多野ユースホステルから15分ほどの道のりを徒歩で移動した。灯がともされた紙灯籠が何百も浮かぶ広沢池(遍照寺池)から嵯峨の曼荼羅山に浮かび上がった鳥居形を旅の仲間とゆったり眺めた。古と現代をつなぐ幻想的な温かい橙色の光が私たちに平和をもたらしてくれた。JASCのあわただしい日常に癒しが与えられたひと時でもあり、私たちは送り火の光と安堵感に包まれた。

(河島慧美)



送り火講演会

■京都サイトを経ての感想

京都サイトを一言で表すならば、“和”である。この意味は、日本の伝統文化が根づく京都で日本について知ることが出来たという意味に加え、日米学生会議参加者同士の“和”が深まったサイトであった。

京都サイトは3泊4日という短い時間の中で、日本の伝統文化を学ぶ文化体験、そして送り火見学などのイベントを通し、日本側参加者アメリカ側参加者とともに日本を知ることができた。

また、京都では多くの時間が自由時間に割かれ、分科会を超えて互いを知ることが出来、夜遅くまでじっくり話あうことで、参加者同士の仲を深めることが出来た。

日米学生会議は英語で分科会やその他の議論を行うことに注目されがちかもしれない。しかし、互いを知り、時にはぶつかり合いながら一生続く友情を作りあげていくことがこの会議の醍醐味とも言えるだろう。私にとって、京都サイトでの“和”は決して忘れられない思い出だ。

（植田真衣）

＊＊＊＊＊サイトコーディネーター後記＊＊＊＊＊

◇ 森鞠乃

第三サイトは三泊四日という他サイトに比べて短い滞在期間となったものの、参加者が終始リラックスして過ごすことができ充実したサイトとなったと思う。

京都サイトは、日本の「文化」というものを紹介することで日米両国の違いや共通点を知る機会となり、相互理解を深めてほしいという目的のもと開催された。そこで、まず「文化」という広い概念の中で、そして世界的にも有名な観光地である「京都」という都市において、どのような部分を参加者に魅せたいのか、サイトコーディネーター内で深く話し合うことから始めた。最終的には伝統を大切にしながらも現代の文化や価値観を取り入れている企業や機関に訪問したいという意見でまとまった。

しかし、京都で宿泊していた四日間は、ちょうどお盆の時期と重なっていたために多くの企業や機関は休業もしくは多忙時期であることが多く、当初はサイト運営に苦戦を強いられた。そのような難しいサイトコーディネートのなか、日米学生会議過去参加者の方や実行委員の知り合いを通じて、当初はフィールドトリップ訪問でさえ厳しいと考えられていたものが西本願寺、虎屋、茶道裏千家資料館に訪問することが可能となった。また、ちょうど京都の大文字送り火が行われる日には送り火に関する講義も行うこととなった。

結果として、京都の自然に触れることのできる宿泊地でゆったりと時間を過ごしつつ、フィールドドリップや自由時間を通じて、食の京都・歴史ある京都・現代の京都等、様々な京都を味わうことのできた密度の濃い時間ともなり、サイトコーディネーターとして忙しかったことは事実ではあるものの、楽しい思い出の方が記憶に残っている。

最後に、無事成功裏に終わることのできた京都開催は、多くの方々による温かいご支援によって実現できたものであり、ご協力頂いた日米学生会議アラムナイの皆様、そして迅速にご対応頂いた現地関係者の方々に深く御礼申し上げたい。

◇ モンタニョミチェルルイス

京都サイトは、実行委員会の掲げた理想と、サイトの置かれた現実の両者を、上手く

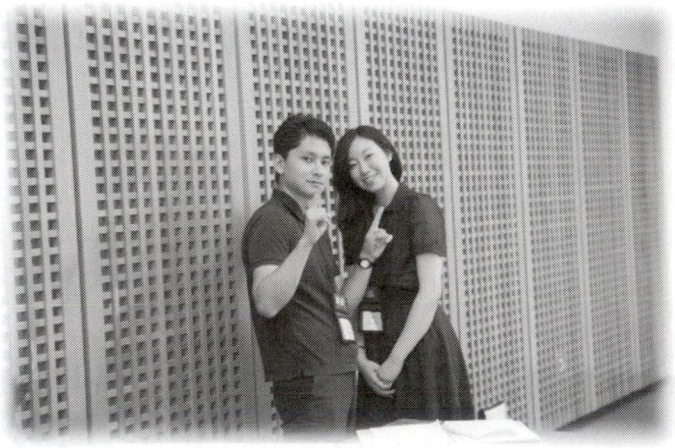
調整できたサイトであった。

当初は、「伝統の街」そして「イノベーションの街」という京都の二つの側面に着目したプログラムにしようと構想を練り上げたものの、サイトの置かれた外的環境を適切に把握できていなかったがために、幾度も計画を練り直す必要に迫られた。

お盆の時期に開催されること、第三サイトであること、そして滞在日数がそもそも少ない事など、他のサイトと比較して多くの制限が課される事が明らかになるにつれ、果たしてどのようなプログラムが実現できるのか不安であったが、それらの制限を活かすべく試行錯誤を重ねる事になった。その結果、第三サイトである事を考慮して、自由時間を多く設ける事で京都の街を肌で実感できる、ゆとりのあるサイトとなった。

京都サイトは、プログラム上の重大な意思決定を巡り、開始直前まで議論を尽くしたサイトでもあった。自由時間の扱いを巡り、サイト担当者同士、そして日米両委員会の間での意見調整に奔走したが、その事がプログラムの質の向上に繋がった。同じ「自由時間」でも、何に重きを置くかを巡って日米の委員同士で考えが異なるのだが、その妥協点を探ることで、両者が納得のいく、より洗練された内容に仕上げる事ができたのである。

最後に、このサイトが多くの人たちの協力なくして成立しなかった事実に触れたい。具体的には、多くの人間たちが提供してくれた知恵が、京都サイトが直面した数々の困難を克服する上で大きな助けになったのである。それはプログラムの企画段階の話だけではなく、送り火の見学の当日に駆けつけてくれた昨年度の参加者が、運営上の盲点を指摘してくれたおかげで大きな混乱を回避できたという具合に、運営当日にまで及ぶ。私はそれらの知恵を束ねるという、いわばその程度の仕事しかしていないとも言えるのである。この場を借りて皆さんに感謝したい。ありがとうございました。



京都サイトコーディネーター

第四サイト
東京

■サイトコーディネーター
松居純平
藤井一衆
Takuo Koyama
Risa Kanai

■サイト日程
2015 年 8 月 17 日～8 月 23 日

■サイトスケジュール

8 月 17 日(月)
・ 京都府から移動

8 月 18 日(火)
・ インフラ未来会議

8 月 19 日(水)
・ 米国主席公使公邸訪問

8 月 20 日(木)
・ ファイナルフォーラム
・ アラムナイレセプション

8 月 21 日(金)
・ 第 68 回実行委員選挙
・ 外務省訪問
・ 外務省レセプション

8 月 22 日(土)
・ 第 68 回日米学生会議準備
・ 自由時間

8 月 23 日(日)
・ 閉会（米国側帰国）

■各コンテンツの感想

◇ インフラ未来会議

東京サイト二日目は羽田空港にてインフラ未来会議に参加した。前半は、2020年の東京オリンピックに向けて政府や企業がどのようにして東京のインフラを変えていくのかを講演していただき、後半はグループに分かれて東京オリンピックまでどう変えれば良いかを、自分たちなりにディスカッションを通してアイデアを発表した。前半に、文部科学省と観光庁の方々から講演していただいたときに印象的だったのがオリンピックをゴールとしては捉えてなく、長期的な見方を持っていたことだ。後半のディスカッションでは、各グループから独創的なアイデアが出たが、観光客を呼び込むためのWiFi設備に力を入れる必要性を感じている参加者は多かった。日本に観光客を呼ぶためにはどうするかを考えさせられ、そのためのインフラ整備の大切さを学んだ。(佐藤陽太朗)

インフラ未来会議にて

◇ 米国主席公使公邸訪問

レセプションでは日米学生会議参加者と日韓学生フォーラムの参加者がアメリカ公使公邸招待され食事を共にしした。学生間の交流の場となり、私は日韓学生フォーラム参加者と会議について話し合うことができた。会話を通しお互いの参加している会議を知るきっかけとなり、また学生会議の意義について再認識する機会となった。

日米学生会議参加者はファイナルフォーラムを間近に控え緊張していた雰囲気であったが、レセプションをでは過密なスケジュールや疲労を忘れ楽しく充実した時間を過ごすことができた。公使公邸レセプションを含んだ日米学生会議のスケジュールでは、普段では体験することの出来ないプログラムの中で特別な場所へ訪問させていただいた。私はこれこそが日米学生会議の醍醐味であると感じている。貴重な体験から今後の日米韓の関係を考えることのできる 1 日となった。(萩原夏花)

日韓学生フォーラムの参加者と一緒に

◇ ファイナルフォーラム

第 67 回日米学生会議の集大成として、主に分科会活動における学びと議論の成

果を社会に対して発信するのが、8月20日に青山学院大学で開催されたファイナルフォーラムである。当日は、個人的に高校の大先輩でもあった近藤誠一元文化庁長官の基調講演に続いて、各分科会による15分間の成果発表とその質疑応答が行われた。約1ヶ月間に渡る活動の軌跡を、僅かな発表時間の中に纏め上げる作業は決して容易ではなかったが、だからこそ、分科会ごとに議論に議論を重ねつつ発表形式からその内容に至るまでを決めていき、最終的なプレゼンテーションの形にするという共通の目標に向かう過程が、あるいは最もメンバー間の「相互理解」を深めることのできた瞬間だと感じるのかもしれない。無事に発表を終えた参加者の達成感に満ちた笑顔に、私達の夏の終焉が未来へと繋がる確かな感触を掴んだ。(塚本大志)

ファイナルフォーラム集合写真

◇ アラムナイレセプション

青山学院大学でのファイナルフォーラムも無事終わり、私たちは大学そばのレセプション会場へ向かった。参加者には安堵の表情が見られた。

会場では初めに浄瑠璃奏者の12代目都一中様による一中節の披露があった。アラムナイの方々と私たちも「ご一緒に」のかけ声で共に歌った。様々な業界で現在もご活躍されているアラムナイの方とお話しする機会をいただき、嬉しかった。たった1ヶ月しかない学生会議が終わってから数十年経過しても、このような会に来て頂けることは後輩として大変ありがたく思う。また、直近のアラムナイの方にも労をねぎらって頂いた。

どの年代の方も参加した年度の学生会議について詳しく語っており、自分も将来レセプションに参加したときのためにも記憶を風化させないようにしたいと思う。(竹下友貴)

アラムナイレセプション 一中節の合唱

◇ 外務省訪問

外務省訪問の際に、スピーカーとして私たち日米学生会議参加者たちを迎え入れてくれたのは、第46回、22年前の参加者の一人である、貝原健太郎氏であった。貴重な時間を削って、わざわざ日米会議参加者のためにお越しくださったことに感謝したい。外交官であり、参加者でもある彼のプレゼンテーションは、外交官としての仕事と、これまで、そして

これからの日米関係の大切さについてであった。その中で、懐かしそうに JASC での話も交えて話して頂いたのだが、その時には現在の参加者として共感できる内容もたくさんあり、微笑ましかった。22 年という時を経ても、参加者であることの楽しさと、悩みには共通するものがあるのだと実感することができた。JASC に参加された経緯を振り返り、彼から今の参加者に最後に伝えて頂いたのは、"You're young, and your day has just begun."ということだった。JASC の参加者として、そして現在外交官として活躍される貝原氏のプレゼンテーションを聞けたことは、将来外交官を目指す参加者はもちろん、全参加者にとって有意義な時間であった。(庄司玲菜)

◇外務省レセプション

これまで何度もレセプションを行ってきたが、今回は本会議最後ということで大変多くの OB・OG がいらした。実はこの日の午前中、来年アメリカで開催される第 68 回会議の実行委員会を決める選挙が行われ、自分は第 68 回副実行委員長を務めることになった。これまで自分は OB・OG との関係作りに積極的ではなかったが、副実行委員長となればそういうわけにもいかない。この日は勝手に身体が動いて、彼らとのコミュニケーションに夢中になった。今の時代、日米の国際交流プログラムは無数にあるが、その中でも JASC が特別だと言える理由はやはり、OB・OG の存在、そして彼らの厚いサポートだ。第一線で活躍するグローバルリーダーが数多く "いるだけ" でなく、実際に毎年の日米学生会議が成功するよう、様々な形で支援してくださっている。この恵まれた環境で第 68 回会議を企画していけることは光栄だが、決してあぐらをかくことなく、愚直に実行委員活動に取り組みたい。(白石拓也)

外務省レセプションにて

■東京サイトを経ての感想

最終サイトの東京に移ってからは、目前に控えた最終発表会に向け、どのグループも専ら発表の準備に時間を費やし、緊張感が漲っていた。

発表会が無事終了すると、参加者は緊張から解放され、一様に安堵と満足した表情を浮かべていたが、発表会の後には来年に襷をつなぐことになる第 68 代日米学生会議実行委員を決める選挙という重要なイベントが残っていた。選挙前には、立候補を決意した者、立候補するか否かの狭間で揺れる者、立候補しないことを

決断した者、参加者の動向を見守る今年の実行委員など、様々な思惑が交錯していた。

そして参加者全員で過ごす最後の夜、全員が円になり希望者が自由に思いを全体に共有するリフレクションの時間が取られた。これまでも何回かリフレクションは行われたが、この日ほど過ぎる時間を惜しむように多くの参加者が切々と想いを吐露した時は無かったと思う。

会議が終了したのちも、ここで築かれた友情は持続するだろう。(湯川利和)

＊＊＊＊＊サイトコーディネーター後記＊＊＊＊＊

◇ 松居純平

非常に多くの方からのご協力を得て運営できた開催地となった。年が明けてからは毎週のように衆議院会館や各省庁、企業などへ訪問をしていたことを思い出す。このサイト運営から学んだことは、一つのプログラムを決定、実行する過程には、必ずそれぞれ人と人とのストーリーが生まれるということである。1週間という滞在であったが、このプログラムを実現するにあたり、OB・OGを含む様々な方々のご協力なくして、本開催地を有意義にすることは不可能であったと思う。特に、今年は羽田空港で日米学生会議史上初の試みを行ったが、その開催に至った経緯がある種象徴的だったと振り返る。

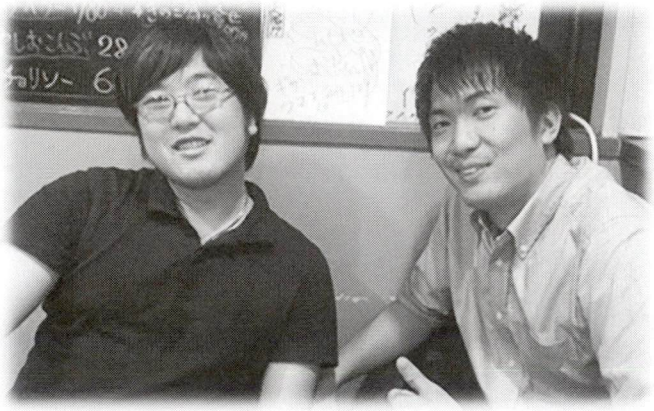
きっかけは、6-7月頃に開催した自主研修の準備であった。なんとか参加者の資金面の負担を軽減しようと、12月頃から資金集めをしていたところ、以前依頼をさせて頂いていたOGの方から「日本空港ビルデングという会社が日米学生会議とコラボをしたいと言ってくれた」という一言を頂いたのである。時は5月。そこから3ヵ月で私たち東京開催地担当2人は、現地に行き、コラボ企画を提案し、企画運営のためミーティングを20回以上、訪問も10回以上行い、当イベントに参加して頂く団体への連絡や詳細の内容確定まで、実に多くの方からのご協力を得て、無事に開催することができた。自らの不甲斐無さに絶望し、周りに迷惑をかけたことも多々あったが、情熱の灯火を燃やし続けることで、周りからの救いの手もあり、その度に周囲への感謝の気持ちを自分に言い聞かせていた。

このように、会議運営において、外部的要因がきっかけになることもあるが、実際に頭を使い、足を運び、作り上げるのは学生の志にかかっている。このように、学生のうちに多く挑戦の場数を踏めたことは、今後に大きな影響を与えると確信している。

◇ 藤井一衆

準備段階から苦難の連続であったが、非常に多くの方々からの協力のもと大変有意義

な開催地になったと確信している。年が明けてから開催地として実りある活動を実現するために毎週のように企業や省庁、時には衆議院会館へ赴き賛助をお願いして回った。東京は開催地として、多彩な選択肢に恵まれているように思われるが、実際に理想的なコンテンツを実現させることは容易ではない。この開催地を担当するにあたり、企画・運営の難しさを学ぶと同時に優先度の設定や人と人とのコミュニケーションの大切さを実感した。小規模組織で活動する場合、どうしてもマルチタスクになりがちになり、それらに優先度を決めなくてはならない。期限が迫り、精神的にも追い詰められる中で下した数多くの決断が成功と失敗へつながった。成功した箇所には更に力を入れて取り組み、失敗した箇所は反省と改善を繰り返す。これら成否の連続が総体的成功への布石となったのは言うまでもない。本来ならば出会うことのない社会人の方々と対面し、企画の発表と交渉プロセスが成功することを願いながら情熱を持って伝えられなければならない。こうして数ヶ月に及ぶ作業の末、あらゆる試行錯誤と試みにより従来の日米学生会議では達成できなかったことをも可能にした。実際に足を運び、頭を使うことで第 67 回会議の東京サイトが形成された。その象徴とも言えるのが、羽田空港でのインフラ未来会議の開催だろう。企画段階から何度も打ち合わせのために羽田空港を訪れ、本会議が進行する最中も電話やメールを通して調整を繰り返した。企業と共同で一つのプロジェクトを作り出す過程を通して自らの不甲斐無さを体感したが、後に自分達の自信へとつながった。日米学生会議は外的要因に依存し、それらの成否が結果に多いに作用している。私はこうした外的要因を動かすことに挑戦してきた。こうした経験が将来の日米学生会議に良い影響をもたらすことを願うばかりである。



東京サイトコーディネーター

■□第５章

分科会活動

―第５章　分科会活動―

現代の安全保障

◇日本側コーディネータ
森鞠乃

◇アメリカ側コーディネータ
Takeshi Hidaka

◇日本側参加者
加藤優一
竹下友貴
伊達佳内子
湯川利和

◇アメリカ側参加者
Johanna Gunawan
Dong-Hyun Jeon
Yuki Naruoka
Nicholas Reiter

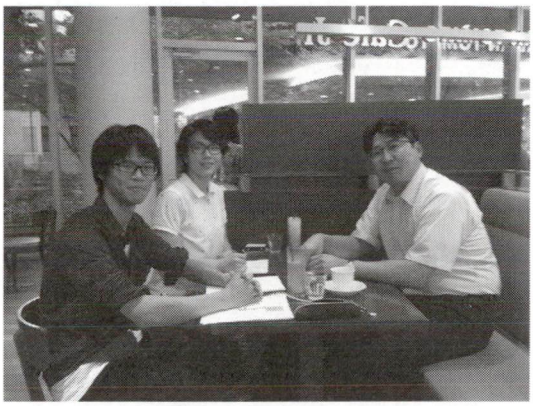
■事前準備活動

◇FT報告

東京大学大学院
総合文化研究科国際社会科学専攻教授
川島真様

「そもそも歴史認識問題は安全保障にどのように関わり、なぜ日米の学生で議論すべき問題なのか」。この問いについて議論する中で、自分がいかに歴史認識を体系的にではなく、直感的にただ問題だと認識しているに過ぎないかを痛感した。歴史認識の問題は両国の政治的対立から、国民感情や経済への悪影響、領土問題の対立の先鋭化までもたらすため、国家だけでなく企業、個人にとっても、ソフトパワー、ハードパワー両者にとっても脅威になりうる。

戦後70周年を迎える今年は、アメリカが“ハブ&スポーク”として各国と同盟を組み安全保障を確保する時代から、アメリカと各国がより対等な同盟を結び、さらに各国同士でも同盟を組む“横のつながり”で安全保障を確保する時代への移行時期である。公共財を提供する国家としてアメリカだけでなく中国が現れた点で、どのように中国と向き合うべきかは、日本だけでなく世界にとって重要な課題となるのは間違いない。(湯川利和)



川島様訪問

外務省　総合外交政策局　海上安全保障政策室　川口耕一朗様

今回のFTは、日本外交に対する見方が大きく変わるきっかけとなった。外交は国際世論に大きく影響を受ける。日本人の周りに影響されやすい性質と、アメリカの権威が国際社会において依然として健在であることが理由として考えられるが、ワシントン・ポストやニューヨーク・タイムズなどのアメリカの世論を味方につけることが日本の世論に影響を及ぼす有効な方法であることを再認識した。また、北極航路の軍事的使用の可能性など安全保障の多様化に関するお話もとても興味深く、勉強になった。加えて、安保法制に至るまでの経緯を改革に直に携わっていらっしゃる方から伺えたことは大変意味深く、貴重であった。憲法のあるべき姿と現実との乖離を抑える為の安保法制だとお教えいただいて、憲法の解釈を拡大して今まで出来なかったことを可

能にする、これまでの平和憲法よりもアグレッシブになった、という自分が漠然と持っていたイメージが180°覆された。(伊達佳内子)

川口様訪問

Human Rights Watch Tokyo
吉岡利代様

当初の目的は、人権という観点から人間の安全保障を議論するための知見を得る事であった。そして実際に訪問する中で、上記の目的に加えて机上の空論に陥りがちな安全保障の話題を身近なものとして議論するための工夫を学ぶことができた。

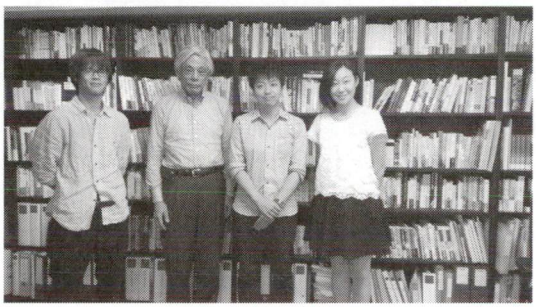
吉岡様の仕事は、緊急性の高い人権問題を取り上げて調査をし、政府や国会議員らに働きかけ、既存の法制度や政策を改善するためのアドボカシーをすることである。その業務に工夫を見出せた。例えば、人権侵害の疑いが強い行いをしている政府に対しては「人権侵害のコストが上がる」という表現を用いるのだという。これは、人権侵害という定量化できない行為に、敢えて経済的用語を利用することで効果的に危機意識を植え付けることができるのだという。本会議中に議論が息詰まることがあれば、このように伝え方を工夫することで議論に新しい風を吹き込むことができないかと思案できたことが、この訪問での副次的な収穫である。(加藤優一)

吉岡様訪問

近藤文化・外交研究所　近藤誠一様

日本の安保理常任理事国入りから、テロ組織への対応、文化外交まで、幅広い内容を懇切丁寧に答えて頂き、近藤様の見識の広さ、洞察の深さを実感した勉強会となった。日本の常任理事国入りのメリットに関しては、それによって得られる情報の質や量、国際的に何か行動を起こす際に行使できる影響力を強調していた。実現可能性は極めて厳しいものの、行動をしなければ何も起こらない、次につなげるために行動を起こす必要がある

という考えには頷ける。テロへの対処は、政府の関心も日米関係や日中関係に比べて低く、遅れている面を指摘していたが、これは日本国民の意識とも軌を一にすると思った。文化外交に関しては、効果はあるが問題は政策と結果の関連性が見えにくい点だと仰っていた。まさにソフトパワーを考える際に意識しなければならない点だと痛感した。(湯川利和)



近藤様訪問

◇定例ミーティング

当分科会では、月に二回程オンラインでミーティングを行った。目的としては分科会のメンバーで日本が関わる安全保障問題について知識を深めること、そしてそれについて率直な議論を行うことであった。ミーティングの冒頭では、20~30分ほど気になった安全保障関連のニュースをそれぞれ紹介し、安全保障に関する記事について日頃から注視する訓練となったと同時にお互いの興味分野について理解する時間となった。その後、安全保障問題の中でも特に取り上げたいテーマを扱ったプレゼンテーションを発表し、発表者が作成した質問をもとに議論を行った。あらかじめ4人で決めた人間の安全保障、テロリズム、国連安保理改革、歴史認識問題という4つのテーマはアカデミックな議論が必要とされ事前準備も大変であったようだが、多くの興味深い議論がなされ、毎回濃密度の高いミーティングとなった。(森鞠乃)

白熱した分科会の議論

■ファイナルフォーラム

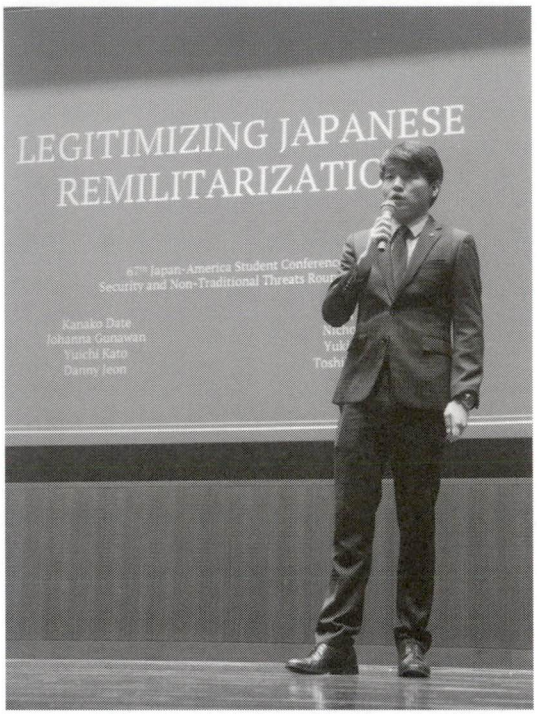
安全保障分科会は最終発表会で日本の再軍備化とそのための正当性をどう確保するかについて発表した。

分科会の各メンバーの関心領域は、日本の再軍備化以外に、歴史修正主義と外交的緊張、中国の台頭、安保理改革、対テロ作戦と人間の安全保障、宇宙分野での協力と衝突など、多岐にわたった。正当性を伴う日本の再軍備化はそれぞれのメンバーの関心領域を組み込んでおり、日本の再軍備化への意見は分科会内でも様々だったが、その賛否はさておき、昨

今の日本が再軍備化の方向へ進んでおり、それは正当な手段で行われなければならないという点では全員が合意したために、全体のテーマとして採用された。そして、議論の流れをいくつかの部分に細分化した上で、各部分をいつ話し合うか、最終発表会までの計画を立てた。その計画に基づいて、各部分の議論についてはその部分に特に関心を持つメンバーが中心となって、全員が議論についていけるようみんなで助け合い、全員に意見を求めつつ全員の合意を確保したうえでまとめていった。発表でも、それぞれが問題意識を持つ部分について責任を持って準備し、担当した。

最終発表会では、背景情報として中国の台頭や米国のリバランス政策といった現在の東アジア情勢を説明し、再軍備化を定義したうえで、平和主義の国内世論の支持を得るために、歴史問題の解決を通じて地域的な支持を、PKO、ODA活動の拡大を通じて国際的な支持を得ることが必要だと説明した。その後モンゴルの仲介者としての役割に言及し、将来的な日本・米国・中国間の経済・宇宙分野の協力関係を述べて発表を締めくくった。

結果として、分科会のメンバー全員が各々の関心領域を生かして議論、発表に貢献できたと言え、これが分科会の成功に大きく寄与したと言えると思う。(湯川利和)



ファイナルフォーラムでの発表

■分科会感想文

東京大学大学院　加藤優一

安全保障の分科会は、第67回日米学生会議のテーマを体現した分科会であった。過去と向き合い未来を拓く。ヴァイゼッカー大統領の演説「過去に目を閉じるものは、現在に対しても盲目である」が自然に頭に浮かぶテーマである。準備期間を含めると約4か月間、私は日米そして世界が抱える安全保障上の問題について様々に思考を張り巡らせた。

冷戦の終焉以降の国際紛争の歴史を辿ると、いかに現代の安全保障が複雑怪奇なものであるかが分かる。まず、紛争の形態が多様化した。具体的には、伝統的

な国家間同士の紛争のみならず、破綻国家に対する人道的介入やテロリストとの戦いなどが挙げられる。次に、安全保障の問題として扱うべき領域が拡大した。とりわけ、人間の安全保障という概念にも見られるように、人間が生きていく上で必要なあらゆるものが安全保障の対象となった。

私は、安全保障の幅の広さゆえに、米国側参加者と如何なる議論になるのかについて、一抹の不安を覚えていた。しかしその不安は杞憂に終わった。米国側参加者は日米双方の歴史や外交についての素養があり、前提知識を基礎に自ら創造的な問いを立てることに長けていたからである。主な議題は「日本の再軍備化が国内、近隣諸国、そして国際社会に受け入れられるためには何が必要か」であった。この問いをあらゆる視点から検討すべく、日米同盟や集団的自衛権、歴史認識問題、領土問題、PKO/ODAの役割、中国の台頭、南北朝鮮の行く末、東アジアにおける経済共同体構築、仲裁国としてのモンゴルの活用、宇宙ゴミ除去を通した軍事合同演習など、日米参加者全員の英知を総動員して高度で独創的な議論を展開した。その中で常に意識したのが、2015年が戦後70年の節目であるということである。東アジアにおける安全保障上の問題は、第二次世界大戦の戦後処理を起点としている。だからこそ、安全保障分科会の参加者一人一人は、過去を見つめ未来の平和を語り合うことができた。

大阪大学　竹下友貴

日米学生会議は分科会を中心に成り立っており、事前準備と本会議を含めていつも頭にあったのは分科会だった。私が所属していた「現代の安全保障」分科会が他の分科会と異なっていたのは個人の経験を反映させることが難しく知識ベースで議論を進めなければならないことだ。分科会のメンバーの中でもとりわけ世界情勢に弱かった私はミーティングの度に耳慣れない言葉と日々アップデートされていく安保議論についていくことに必死だった。本会議一ヶ月前からは新聞をスクラップして読み込み、その冊数は5冊となった。

迎えた本会議では分科会の時間が苦痛だった。発言内容の7割は理解できなかったので、最初の方は聞き取れた単語をノートに走り書きしていた。自分の意見などを持つ一つ手前でつまずいていたので、What do you think?と問われても何も言えなかった。

そのようなときにサポートしてくれたのが分科会コーディネーターであり、分科会メンバーだった。コーディネーターは一つの分科会に2名いて、実行委員と兼任している。分科会の時間はいつも私の隣に座ってくれ、通訳に加え、議論の内容も説明してくれた。おかげでワンテンポ遅れても考えを示すことができるよ

うになった。メンバーもいつも私のことを気にかけてくれた。1日の行事が終わってフリータイムになっても、部屋で集まって当日の議論の内容を復習する時間や、分科会の時間中も30分ごとに2分の質問タイムを設けてくれた。

当初は英語も内容もわかっていなくて、このまま一人取り残されていくのではと心配していた。しかし、「みんなで議論してこその学生会議である」という想いは全員が持っていて、アメリカ、日本がまぜこぜになって知識をシェアし、知識不足の穴を埋めた。ファイナルフォーラムでは各々興味を抱いていた安全保障分野について発表をすることができた。

慶應義塾大学　伊達佳内子

会議への参加が決まり自分の所属する分科会を通知された時は、とてつもなく緊張した。戦後70年という節目の年に「安全保障」を徹底的に議論することの意義深さを思うと改めて身が引き締まる。しかしその一方で、いままで専門的に学んだことの無いこのテーマに関して英語で議論しなくてはいけないということへの不安も大きかった。案の定、春合宿で早速自分の知識不足に愕然とし、それからの3か月間は毎週のミーティングやフィールドトリップ、RTペーパーを通して我武者羅にインプットに努める日々が続いた。

アメリカ側参加者は皆それぞれに個性的で、優秀かつ思いやりがあって非常にポジティブで魅力に溢れていた。知識や言葉のギャップを埋めるための独自ルールを積極的に取り入れ、議論を効果的に進める努力を惜しまなかった。しかし、高度でハイスピードな議論の流れに入っていくのは私にとって困難だった。例えば、理解できても発言できない、発言する前に頭の中で自問自答してしまう、創造的な問いとは何か、そこから導き出される論理とは何か、そもそもその問いを通じて自分はどこにたどり着きたいのかと毎日毎日悩み続けた。議論に貢献したいという焦燥感となかなか実行に移せない現実を前に自身の未熟さを痛感した。今まで経験したことのないこの悔しさこそが私の本会議中の起爆剤であり、より多くの学びにつながったと感じている。

我々の分科会が苦労したのは、各メンバーの異なる興味分野と広範囲に及ぶ議論内容を如何にファイナルフォーラムまでにまとめるか、ということであった。その過程におけるメンバー同士の思いやりや確固な協力体制は、強い信頼関係構築の礎となった。

2015年の夏をこの分科会で精一杯頑張れたことはかけがえのない思い出である。

東京大学　湯川利和

安全保障というテーマは、広範で専門的知識が要求され、かつ政治的な問題を扱う点で意見の相違も予想され、議論す

るには決して簡単なテーマではないと思う。そのために春合宿では日本側参加者で議論したいテーマを絞り、本会議に向けてそれらに関して書物を読んだり、専門家の方に話を伺ったり、積極的に勉強を重ねた。幸運にもアメリカ側参加者の関心領域も日本側と重なる点が多く、分科会としての議論の方向性を早々に定めることができた。さらに、本会議の最初に最終発表会までの行程表を決めたことも限られた分科会活動の時間を有意義に使ううえで大きな役割を果たした。分科会が成功を収めた最大の理由は、アメリカ側参加者と日本側参加者が相互に敬意を持って接し、歩み寄る姿勢を示したことにあると思う。アメリカ側参加者は日本側参加者が議論に参加できるように適宜議論についていけているか確認を取ったり、通訳する時間を設けてくれたりと最大限の配慮を払ってくれた。日本側参加者も、気後れすることなく議論に加わろうと発言したり質問したりと、最大限努力していた。そして、みんなでしっかり議論して合意した上で議論を進め、全員が分科会に貢献できるよう、最終発表において一人ひとりの担当部分を決めていった。議論の時間はみんな真剣な一方、議論以外の時間では冗談が飛び交い、積極的な意思疎通が図られていた。忙しい中、必要に応じて助けてくれた分科会コーディネーターへの感謝も忘れてはならないと思う。そうしたすべてのおかげで分科会の時間はとても居心地がよく感じた。この安全保障の分科会は誰一人として欠けてはならなかったと強く思う。

■分科会総括・コーディネータ後記

「安全保障分科会」は高度な議論を行いつつ、ふざけ合える大変充実度の高い分科会であった。

この分科会メンバーは日本側参加者のみでの議論のみならず、アメリカ側と合流した際にもほぼ何も問題なく議論が進んでいたと感じる。もちろん、アカデミックな英語を特に必要とされるこの分科会では、英語力に苦戦する参加者も中にはいたが、彼らを助け、意見を尊重し合いながら白熱した議論がいつも行われた。それと同時に分科会全体の雰囲気も終始良く、時にはジョークを言い合いフリータイムにはメンバーでご飯に行くなど、固い絆で結ばれていくのを感じた。総じて、大成功に終わることができたと思う。最近でもアメリカ側日本側参加者と共にオンラインで集まり雑談をしたばかりだ。

私が分科会に貢献できたことは少なかったが、英語が苦手な参加者のサポートに回ったり、分科会以外の時間でもメンバーとの時間を大切にしたりと、議論を行いやすい環境づくりをアメリカ側の分科会コーディネータと共に行うことはできたと思う。

このような大変優秀かつ頼もしい分科会メンバーと共に三週間を過ごすことが

できたのは、私にとって大変刺激のある、そして幸せな時間であった。本会議の中で彼らと一緒にいた時間が一番の思い出となった。本当にありがとうございました。（森鞠乃）

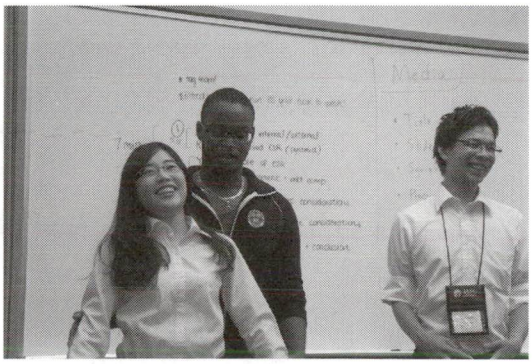
企業の社会的責任とリーダーシップ

◇日本側コーディネータ
村井咲絵

◇日本側参加者
佐藤陽太朗
澤晃太郎
杉本夏来
野澤知亜

◇アメリカ側コーディネータ
Takuo Koyama

◇アメリカ側参加者
John Carlson Ⅲ
Stephane E. Fouche
Caitlin Hoppel
Nicole Oka



■事前準備活動

◇FT報告

株式会社　資生堂

CSR部　尾上真由美様

ビジネスRTとして初のFTであり、資生堂自身のCSRに対する考え方をお聞きするとともに、我々の質問にも答えていただいた。まず初めに、CSRをどのように捉えるかを聞いたところ、基本的CSRと企業価値を追求するCSRの二つに分類できるとおっしゃられた。この点は個人的に非常に納得でき、これは規模の小さい中小企業から大企業までどの企業にも適用できるのを感じた。しかし、資金が豊富にある大企業は企業価値を追求できるCSRを行えるが、中小企業は基本的CSRを行うのがやっとであることも実感した。特に印象的だったのは、企業は自分たちの理念に沿っていればビジネス形態を変えても良いという考え方。その時代のニーズや状況に合わせ、モノやサービスを変えていくことで企業は持続するとともに、社会も持続していくのだと感じた。(佐藤陽太朗)

資生堂 尾上様訪問

トヨタ自動車株式会社

社会貢献推進部

橋本勝也様　三輪麻衣様

日本経済界のトップランナーであり、世界で戦う一流自動車メーカーであるTOYOTAは、本業はもちろん社会貢献活動にも幅広く取り組んでおり、日本側代表として必ず見ておく必要があるとの強い気持ちを持って企業訪問に臨んだ。何より意外だったのは、これだけ大規模な「世界のTOYOTA」が草の根の社会支援活動を重視していたことである。これは、「社会を創るのは結局のところ人である」という人材育成を重視するモットーと、大企業であるからこそ、他企業の社会貢献活動のモデルとなるような活動を行いたいというTOYOTAの心意気が形になったものであった。また、CSRという単語を使った私たちに対して、CSRという言葉は定義が定まらず、活動内容を限定する可能性があるものと認識しているために、多種多様な活動はすべて「社会貢献活動」という枠組みの中に入れて考えることを教えてくださり、ここでもTOYOTAの考える社会、企業の役割というものを感じることができた。より良い社会は人が創る、TOYOTA一社で創れるものではない。奢らず地に足を着けて社会貢献活動に取り組むTOYOTAから得た学びは大きい。(杉本夏来)

トヨタ自動車 橋本様 三輪様訪問

株式会社　電通
法務マネジメント局　CSR推進部
木下浩二様　伊貝幸大様

電通FTでは、CSR推進部を牽引する社員お二人が和やかな雰囲気の中で時間をかけて同社の考え方・CSRの進め方についてお話しくださり、まず広告業という実態把握の難しい分野を専門とする電通がどのような企業であるかを、時間をかけて理解することができた。同社の展開するCSRについてはもちろんだが、私が特に印象に残ったのは社内のユニークな雰囲気である。本業とは別に社員同士が自らの関心ある分野について対話し、働きかける「サークル活動」、毎年人権擁護のテーマに沿って社員とその家族からキャッチコピーを募集し、優秀作品をポスターにする取り組みなど、他の企業にはなかなか見られないアクティブな企業活動・CSRの様子は、とても興味深いと感じた。外にはデザイナーが行きかい、隣の部屋からは笑い声が聞こえるモダンなデザインの会議室で、にこやかに語るお二人の様子を見て、ここで働くことに楽しみとプライドを見出している旨を感じることができた。「働くとは何か」という、企業訪問全体を通じて考え続けている問いに対して新たな波紋を与えてくれたFTであったと感じている。(杉本夏来)

電通木下様 伊貝様訪問

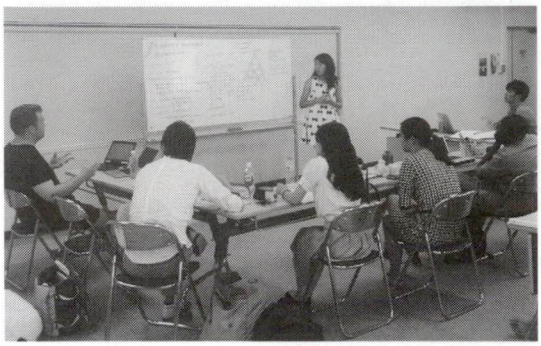
株式会社　国際社会経済研究所
代表取締役社長　鈴木均様

今回のFTは今までとは異なり、グローバルな視点でCSRの研究をなさっている方からお話を伺うことができた。自分のRTペーパーの興味分野と重なっている部分が多かったので、非常に興味深かった。海外でのCSRを行う上で一番大事なことは人権であると断言していらっしゃったのが非常に印象的だった。実際多国籍企業が増えている中で、国際的な枠組みやガイドラインが未だ法的拘束力をともなわない状況で、新たな国際的ガイド

ラインや多国籍企業に対する政府の政策の必要性を感じた。しかし、法的拘束力によって人権などを守るのではなく、そのようなガイドラインがなくても、各企業が人権を第一に考えて倫理的に実行していくことが大事であると感じた。(佐藤陽太朗)

◇定例ミーティング

「企業の社会的責任とリーダーシップ」分科会では、まずフィールドトリップを行い、そこから見えてきた疑問や問題について話し合った。6月から7月にかけてフィールトリップを4回行うことができ、それぞれの企業に対するCSRの考え方や方針等を比較し本会議へ向けて議論を深めた。またフィールドトリップと並行して、日本側参加者 4 人がそれぞれ、当分科会に関わるトピックの中でもより自分の興味深いトピックを選び、プレゼンテーションを行った。中小企業のCSRに対する考え方や、メセナ、多国籍企業問題など、様々なテーマが挙げられた。これらのミーティングは基本的にオンライン上で行ったが、フィールドトリップなどの機会に幾度か顔を合わせ、本会議へと備えた。(村井咲絵)



分科会の様子

■ファイナルフォーラム

我々ビジネス分科会は、本会議が始まって日米両参加者が合流すると、今までの自分たちの事前活動や、興味あるトピックについて書いた RT ペーパーの共有を行った。これを踏まえて議論を始めたが、日米のCSRという言葉の解釈に違いが生じたため、まずはお互いのCSRの違いを確認し、お互いの要素を組み合わせて自分たちでCSRの概念を考え、企業や政府がどのような役割を担って行くべきなのか、またそれを取り入れることで企業にとってどのような効果が生まれるのかを話し合った。その中で、日米両国もしくは各国の政府関係者やビジネスリーダーに対して、現在の日米各国の問題点を提示した上で、自分たちが考え出した解決策を発表することにし、東京サイトのファイナルフォーラムに向けて準備を進めた。

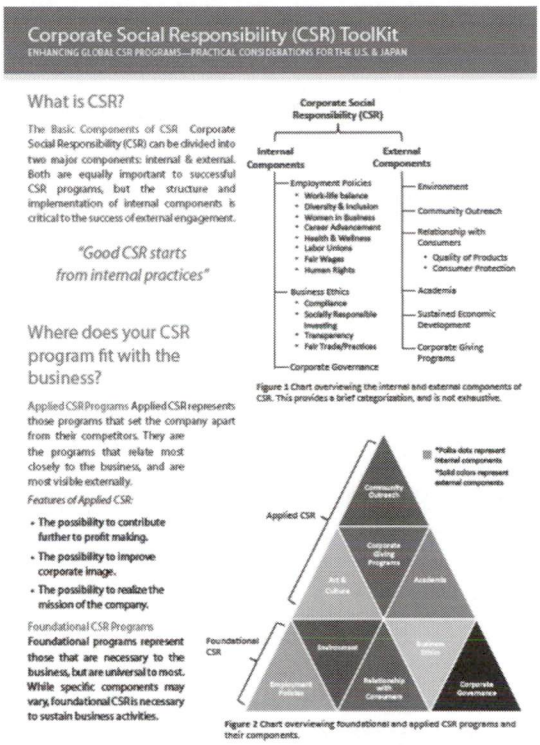
ファイナルフォーラム当日、まずは自分たちが考えるCSRを雇用政策のように

企業内部で行われる内的 CSR と、環境対策のような外部で行われる外的 CSR に分類した上で、広く行われていて企業の存続に欠かせない活動を「基本的 CSR」、事業に関連付けて他企業との差別化を図る活動を「企業価値を追求する CSR」の 2 種類を説明し、これらをすべて組み合わせて、一つのピラミッドで体現した。

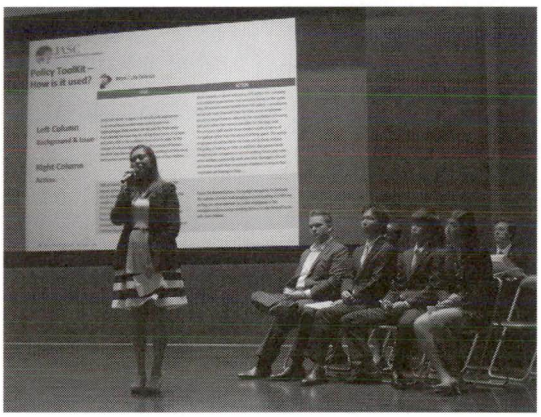
その次は、企業が CSR を推進するためには政府はどのような役割を担うべきか、また CSR 活動を企業が行うことで、企業のイメージアップやビジネスの持続性などに貢献し、結果的には企業の利益につながることを発表した。

最後に、現在企業が抱えている問題を提示し、解決策を発表した。アメリカが抱えている問題の一つとして、公民権法で人種差別が禁止されたにも関わらず、企業においてすべての社員が平等に扱われていない問題を提示し、そのためには企業はより多様性を重視し、企業内で少数派を後押しするようなプログラムを作る必要性があると我々は考えた。日本においては、少子化対策として企業は父親の育児休暇や、イクメン文化を促進するための政策が必要だと我々は提案した。

(佐藤陽太朗)



ファイナルフォーラムでのプレゼン資料



ファイナルフォーラムの発表の様子

■分科会感想文

<u>東京外国語大学　佐藤陽太朗</u>

企業の社会的責任とリーダーシップ分科会の日本側参加者はビジネスを専攻し

ている人はいなく、4月に分科会が発表されてから、それぞれが専門的な知識を詰めていった。一方のアメリカ側参加者は全員がビジネスを専攻していて、インターンなどを通して働いた経験を持っていたのでこのギャップを埋めるために、春合宿以降は週1回、多い時には3回のテレビ電話でのミーティングを欠かさず行い、知識の共有やディスカッションを行った。また、積極的に企業へ足を運び、実際にCSR活動をしている方々から話を聞き、見解を深めた。

知識もある程度蓄え、本会議に望んだが、いざアメリカ側参加者とのディスカッションが始まると圧倒的な知識量や経験から、発言するのを恐れて、ディスカッションどころか受け身の姿勢になっている自分がいた。しかし、分科会コーディネーターや日本側参加者がこの状況に気づき、第一サイトである広島で自分たちの率直な思いを共有する分科会リフレクションを行ったことによって、お互い思っていることが共有でき、発言しやすい雰囲気に変わっていった。

その後は、アメリカ側と比べて知識や経験で貢献することが少なくても、今までのミーティングや企業へのフィールドトリップで学んだことや、日本人ならではの見方を一人一人が発言できるような環境に変わっていき、分科会に貢献できる自分の役割がわかってきた。

東京サイトに入ると、今まで話し合ってきた内容をパワーポイントにまとめ、それぞれ自分の興味があり発表したいパートに分け、ファイナルフォーラムに望んだ。発表後は、他の参加者や見に来てくれた方から、「ビジネス分科会の発表は素晴らしかった」と何人にも言われ、CSRという言葉すらよくわかっていなかった4月と比べて、たしかな自信、そして協力してくれた仲間への感謝がこみ上げた。このような経験を作ってくれた分科会メンバー全員に感謝したい。本当にありがとう。

岡山大学　澤晃太郎

私が、ビジネス分科会を希望した理由は、日本で行われているCSR（Corporate Social Responsibility）の多くが、金銭的に余裕のある大企業のものとして認識される現状で、地方の中小企業にもCSRを行える可能性があるということを知ってもらいたかったからだ。しかし、議論以前に学問としてビジネスを考えた経験や、就業経験がなかったため、春合宿以降は学術的にCSRを考えること、できるだけ多くの企業にお話を伺うことで正しい知識を身につけることを目標にしていた。結果、知識を基に各自が各々の視点でCSRを考察し、議論の土台を構築できたと思っている。しかし、本会議が始まり自分たちの想定が不十分だったことを認識させられた。日本側は一人もビジネス専攻がいない中で、アメリカ側は全員が

ビジネス専攻だった。更に、内2人は日本企業で就業経験があるという圧倒的実力差を抱えたまま、議論を始めることになってしまった。自分たちが強みにしていた「日本のCSR」に関する情報は、日本での就業経験を持つ参加者に、軽くいなされてしまい、存在価値を見失った時期もあった。結果から言うと、終始妥協と遠慮の議論だったのかもしれない。分科会の雰囲気が良くない時もあったが、抱えていた不安や不満を正直に打ち明けることで少しずつ改善したように感じている。ファイナルフォーラムを終え、私も含めて皆に笑顔が戻り、大きな安堵感と達成感を味わっていたように見えたのが個人的には本当に嬉しかった。

この3週間の議論でビジネスの知識にとどまらず、アメリカ側の参加者から多くのことを学んだ。例えば、議論の時にどのようにしてロジックを組むと人を説得しやすいのか、どのようなヴィジュアルエイドが、人の注意を引き付けるのか。数えだしたらきりがない。本当に彼らには感謝している。

準備期間を含め色々あった4か月間だったが、このメンバーと過ごせたことを心から誇りに思うし、これからも時間をかけて彼らと相互理解を深めたいと思っている。

慶應義塾大学　杉本夏来

私の所属した「企業の社会的責任とリーダーシップ」分科会では、CSRの内容と役割を議論の軸に、企業の然るべきあり方について話し合った。両国企業は根本的に構造や価値観が異なるため議論が難航することが容易に想像することができたが、それ以上の数え切れない苦労を経験した。

まず直面したのは、本格的な就業経験のない学生が議論する内容には限界があるという現実だ。日本側参加者4人で立てた方針は、学生なりの視点で日本代表として日本企業について説明できるようにしようということだった。そのための手段としてリサーチや情報共有に加え、JASCがその長い歴史の中で排出してきた多方面で活躍する優秀な卒業生のネットワークを生かし、企業主催イベントへの参加や企業訪問など実際に中の人の話を聞くことを重視した。これらの事前準備の学びを伴って臨んだにも関わらず本会議開始直後完全に米国側に圧倒されてしまったのは、あちらが既に多少の就業経験があり、日本企業での就職も決まっていて圧倒的にビジネスの知識に長けていたからである。このためにディスカッションが成立する前に教えてもらうことのほうが多くなってしまったことが心残りである。

また、人間としての相互理解にもかなりの時間を要した。例えば意見が対立するとき、否定されているのは意見であって人間性ではないと頭でわかっていても、

分科会内でのパワーバランスが顕著に偏っていたために、各自がストレスを感じてしまうことが多々あった。しかし、実行委員の助けも借りながら歩み寄りを何回も諦めずに図ったことで、最終的には非常に質の高いプレゼンテーションを完成させることができ、全員が満足することが出来た。この相互理解の難航と達成から学んだものは大きい。

最初から仲良しこよしという分科会では決してなかったが、その分自分・他人と向き合う充実した時間を過ごすことが出来た。メンバーも才能に溢れる人ばかりで、全てが終わった今は所属できたことを誇りに感じている。

大阪大学　野澤知亜

第67回日米学生会議を通し、私を大きく成長させてくれたのは分科会活動である。というのも分科会活動を通じて私にとって“相違理解の難しさ”を痛感したからだ。私は、「企業の社会的責任とリーダーシップ」分科会に所属したが、正直第三希望の分科会ということもあり、最初は知識も職業経験のない自分が議論に貢献できるか不安だった。真面目で熱心で愉快な分科会メンバーに恵まれ、この心配は無用となった。本会議前までは、事前準備は大変有意義で、分科会活動は順調そのものであった。このまま本会議も無事に乗り切れるだろうと思っていた。

しかし、第一サイトの広島で私達の分科会は予想外のスタートを切った。私も含め日本側は、アメリカ側参加者の知識量、経験、議論を指導する力にただただ圧倒され、自分たちのペースを完全に失って余裕がなくなってしまった。自分の英語で議論する力の低さに呆れると同時に、これから先どのように議論に貢献できるかを考えるだけで精一杯だった。分科会の雰囲気が険悪になりお互いなんとなく避け合っていた時、コーディネーターのおかげで私たちはそれぞれの思いを改めて共有する機会を持てた。その時気づいたのが、それ以前までの関係は言ってしまえば上辺だけで深い信頼関係というものが築けていなかったのだ。心のどこかで相手を傷つけてしまうのではないかと遠慮し、私の考えが理解されないのではないかという不安に幾度となく駆られ、葛藤を繰り返した。しかし、何度かにわたる話し合いで、ありのままの思いを伝え、衝突を繰り返した結果、徐々にではあったが相手がどのように感じていて何を思っているのかがわかるようになった。この時本当の意味で他の分科会のメンバーを改めて好きになることができ、信頼関係がより強固になった。そしてファイナルファーラムで全員が胸を張ってステージに立って、大きな拍手をもらった感動は今も忘れられない。

■分科会総括・コーディネータ後記

「学生」という立場から「企業の社会

的責任」について論じることは、想像以上に多くの苦難をもたらした。初めて顔を合わせる場となった5月の春合宿では、「企業の社会的責任」とは何か、企業を経営するにあたって「企業の社会的責任」という考え方がどのような役割を果たしているのかなど議論の基盤となる基本的な事柄について調べ、日本側学生全員でスタートを切った。しかし経験則で議論をすることができず「調べ学習」から発展していくことが難しいこのテーマは、時に議論を行き詰まらせることとなった。それでもフィールドトリップとして様々な企業を訪問し担当者の方々から実際の事業についてお話を伺うことで「リサーチ」から「ディスカッション」へと徐々にシフトさせていくことができたように思う。7月に入ってからは毎日ミーティングを行い、本会議へと備えた。

しかし本会議では、ビジネスという分野がアメリカ側学生全員にとって専門分野であるのに対し日本側学生全員にとって初めて触れる分野だったこと、アメリカ側学生にとって母国語でありながら日本側学生にとっては外国語となる英語で議論を進めること、という知識的・言語的な壁が日本側学生の前に立ちはだかることとなった。それでも、春から地道な努力を積み重ねてきた学生たちが簡単に諦めることはなく、最終的にはアメリカ側学生と対等に意見を交わし新たな「企業の社会的責任」の定義を発案するに至った。

様々な逆境の中にあっても、日米両学生の一人一人が自分の役割を見出し、誰一人欠けることなく全員で発表を創り上げることができたこの成果は、今後日米学生会議という枠を超えて各々の自信へと繋がっていくことだろう。最後に、フィールドトリップを快諾して下さった、株式会社資生堂尾上様、トヨタ自動車株式会社橋本様及び三輪様、株式会社電通木下様及び伊貝様、株式会社国際社会経済研究所鈴木様に当分科会コーディネータとして今一度御礼申し上げたい。(村井咲絵)

宗教の意義とその役割

◇日本側コーディネータ
モンタニョミチェルルイス

◇アメリカ側コーディネータ
Sakura Takahashi

◇日本側参加者
浅倉由香
植田真衣
梅原彩花
窄口修兵

◇アメリカ側参加者
Remy Gates
Lillia Khelif
Hanae Miyake
Kyle Schil

■事前準備活動

◇FT 報告

東京トルコ・ディヤーナト・ジャーミイ トルコ文化センター　下山茂様

三大宗教の一つでありながら、その実態を知らなかったイスラム教について学ぶため、代々木上原にある東京ジャーミーを訪れた。スタッフの下山茂さんにお話しを伺いながら、施設内の見学をした。主に東京ジャーミーの成り立ち、イスラム教という宗教について、メディアのイスラム教の伝え方についてお話を伺った。特に印象的な話として、イスラム教のお賽銭が挙げられる。壁のくぼんだ所にお金を置くとそれは神の所有物となり、誰がとっても良いものとなるそうだ。これはイスラム教の平等の精神が大きく関わっているとのことだ。

日本人にとってあまり馴染みのないイスラム教であるが、実際にイスラム教徒の方のお話を伺うことでイスラム教について深く知ることができ、今まで抱いていたイメージがバイアスにかかっているものだということを強く感じられた。当事者の方に話を聞くことの大切さを感じたと同時に、今後もイスラム教について学びを深めたいと思った。（梅原彩花）

東京トルコ・ディヤーナト・ジャーミイ
トルコ文化センター 下山様 訪問

東北六魂祭訪問

小口直孝様

東北六魂祭は東日本大震災後、被害の大きさ故に自粛ムード漂う東北地方を盛り上げるための行事として始まった。東北六県を毎年ローテーションして開催されているが、それぞれの県を代表するお祭りが一堂に会する様は圧巻である。

私が住む福島県からは「わらじまつり」が東北六魂祭に参加しており、わらじまつりの責任者である小口直孝様にお話を伺うことが出来た。小口様は、笑顔ある福島の祭りを多くの人にみてもらうことが楽しみだと語って下さった。

祭りが神道の一部だということは、これまで考えたことがなかった。しかし、宗教について学び、宗教が日本人の生活に深く根付いていると知った今、祭りの重要性をより理解できる。祭りには、人や地域を活性化させる力がある。宗教分

科会のメンバーがそれを肌で感じたように、よりたくさんの人が東北六魂祭に足を運び、東北のパワーを体感して欲しい。（浅倉由香）

小口様訪問

衆議院議員　中野ひろまさ様

2015年7月28日に参議院議員会館で公明党衆議院議員であられる中野ひろまさ議員の事務所を訪れた。宗教と政治の関係性を大きなテーマとし、政教分離、公明党について、さらには現在議論となっている安保法案に対する公明党の考えについてお話をしていただいた。私は現在、創価大学に所属しており、生まれた時から創価学会の中で育ってきたこともあり、公明党について触れる機会は多々あったが、質問をしていると政治資金を党だけでやりくりしていること、憲法の下、理念上も組織として政教分離を図っていることなど、お会いして初めて知ったことが多かった。日米学生会議の参加者として客観的な目線で訪問させていただけたからこそ知ることができたのだと実感した。最後に一部の創価学会の間でも「平和の党」としての役割を忘れているなどと揶揄されている安保法案に対する公明党の姿勢についてお伺いし、そこで丁寧にご説明をしていただいた。議論の分かれることであることは重々承知であるが、私の個人的な実感として、公明党は現実と理想の中、今日本おいて何が必要なのか必死に思考し行動をされているという印象を受け、その姿は昔と変わらない民衆のために尽くす「平和の党」であると私は思う。いずれにせよ最後のフィールドトリップとしてとてもふさわしいものであったと思う。（窄口修兵）

中野議員訪問

伊勢神宮訪問

本会議直前の7月31日、三重県の伊勢神宮に正式参拝した。今回はご厚意で、三重県の皇学館大学の神道資料館、神宮宮域林、奉納品を育てるための畑、田んぼ、塩田も訪問させて頂いた。

特に私が心に残っているのは、伊勢神

宮での神楽である。普段足を踏み入れることのできない、他の参拝客の喧騒から一歩離れた場所で、神への奉納のための歌舞は、まさに目の前に神がいるという緊張感にあふれていた。

また翌日の1日には、朔日参りといわれる風習があり、私たちも訪れることが出来た。早朝から数多くの人で賑わっており、今でも伊勢神宮が日本人の心を支えているのだと実感した。日本人にとって特有な宗教である神道。伊勢神宮を訪れたことで、本会議前に自分は日本人なのだな、と改めて実感することが出来る貴重な機会だった。本会議では、出雲大社にも正式参拝することが出来、この二つの大社の意義をしっかりと学ぶことが出来た。(植田真衣)

伊勢神宮にて

◇定例ミーティング

本分科会では参加者の自主性を尊重し、週に一回のミーティングを基本としながらも、あくまで参加者自身がその都度開催日時と内容を決めていった。8月の本会議に向けた準備を計画的に進めた一方、5月から7月にかけて行われた公式プログラムと自分たちが企画した課外活動の反省や感想の共有も丁寧に行うことを通して、全員参加型の議論を行うことができた。学術的な議論だけではなく、それぞれの経験に根ざした議論もまた行った。(モンタニョミチェルルイス)

仲の良い分科会メンバー

■ファイナルフォーラム

ファイナルフォーラムでの発表の流れは、次の通りだ。宗教の負の側面についてまとめた映像を流す・宗教的紛争について静かに考える時間をとる・宗教分科会がフィールドトリップや議論を重ね、そこから学んだ宗教と文化のつながりを伝える・宗教分科会メンバーの宗教にまつわる体験についてシェアする・人々が宗教をより受け入れやすくなるよう、いくつかの解決策を提案する・日米学生会議のテーマでもある相互理解や平和を、

宗教を通して実現していける可能性を示しまとめとする。

宗教分科会が1回目の議論で気がついたのは、日本側参加者は宗教の平和への貢献をテーマとしていたこと対し、アメリカ側参加者は宗教間の対立など、宗教の負の面に興味がある人が多いということだ。そして、全員に共通していたのは、宗教に対する学問的な知識が不足していると感じていたことである。そのため、まずは様々な宗教について全員で勉強しなおすことにした。この過程で、それぞれの宗教について考えたことや感じたことを自由に意見していくという形式をとった。これにより、宗教とは何かという根本的な問いに関する自分たちの答えを見つけ出そうとしたのだ。

第67回日米学生会議は日本開催であったため、本会議中神社やお寺を巡る機会が多かった。また、日本の文化や日常生活の中に宗教が深く根付いているという気づきも得た。さらに、ファイナルフォーラムに発表を聞きに来て下さる方は日本人が多いであろうと予測できたため、実際の発表では日本の宗教を中心に話を進めることにした。初めは宗教のネガティブな面に焦点を当てていたアメリカ側参加者も、日本の文化や神道、仏教の平和さに触れ、最終的には宗教の平和への貢献が宗教分科会全体のテーマとなった。ファイナルフォーラムの前日、アメリカ側参加者の一人がこう言った。「最初、日本側の平和というテーマは楽観的すぎると思った。けれど、3週間経った今それがとても良いテーマに思える。」

（浅倉由香）

ファイナルフォーラム直前

■分科会感想文

福島県立医科大学　浅倉由香

私の所属した宗教分科会を一言で表すなら、「平和」だ。日米学生会議が始まる前、私が想像していたものとは全く違う分科会活動であった。会議前、分科会活動のイメージは、英語が出来なければ意見を聞き入れてもらえない・連日夜中まで議論が続く・数え切れないほど意見が衝突するなど、壮絶なものであった。だが実際は、つたない英語でも一生懸命耳を傾けてくれるアメリカ側参加者・22：00以降は基本的に自分の時間をとれる・他人の意見の良いところを常に評価する分科会メンバーなど、分科会活動は私が考えていたほど壮絶なものではないのだと知った。

ただし、平和な分科会だからといって、個人的な悩みがなかった訳ではない。本会議中、分科会の時間は私の中で、最も緊張する時間でもあった。アメリカ側参加者の英語による意見を完璧には理解できない苦しみ、英語で宗教を語る難しさ、自分の意見をなんとかプレゼンテーションに反映させたいという焦燥感と常に戦っていた。

特に、私は分科会のメンバーに迷惑をかけてしまう機会が多かったと思う。島根県で地方創生フォーラムに参加した際は2回分科会活動に参加できず、また、聴覚過敏のために一度別な交通手段を使った際は、移動中にバスの中で行われた分科会ミーティングに参加できなかった。しかし、そのような時も、分科会メンバーは私が分科会活動についていけるよう気を配ってくれた。宗教分科会は何も障害がなかったというわけではないが、何か障害が生じても、それに対応する柔軟性を全員が備えていた。相互理解や平和という日米学生会議の大きなテーマを容易くやってのけた、それが宗教分科会である。

上智大学　植田真衣

私は、“宗教の意義とその役割”という分科会に所属していた。日本側参加者のみで話し合っていた時から問題視していたのは、日本人が宗教を遠い存在として考えていることだ。私自身、中高大とカトリックの学校に通っていたにも関わらず、宗教に対する知識は浅く、この分科会に決まった時はとても不安であった。しかし、本会議前に日本にある宗教関連施設等を訪れることで、宗教と日本人の深い関係に気が付くことが出来た。アメリカ人参加者と合流してから、それまでのように議論がスムーズに進まず、もやもやと感じることが多々あった。まるでメンバー間での根本的対立を恐れるかのような表面的議論に嫌気がさすこともあった。

転機が訪れたのは、島根であったように感じる。本会議の活動の一環として、出雲大社への正式参拝、そしてホームステイを行った。特にアメリカ人にとってはホームステイでの発見が大きかったそうだ。例えば、“いただきます”“ごちそうさま”や日本の民家の設えには宗教的意味があると知り驚いていた。分科会メンバー全員が日本人の生活に根付いている宗教、そして“無宗教”と位置づけつつも思考の根本に宗教的価値観があるという事実に気が付き、アメリカ人と日本人の間に思考のずれがあると改めて認識することが出来た。そして、相手のアイディアのベースを理解することで、議論がスムーズに進むようになっただけではなく、大変仲のいい分科会を作り上げることもできた。

ファイナルフォーラムではこのようなパーソナルな意見を重視したプレゼンテ

ーションを行ったが、もちろん現在問題になっている宗教の負の側面についても話し合った。

私たちは、宗教の対立の根本は相互理解の不足によるものだと考えている。個人間での理解を深めることが、世界平和の第一歩なのではないか。これからも宗教を通じて、平和へのアプローチを続けていきたい。

国際基督教大学　梅原彩花

「宗教とは何か」この問いについて私たち宗教分科会は春合宿が始まってから最終フォーラムが終わるまで考え続けた。「宗教の意義とその役割」という分科会名を考える上で、重要な問いであったと思う。分科会メンバーそれぞれが異なるバックグラウンドを持ち、異なる宗教的経験をしている中で、宗教に対する考え方、感じ方は多様であった。そのためにこの問い対して1つの答えを出すことはとても難しかった。

春合宿では宗教は平和を実現するための大きな要素であると考えた。宗教は個人に平和をもたらし、それが社会の平和となり、最終的には世界の平和へとつながる。しかし一方で宗教が原因で戦争が起こり、国家が特定の宗教を使って人々を統率しようとしていた事実が歴史的にはある。

このポジティブな面とネガティブな面があることを知った上で、さまざまな宗教の考え方に触れようと、私たちは多くフィールドトリップを行った。ここで宗教の基本的知識を得ただけでなく、言語化するには難しい感覚としての宗教観を得られた。たとえば、神社などの宗教的な場所に行くと自然と崇高な気持ちになる。この気持ちを言語化するのはむずかしく、実際に体験しないと理解しにくい。そのために、自分の足で向かい、そこにいる人と話し、感じることが宗教を理解するうえで大切であると実感した。

本会議中も出雲大社をはじめ、宗教的な場所に行く機会が多くあった。アメリカ側の参加者との共有体験は分科会の議論を有意義なものにしたと思う。議論を通して日本人とアメリカ人の根本的な考え方の違いに神道と儒教、キリスト教の価値観が大きくかかわっていることに気づいたときには mutual understanding がなされたことにメンバー全員が感動を覚えた。

宗教分科会はメンバーにも恵まれ、終始和やかに活動することができた。このメンバーと出会えたこと、そして宗教という私にとっては新たな分野を学ぶことができたのはとても大きな収穫となった。

創価大学　窄口修兵

宗教とは、ある人にとっては人生の指標・核心と呼べるものであり、その一方で、ある人にとっては全く無縁のものであるなど、人によってその価値は大幅に

違い、又この世界には何百と異なる宗教が存在している故、それを語ることはとてもセンシティブなものがある。私は生まれた時から創価学会に所属する親の下で育ったため、根からの仏教徒であり、信仰は自身の核そのものである。これは宗教が形骸化している日本においては特異であり、また、創価学会は新興宗教であるため、本会議が始まっても、私は皆に受け入れられないのではと心配をしていた。しかし、それは一抹の不安でしかなかった。宗教RTには信仰者は私とある参加者の二人であったが、多くのメンバーが宗教に関する多様なバックグラウンド・興味を持っており、皆が宗教に対して寛容な心を持っていたからである。

新興宗教についての議論になった際に、その一例である創価学会について話は展開した。ここでも私はとても不安を覚えたが、勇気を片手に自身の信仰について知っているできる限りの知識を皆に共有し、そして自身の信仰に対する考えも語り、質疑応答にも答えた。思うところは其々違ったかもしれないが、皆が真剣に私の話を聞き、また、議論を展開していった姿に私は、真剣な対話・議論を行えば、たとえ宗教や教義がまったく違えど、相互理解は可能なのだということを肌で感じることができた。これは分科会における私の最大の宝である。

時には、議論が飛躍し上手く議論が進まない時があり、又日本側、アメリカ側の考えの違いに困惑するときもあったが、総じて私たち宗教分科会は笑いが絶えないとても平和的な分科会となった。これは前述した通り、皆が宗教に対して真剣に考えており、そして多様性を求める慣性があったからであると私は確信している。このような分科会、そして一人ひとりのメンバーに出会えて本当によかったと実感している。

■分科会総括・コーディネータ後記

日米学生会議の長い歴史の中でも、宗教を扱った分科会はこれまで存在した試しが無いように思う。日米の学生が集う会議において、なぜ宗教をテーマにした分科会があるのかと疑問に思われた人もいたかもしれないが、特定の宗教が世界の多くの国々とそれらの社会において深く浸透している事実を考えたら、宗教について理解を深める事は意味のある事なのである。私たちの世界は宗教なしには語れないのだ。

分科会の設立の趣旨が伝わったのか、分科会のメンバーには特定の宗教を信奉している人も多かった。そうでなくとも、これまで学校などで宗教を身近に感じてきた人や、科学の観点から宗教を分析する人もおり、おかげで多様な議論を展開する事ができた。

担当者としては、参加者の自主性に期待して、議論の中身から発表に向けた方針まで、彼ら自身で決定するようにと配

慮してきた。本会議においては実際の議論を深めるだけではなく、分科会の方針を策定するというような意思決定のプロセスも大事なのであり、その両方とも参加者自身の手で行われなければ意味がないと考えたからだ。おかげで会議の運営に集中する事ができ、仕事が非常にやりやすくなった事には感謝しなければならない。

ファイナルフォーラムにおける発表は、宗教を学術的に解説しながらも、それぞれの宗教的体験に基づいた内容であり、本会議のプログラムと連動していた。今回の会議が戦後70周年の節目の会議であるのに加え、それぞれの開催地にて「宗教の意義とその役割」について考えさせられる機会が多く、宗教を学ぶ上での環境に非常に恵まれていたとも言える。宗教分科会が京都で五山の送り火を見学できるなど、一体誰が想像できただろうか。

宗教分科会は、全員が自身の才能を存分に発揮させる事ができ、そして環境にも恵まれた幸運な分科会だった。おそらく二度と開催されない分科会だろうが、歴史上唯一の担当者としてはこれ以上に名誉な事はない。(モンタニョミチェルルイス)

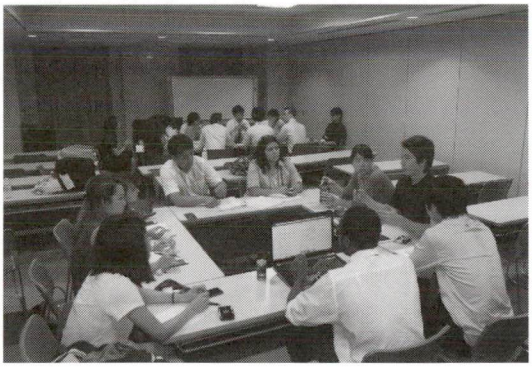
格差と社会

◇日本側コーディネータ
岡崎栞

◇日本側参加者
今井けい
大蔵嶺冠
荻原沙理
庄司玲菜

◇アメリカ側コーディネータ
Ken Covey

◇アメリカ側参加者
Teresa Anselmo
Jordan LaPointe
Camille Nguyen
Sabrina Ruiz



■事前準備活動

◇FT 報告

横浜市立綱島東小学校校長
荻原規彦様

今回のテーマは、「身体または精神的障がいを持つ子どもたちへの教育」であった。印象深いのは、特別支援教室の意義についての横浜市の見方である。「障がいのある子ども」を「できない」子どもとして取り扱うのではなく、「個に応じた」教育として特別支援教室を設置するという姿勢が非常に興味深かった。格差というのは社会の環境や、一律的な概念があってから生まれることもある。障がい者を disabled と認定するのと、社会の中の個性と認定するのでは、生まれる格差は違うものになるのではないか。その概念を変えたい、変えなければという荻原氏の強い意思や熱い思いに、感銘を受けた。（庄司玲菜）

荻原様訪問

明治大学　副学長
勝悦子様（政治経済学部教授）

今回の FT では大学の入試制度改革に詳しい明治大学の勝先生にお話を伺った。自分が最も興味関心を置く「教育格差」への解決策について、提案する側の人から意見を伺うことができたのは純粋に新鮮であった。

今回の FT での収穫は政策提案の重要性を認識できたことだ。本番の会議においてすべきは、知識を積み上げてどれほどその格差の是正が重要であるかを知ることだけではなく、その知識を活かして実質的に実現可能な政策を考案することだ。このことを再認識できたことを糧として改革や政策を実行する際のデメリットメリットを含めて深く議論を進めていきたい。（大蔵嶺冠）

勝様訪問

横浜市役所健康福祉局生活支援課
山田公久様

今回、横浜市役所健康福祉局生活支援課山田様にお話をお伺いした。今年、部

署名が生活保護課という名前から生活支援課へと変わったそうだが、新しい法律である生活困窮者自立支援法に基づいて制度を整えて行った結果の一部だそうだ。生活保護を受給すれば、憲法25条に規定されているように生活をする為に必要最低限の生活費とサービスを受け取る事ができる。しかし、単にお金やサービスを給付するだけでは生活保護から一個人として自立する事を妨げる事に繋がってしまうかもしれない。自立支援という軸を作る事により、生活保護を単なる"セーフティーネット"ではなく、"出口のある制度"にする事が出来るそうだ。とても強く印象に残っていた事は、山田様が生活保護を単なる社会サービスの一環、自立を支援するツールと認識していた事である。生活保護を受給する事に対して、今の日本には強いスティグマがある。しかし、単なる生活扶助から自立支援サービスへと変貌を遂げる事によって、生活保護に対する見方が大きく変わってくるのではないだろうか。(今井けい)

山田様訪問

横浜市鶴見区福祉保健センター
生活支援課　伊藤泰毅生活支援係長

7月10日に、横浜市鶴見区福祉保健センター生活支援課の伊藤生活支援係長のもとへ、生活保護についてのお話を伺った。今回のお話の中で最も印象的であったのは、生活保護はあくまでも「最低限度の生活」を保証する為の制度であって、「普通の生活」を保証する為の制度ではないという事である。横浜市において、生活保護を受給している人の割合は約2%で、市の予算の中で生活保護費の占める割合が8〜9%。支援をする対象が極めて限られているにも関わらず莫大な予算が必要とされる以上、普通の人ではできるような生活まで生活するという事を、税金で保証するという事は財政的にも極めて厳しいということだそうだ。そして、そもそも市が保有している社会的資源には生活保護以外にも数多く存在するという事だ。教育に関する支援や子供を持っている家庭への支援など、金銭的に困っている人をサポートする為のシステムはあり、そういった複合的なセーフティーネットがある中で、生活保護制度というのはその最終的な砦として君臨しているという事であった。(今井けい)

伊藤様訪問

認定NPO法人日本難民協会
野津美由紀様

日本にやってくる難民の保護と支援を行っている認定NGO法人難民支援協会にお話を伺いに行った。対応してくださった野津さんはJASC第61回参加者で、難民支援協会の広報を担当されている。

今まで机の上で勉強してきた以上に、難民の置かれている状況は厳しく、祖国での危険から逃れるために選択の余地なく日本にやってきているのに、なぜ日本でも困難に直面しなければならないのか、と強く感じた。一番印象に残っているのは、ミャンマーの難民のお話だ。祖国では政治指導者の側近で、かなり高学歴のエリートであるにもかかわらず、日本では“日本人ではない”という理由で、能力を必要としないトイレ掃除や工場でしか働くことができなかった、というものだ。“難民”という言葉の響きから、“保護すべき弱者”というようなイメージを持たれがちで、難民受け入れのコストばかり注目されてしまうが、このまま難民受け入れに消極的な態度を取り続ければ、彼らのような優秀な人材も、逃すことになるのではないか。

国連の難民の地位に関する条約を批准している国の義務として難民を受け入れるだけでなく、彼らを受け入れたことをいかにメリットにしていくか考えなければならないという野津さんの言葉に、今後日本が取り組まなければならない課題を示していると感じる。自分の将来かかわりたいと思っているフィールドで活躍されているJASCの先輩から直接お話を聞くとこができ、将来どのようにかかわっていきたいか考えるとてもいいきっかけになった。（荻原沙理）

野津様訪問

青山学院大学　国際政治経済学部准教授
武田興欣様

アメリカの移民問題がご専門の青山学院大学武田先生にお話を伺いに行った。様々な質問に答えていただく中で、移民のとらえ方は取る立場によって全く変わってしまうことが大きな発見だった。

不法移民という言葉を英語にすると、移民排斥派は“illegal immigrant”と表現し、移民擁護派は“undocumented worker”や“irregular immigrant”と表現する。何の意図もなく日本語では不法移民と表現してしまっていたので、本会議では十分に注意を払う必要があると感じた。また保守派であるからといって移民排斥派になるとは限らないというのも面白い発見だった。保守派は基本的に外からやってくるものを嫌うという印象があるが、いわゆる3Kと呼ばれる労働環境でも（臭い・汚い・危険）働いてくれるという意味で、移民受け入れに賛成するケースも多いそうだ。

同じ移民受け入れでも、移民を労働力として受け入れるのか、構造的暴力によって引き起こされたものとして受け入れるのかでは全く性質が異なる。日本の労働力不足＝移民受け入れで解消というような議論がされることがあるが、移民をひとりの人間として尊重しないようなやり方なら、受け入れるべきではないと感じた。（荻原沙理）

武田様訪問

◇定例ミーティング

毎週行った定例ミーティングでは、個々人が自分の関心分野を互いに発表し合い、それを元にディスカッションを行った。「格差」と一口に言っても、生活保護を始めとした社会保障制度や教育格差、移民・難民問題など、参加者の興味は多岐に渡り、毎回興味深い議論が遅くまで続いた。6月以降は机の上では学ぶことのできない生きた知識や経験を吸収するべく、フィールドトリップを企画実行した。フィールドトリップを行うことで考えを改める参加者も多く、日々新鮮な考えに出会いながら本会議に備えた。（岡崎栞）

■ファイナルフォーラム

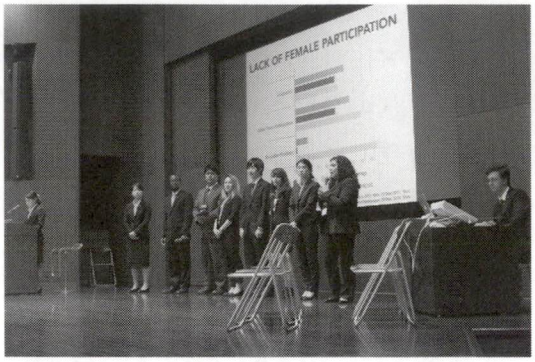
ファイナルフォーラムにおいて「格差と社会」分科会が発表したのは、職場での男女平等についてである。日米両国において、男女間での格差は存在しており、問題の根源も共通しているものがあるという認識でこのテーマにフォーカスすることにした。「格差」という言葉を考えたときに、同時に「平等」とは何なのかも考える必要があった。例えば、”Equality”と”Equity”の違いについてである。男女ともに同じ「条件」を与えられるのが平等なのか、それとも、結果的に同じような競争力を持てるように「配慮」することがそうなのかを考えた。

実際のところ、男女平等というテーマにたどり着くまでにかなりの時間が掛か

った。様々なバックグラウンドを持つ参加者8名は、「格差」というセンシティブなトピックに対してそれぞれ異なった意見を持ち合わせており、たった一つのコンセンサスを取ることすら容易ではなかった。プレゼンテーションの内容を考えるところまですらたどり着かず、他の分科会と比べ、そして時間が過ぎていくにつれて焦りを感じていた。考え方の根本的な違いに毎日気づかされる中、それでも何度も議論をし、ぶつかり合いながらあっという間にファイナルフォーラムを迎えたという印象が強い。

ファイナルフォーラムでは、男女格差の中でも、特に日本の職場環境にフォーカスを当てた。先進国の中でも、男女平等指数がかなり低いと評価されている日本には具体的にどのような問題、社会的背景があるのか。そして、それらに対する解決策は存在するのかどうか、さらに、男女平等の促進が日米関係にどのような影響を持つことができるのかを発表した。発表の中では、男女平等の促進は経済的にも、社会的にも、さらには日米外交の面でもポジティブな結果が期待されるのではないかというのが、当分科会での最終の主張であった。それぞれの男女平等にのみフォーカスするのではなく、平等という概念についても深く考えることができ、また日米関係についても言及することができたのは、日米学生会議の参加者として日米両国にとって意味のある発表ができたのではないかと感じる。

（庄司玲菜）



ファイナルフォーラムでの最終発表

■分科会感想文

上智大学　今井けい

分科会活動では、3週間変わらない10人のチームで議論をし続ける。私は格差と社会分科会に所属していたが、これ程までに相違理解を経験できた場は無かったと思う。

格差という、持つ事ができた者/できなかった者との間にある差異というトピックに関して、各々の参加者が過去の経験や学んできた事を背景としてお互いに譲り難い領域というものを持っていた。

5月に行われた春合宿の時に、同じ分科会に所属する参加者の1人と意見がぶつかる事があった。議論を進める中で意見を譲り合う事が無く、私は彼が発した意見の意図を理解する事ができず、受け入れる事ができなかった。春合宿では分科会内での共通概念を作る事で、同じ土台の上で議論を進めるようにする事ができ

た。

それ以降、彼と意見の差異でぶつかるという事はあまり起こらなかった。しかし、意見がぶつかったという事の背景には意見の違いだけでは無く、私にとって彼はあまり接した事の無いタイプの人で、コミュニケーションを取る中で壁を作っていたという事があった。本会議の議論の中でも、仲は悪い訳では無いけれども何処か距離を感じるような感じであった。思っている事を伝えようとしても上手く言葉にすることができず、結局ファイナルフォーラムでのプレゼンテーションを終えてしまった。

全てのプログラムが終了した後、ふと彼に話し掛ける機会があった。最後の最後で、本会議中に溜め込んでしまっていた気持ちを伝える事ができた。最初に会った時に意見の食い違いで意見を否定する事さえあった。しかし、最後の最後になってしまったけれど、お互いの事を理解する事ができた。大勢の中でたった1人、しかも成し遂げた事は自分の思っていた事を伝えただけであった。しかし、今まで自分が出会ったことのなかったもの/ひととぶつかり、共に歩み、そして僅かではるけれども理解する事ができた、本当の意味での相違理解が起こったと感じた瞬間であった。

慶應義塾大学　大蔵嶺冠

私は「格差と社会」分科会に所属し、本会議では特に日本における女性に対する格差にフォーカスをあてて議論を行った。

議論の中では、分科会メンバー各々が調べ得たデータや記事などに基づいて「そのデータは何を意味しているか」、「なぜその数値を問題視するべきか」そして「いかにしてその現状を解決するか」を話し合った。

普段から大学の授業で教授の情報を受動的に吸収し、講義内容の論理展開を理解し暗記に徹していた私にとって、与えられた情報を自分自身で考察する分析力、そしてその分析を基に解決案を考える発想力を常に求められた日米学生会議での議論は、困難であったと同時に刺激的であり純粋に楽しかったとも言えよう。

格差問題のための理想的な政策を発案しても、実質的にその政策が行われない理由を挙げられ、実際にその政策を行った時に考えられる問題点を挙げられる。このように、本会議中での議論では常に分科会メンバーからの反論が飛び交い、その反論に反論する、という形で議論が深まっていった。このような環境に自分を置くことで、自分の意見を作る段階ですでに反論を想定する力が身につき、その反論に再反論するための論理を探すということを行えるようになっていった。

しかし、この「反論」という行為には分科会において、議論を深めメンバーの意見構成力が上がるという良い側面もあ

れば、人間関係を破壊する側面も存在する。

反論する時は、分科会メンバーひとりひとりの意見を一意見として尊重し柔軟性をもって聞くことが重要である。

私は始めのころこの重要性に気づけていなかったがためにメンバーとの間に確執が生まれてしまったが、分科会メンバー内でのアメリカ側代表の「相手の意見を尊重する姿勢」をみたことで、この重要性に気づくことができた。

日米学生会議によって発生した「気づき」や「成長」を今後の生活に活かしていこうと思う。

明治大学　荻原沙理

日本側分科会メンバーとは 5 月の春合宿で初めて会って以来、フィールドトリップ、勉強会などを通じて事前準備を重ねてきた。本会議に入ってからは、アメリカ側分科会メンバーを加えて、多くの時間を共に過ごしてきた。

それぞれが JASC に対して、並々ならぬ強い思いがある中、全員の意志を尊重しつつ、分科会としてまとまりをもつ、という 2 つのバランスをとるのは本当に難しかった。学生時代のひと夏を JASC にあててやってきているだけあって、それぞれ達成したいもの、深めたいトピックへの譲れない思いは強い。もちろん自分もそのうちの一人である。それぞれの強い思いと、分科会としてのまとまり。限られた時間の中で、どの点に重点を置いて時間を割いて、どこを効率的に進めるべきなのか。バランスを見極めるのが難しく、悩んだ 3 週間だった。バランスばかりに気を取られ、肝心の議論に集中できなかったという後悔も残っている。

そんな中、最後にファイナルフォーラムという人に見せられる形で会議を終了できたことの意味は大きかった。いまでも「格差と社会」分科会のプレゼンテーションは他のどこの分科会のものにも劣らなかったと確信している。

最後まで“適切なバランス”は見つけられなかったが、この 3 週間分科会で悩み苦しんだことが、数年後、十数年後になって、自分の糧となっていれば、この 3 週間は無駄ではなかったと言えるのではないだろうか。それぞれ分科会活動で大変な中、話を聞き、私を支えてくれたみんなに感謝したい。

立命館大学　庄司玲菜

本会議が始まるまで、週に一度はオンラインミーティングを行い、個人でのリサーチにも一生懸命取り組んだ。学校やアルバイト等のスケジュールとのバランスを取ることは難しかったが、常に JASC のことを考えた準備期間だったと言ってもいい。それほど、参加者同士で高め合うことができるような環境が用意されていた。自分が個人でリサーチした内容は、シングルマザーの貧困についてだった。

自分のバックグラウンドとも関連する内容であり、格差と貧困について深く考えることのできるきっかけとなった。本会議の分科会では、正直、楽しいことより辛いことの方が多かった。分科会のトピック自体がセンシティブな内容であり、米国側参加者も含めた多様なバックグラウンドを持つ参加者の中で、議論の論点がすれ違うことも多々あった。その中でも、一番の問題は米国側参加者、日本側参加者の中で、議論を繰り返し、皆が足並みを揃えることが困難だったことだ。一歩進んでは、振り出しに戻る場面にたくさん遭遇した。皆のフラストレーションが溜まっていき、ギクシャクするような場面もあった。このRTはファイナルフォーラムを欠席するという最悪の可能性まで見えた。しかし、その中でもミーティングを繰り返し行い、誰も諦めることのなかったおかげで、分科会発表を終えられたことは本当に自分たちの中での達成だと考えている。ファイナルフォーラムでのトピックは「日本の職場環境における男女格差」であり、自分個人のトピックとも関連する内容であったため、やりがいはあった。これからの自分の学びの糧にしたい。

■分科会総括・コーディネータ後記

日本側参加者が初めて顔を合わせる春合宿で、これ程衝突した分科会がこれまでの日米学生会議の歴史にあっただろうか。「格差」というテーマは想像していた以上に、育った環境やそこで培われた価値観が意見に表われるテーマであった。それ故、初めは、意見が衝突するだけでなく、お互いの主張を理解しようとすらできない状態であった。春合宿の3日間は、参加者は勿論、コーディネータとして私もどんな言葉をかければ良いのか、状況をいかに打開すれば良いのか非常に悩んだ日々であったように思う。しかし同時に、春合宿やその後のオンラインでの会議、フィールドトリップなど、共に時間を共有するに従って、互いの意見を理解しようとする姿勢が芽生え、意見の違いがあることを受け入られるようになる過程を目の当たりにすることができたのも、当分科会ならではの経験であった。アメリカ側参加者と合流してからは、お互いが持ち寄った複数のテーマの中から「男女格差」を選択し、主に日本に焦点をあて、日本の職場においていかに男女格差を解消するかを話し合った。日本とアメリカの女性の立場の違いを目の当たりにしながら解決策を探る日々は、思い出せば参加者同士の協力が光る日々であったと強く感じている。最後まであらゆるハプニングに見舞われた分科会ではあったが、参加者全員が諦めることなく、粘り強く取り組み続け、あれ程の困難を乗り越えながらファイナルフォーラムという形で成果を纏めることができたことを心から誇りに思う。3週間にわたる共同

21 世紀における メディア

◇日本側コーディネータ
鈴木良祐

◇日本側参加者
河島慧美
川端明日香
川部好輝
鷲見まどか

◇アメリカ側コーディネータ
Isaac Min

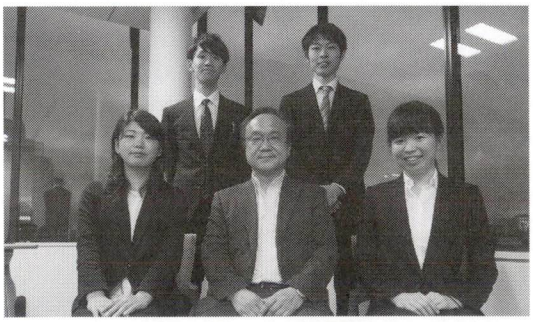
◇アメリカ側参加者
Jacqueline Barr
Kevin Errico
Lia Wang
Emma Woodyard

■事前準備活動

◇FT報告

日本経済新聞社 編集委員 関口和一様

私たちメディア分科会メンバーは、日本経済新聞社編集委員の関口和一様からお話を伺った。日本とIT技術を軸に、情報技術と国防、情報リテラシー教育、IT産業のイノベーションと幅広いトピックについて話し合いが行われた。各分野における日米比較もしくは、中国、韓国との比較に関しても意見交換ができ、世界の中での日本のIT技術について学ぶ絶好の機会となった。その当時まではとりわけ「マスメディア」に注目して議論を進めてきた私たちにとって、ITというテーマは大変新鮮であった。同時にメディアという言葉を広く解釈して、関連する分野についても議論していく必要性を感じた。今後日本がIT先進国化を目指すにあたりどういった取り組みが必要か、そのために克服すべき課題は何かについて具体的なお話を伺った。本フィールドトリップを通じて、IT技術という切り口から国の未来を考える上で有益な学びがあった。(川部好輝)



関口様訪問

NHK元副会長 今井義典様

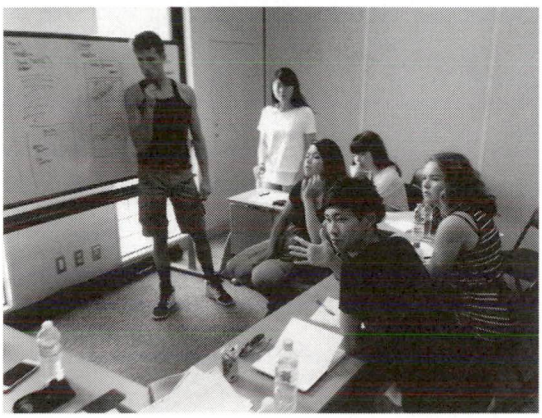
私達メディア分科会は元NHK副会長の今井義典様から「マスメディアと権力」についてお話を伺った。マスメディアの中立性、公共放送の意義、国益とのバランス等、テーマは多岐にわたった。中でも、本来外には出てこない情報を得るために権力者と駆け引きを行いながら、その早さと正確性も追求しなければならない、記者が置かれる厳しい環境についてのお話は、今井様が長い間第一線でご活躍されてきたこともあり、大変臨場感溢れていた。"The first casualty when war comes is TRUTH." 安全保障関連法案をめぐり、日本の政治が揺れる現代において、マスメディアが提供する情報とどう向き合うかはますます重要になってきている。今回のFTは国民のメディアとの向き合い方を考えるのと同時に、自分自身がこれからメディアにどう接していくかを考え直す貴重な機会となった。

(川端明日香)

今井様訪問

◇定例ミーティング

当分科会は、埼玉、茨城、京都、徳島とメンバーが全国に散らばり、ミーティングはビデオ通話により開催された。毎回1名ないし、2名の参加者が自身の関心のあるメディアについての記事や書物を用いてプレゼンテーションし、その内容についてディスカッションする方式で行われた。はじめはメディアという大きなトピックから、どこに焦点を当ててよいのか苦労したが、次第にそれぞれの興味が顕在化しはじめた。(鈴木良祐)



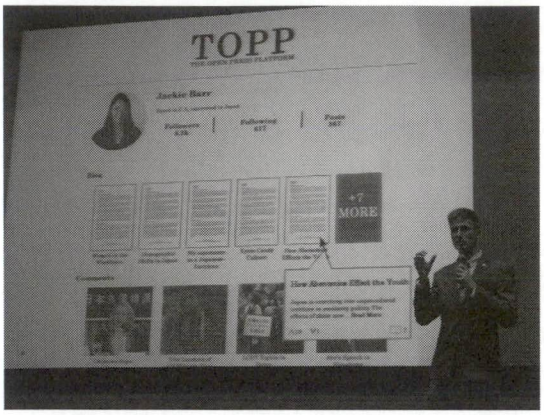
ディスカッションの様子

■ファイナルフォーラム

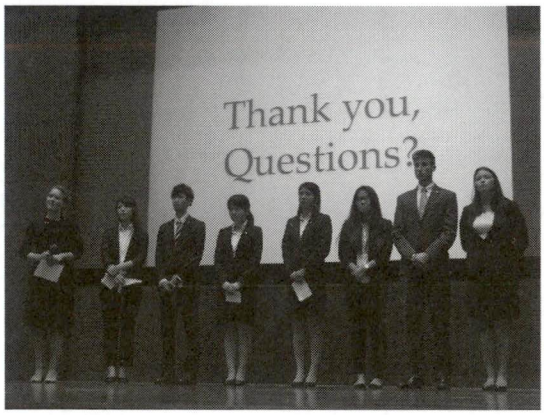
私たち21世紀におけるメディア分科会は、日米両国における表現の自由に対する各種規制を超えて、多様な意見が集められるオンライン上のメディアプラットフォームの創設を提案した。分科会にて、日米のメディアに関する現状及びその問題点を議論した際、本来権力へのチェック機能を果たすべきメディアが、何らかの要因により、常にその役割を果たしているわけではないことが共通点として認識された。その要因が主に日本では政治権力によるメディアへの逆チェック、米国ではスポンサー企業からの圧力であり、両国における言論の多様性を実質的に規制していることが共有された。他の要因として、ある種の社会的タブーやセンシティブなテーマに対する自主規制も挙げられた。

私たちが提案するメディアプラットフォームは、上に言及した両国の表現の自由に対する規制を迂回して、社会的問題に対して現状では隠されていた、もしくは可視化が困難であった意見を集める。つまり言論の多様性並びにそれらに対するアクセスを保障しようとするものである。サイトの運営はいずれの権力からも影響されにくいNGOを想定した。意見の投稿者は主に許可を得た日米両国のジャーナリスト、有識者等を想定した。一般ユーザーはサイトへの利用者登録を行った上で、意見の閲覧、コメントが可能になる。同サイトはユーザーに対して、既存のメディアから手に入らなかった幅広い意見に触れるのみではなく、国境を超えて他のユーザーと自由に意見交換ができる場も提供する。各ユーザーが社会問題に対し自らの意見を形成することで、権力への監視機能を果たすこと及び更なる社会参加の促進を後押しする。この過程が私たちに日米両国の民主主義の天井

を突き破る契機を与える。そして、本プラットフォームがより民主的な両国の関係を築いていくための一助となることを期待している。(川部好輝)



ファイナルフォーラム発表①



ファイナルフォーラム発表②

■分科会感想文

筑波大学大学院　河島慧美

メディアとは何か？議論を進める過程で分かったことだが、メディアとは「媒体」と「媒介」という2つの面を持っている。実は情報を媒介するという意味では、多少無理はあるが私たち人間もメディアに分類することができる。私たちが言葉を発するときにある一面を切り取って表現するように、他のメディアも同じ特性を持っている。つまり、メディアが伝えている情報にも限界があることを知らなくてはならない。

私たちメディア分科会は、情報をトップダウンで大衆に流すようなトラディショナル・メディア（テレビ・新聞）と個人が発信者となりボトム・アップで情報を流すニュー・メディア（SNS）の2つについて本会議前に議論を進めていた。本会議が始まってからは、日米のメディアの相違がはっきりとしているトラディショナル・メディア（特にマスメディアと権力の関係）により重きをおいた議論をした。分科会の参加者が議論をする上で共通認識として持っていたのは、特定秘密保護法や安全保障関連法案が国会で可決されるような時代に言論の自由をどのように確保していくかという点であった。

ファイナル・フォーラムで発表する議題を決める過程で、2回ほど多数決をしたことがあった。少し本題からはずれるが、その時に多数決が本当に民主主義的なのかという思いが頭を横切った。端的に言うと多数決は効率が良い。しかし、少数派の意見は自動的に切り捨てられる。これが現代の社会で広く普及している「民主主義」のシステムなのだと改めて考え

させられた。もし、少数派であっても正しいと思う意見を持っているならば、周囲を説得するだけの根拠と戦略が必要だということを痛感した。最後に、メディア分科会のフィールド・トリップでお世話になった OB の方々、議論をうまくサポートしてくれた実行委員の 2 人と兄弟姉妹のように仲良くなれた分科会のみんなに感謝の気持ちを表したい。

徳島大学　川端明日香

別れの時が来て、アメリカ側の参加者の乗ったバスが見えなくなってしまった時、もう皆とは会えないかもしれないという寂しさと共に、メディア分科会の一員であって本当に良かった、という思いがこみ上げてきた。長期留学経験ゼロ、メディアに関する知識も乏しく、かつ英語力も最低レベルという私にとって、分科会の活動は楽しさよりも苦しさやもどかしさ等、マイナスな部分が多かったようにも思える。それでも終始笑って過ごせたのは心から尊敬する分科会リーダーとメンバー達のお蔭だと思う。

個人がメディアを通じて意見を発信する際に障壁となるものは何か、匿名性はどこまで尊重されるべきか、マイノリティーの意見の扱いはどうするべきか、そもそもメディアの本質とは何なのか。「メディア」という漠然としたテーマにどうアプローチすればいいか紆余曲折しながら進んだ議論。この分科会で一番良かったことは、少数派の意見をパワーバランスで潰してしまうことなく、皆が真剣に考え抜いてくれたことではないかと思う。議論が白熱して一部のメンバーの意見の衝突のような状況になった時、誰かがあまり発言していないメンバーの意見を求める。RT Time ではこんな光景もよく見られた。

一方私自身に関しては、言語の壁もあり、自分の言いたい事が上手く言葉にできず、何度も議論の流れを止めてしまった。私はここにいて意味があるのか？私がいない方が議論は順調に進むのではないだろうか？色々な葛藤に苦しみ、自暴自棄になりそうな時期もあった。しかし、他人を納得させられるような議論を展開することもできない、こんな私の意見にも耳を傾け、不十分な点を指摘したり反論をぶつけてくれたり、真剣に向き合ってくれる仲間からは、本当に多くの刺激を受け、様々なことを学んだ。正直のところ、この本会議で自分が議論に貢献することは殆どできなかったと思う。しかし、ここで得た多くの学びをこれからの人生に活かしていきたい、そう強く感じた分科会活動であった。

京都大学大学院　川部好輝

優秀な米国の学生とタブーを恐れず堂々と議論したい。その思いで私は第 67 回日米学生会議に参加した。そしてその思いは分科会を通じて大方達成されたよ

うに思われる。私の分科会活動は準備の一言に尽きる。準備に苦しみ、準備に笑った分科会であった。

春合宿から本会議が始まるまでの3か月間、準備に苦しんだ。普段の生活の中で非日常であるJASCをどれほどまで日常化できるか。全国に散らばった参加者と直接顔を合わせることが困難な中、大学院の研究や課外活動に忙殺されつつも、この非日常に対するモチベーションを維持することは非常に大変であった。

本会議が始まり、分科会活動が日常化してからは、毎日の準備が功を奏したと言える。参加目的、興味、経験すべてが異なる日米の学生が希望通りとは限らない分科会に配属され、限られた時間の中で1つの成果に辿り着かなければならない。この点が分科会の難しいところである。私たちの分科会テーマである「メディア」は大変広く漠然としたものであった。メディアをどの切り口から捉えるか、それによって見えてくる問題、アプローチの仕方が異なる点でより難しい。私はJASCにおけるディスカッションとは、参加者同士が各意見に関して批判と妥協を繰り返しながら、大方納得できるものへと落とし込んでいくためのプロセスであると考える。米国側参加者と圧倒的な英語力の差がある中、私は説得力ある意見なしには議論できないと考えた。事前に考え、それを論理立てて説明できるようにすることを常に心掛けた。まさに準備である。夜寝る前、バスでの移動中、トイレの中、1人の時間を作っては分科会のことを考えた。全員が「大方納得できる」もの、その実現は決して容易ではなかった。各人が己の90%若しくはそれ以上のものを求めるときに衝突があった。それらを乗り越え、無事にファイナルフォーラムを納得できる形で終えることができたのは、準備の賜物である。

京都大学　鷲見まどか

メディア分科会に決まったと知った時、大きな不安を覚えたことを今でも忘れない。メディアについて学んだ経験がなく、分科会活動に貢献できるかどうか確信がもてなかったからだ。しかし、春合宿でそのような不安を一瞬でかき消してくれたRTメンバーとリーダーに出会った。興味分野が一人一人異なるものの、互いにしっかりと意見を持っており、時には議論が活発化し、本会議を含めたこれからの4ヶ月が順風満帆に進むかのようにみえた。しかし春合宿以降、それぞれの学業や課外活動との兼ね合いから、徐々にJASCが後回しになりはじめ、メンバー全員が顔を合わせられる週1のオンラインミーティングさえ危うい状況に陥ってしまった。十分に議論を重ねられないまま、ついに本会議が始まった。

圧倒的な準備不足ゆえに、本会議中は日本側参加者同士の意思疎通がうまくいかないこともあり、衝突も多かったよう

に思う。それに加えて最初の週は、アメリカ側参加者のペースに飲み込まれ苦労の連続であった。しかしメンバーの一人が「図」を用いたことでより方向性が定まった議論を重ねられるようになり、相互理解を深めることができた。時には、「21世紀のメディア」というテーマを超えて、両国における民主主義に対する価値観の違いについて議論することもあった。

過熱した議論のあとでも、笑いが絶えることがなかったメディア分科会。誰か一人が欠けていては、成り立たなかっただろう。このメンバーが集まることは必然的な運命であったのだと感じざるをえない。

■分科会総括・コーディネータ後記

21世紀におけるメディア分科会は、5月の春合宿に始動し8月の本会議が終了するまでの4ヶ月間にわたって、現代におけるメディアの問題点、メディアのあるべき姿について模索し議論を重ねた。準備期間においてメンバーは学業や部活動、課外活動で多忙を極め、中々顔を合わせることができず、もどかしい日々が続いた。メディアに関して専門的に学んだことのある者はおらず、皆自分自身の経験を頼りに議論を重ね、議論に深まりがでない。米国側参加者を迎え、どのような議論をすべきか、焦りと不安を抱えたまま本会議に突入した。本会議では米国側参加者と合流し、それぞれの興味関心を共有、日米のメディアを取り巻く環境を比較することから議論がスタートした。参加者が準備期間にもがきながら学んできたことが本会議で花開いたように思う。日米のメディア環境の比較においては、双方のメディアが政治権力や商業権力とどのような関係にあるか、学んできたことをチャートにまとめ、システマチックに両国の違いや問題点を解き明かした。今まで事前学習してきたことをアメリカ側にぶつけ、新たな化学反応が起こったように思う。メディア分科会の特徴はそれぞれの独創性。3週間の集大成であるファイナルフォーラムでは、独創的な新しいメディアプラットフォームを考案し、聴衆にその必要性を訴えた。参加者がそれぞれ自身のアイデアを持ち寄り、メディアプラットフォームを創るプロセスにはコーディネーターとして心から感銘を受けた。私自身が行ったことと言えば、場づくりと初めのテーマ設定のみ。その他の議論はすべて参加者の手で組み立て、参加者自身で結論を出した。徹底的に考え抜き、自主的に意見を述べ続けた参加者に心より賞賛の言葉を贈りたい。末筆となるが、大変ご多用の中我々メディア分科会のためにお時間を割いてくださり、深い学びの場を提供していただいた、NHK元副会長の今井義典様と日本経済新聞社編集委員の関口和一様に改めて御礼申し上げたい。（鈴木良祐）

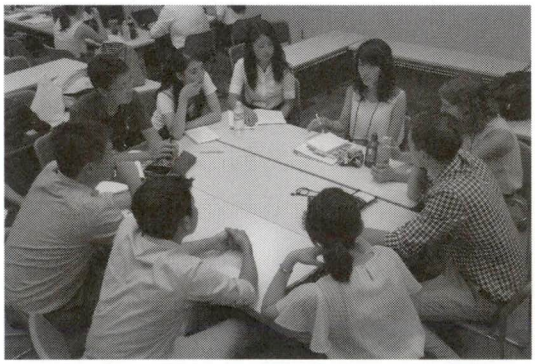
今日の教育とこれからの取り組み

◇日本側コーディネータ
矢島ショーン

◇日本側参加者
北原祐理
塚本大志
萩原夏花
矢部真裕子

◇アメリカ側コーディネータ
Lisa Kanai

◇アメリカ側参加者
Robert Duanmu
Ryo Kono
Walter Pugil
Catherine Warmuth



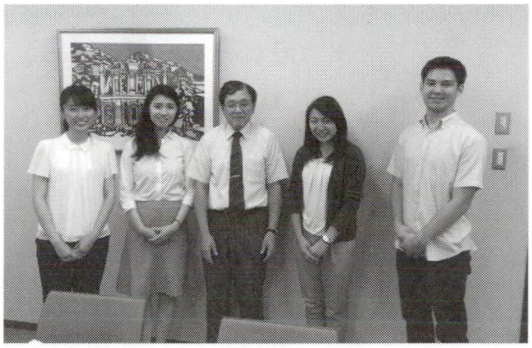
■事前準備活動

◇FT報告

玉川聖学院　中等部・高等部

中等部長　水口洋様

今回のフィールドトリップでは、既存の教育システムに満足せずに自ら「生きる力」について総合の時間を作り実践している教育現場を見られた、という点で非常に有意義であった。日頃のミーティングでも総合の時間やグローバル人材の育成について話し合っていたが、あくまで想像論で終わってしまい、ディスカッションの意味が見出せなくなってきていた。だが、今回のフィールドトリップを通して教員が一から生徒達に伝えたい「生きる力」のカリキュラムを作り、それを実践している完全にオリジナルな学校の存在に驚いた。カリキュラムも人文社会のアプローチから大学レベルの答えのないテーマをあえて取り上げ、そうすることで詰め込み式からの脱却を図り、生徒自身が生きる上で使う「考える力」を養っていた。直接お話をお伺いすることで学校理念のこだわりが伝わってき、また、私達の質問にもご丁寧に答えてくださり、大変有意義なフィールドトリップとなった。(矢部真裕子)



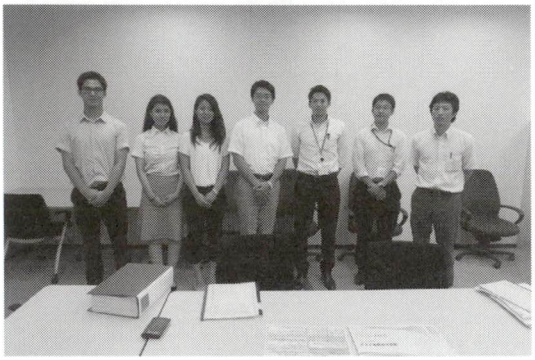
水口様訪問

文部科学省

高等教育局　畑島晃貴様

私は高等教育における教授法、アクブラーニングに興味を持っており、このテーマについて学んでいる。私は日本の未来の教育の計画の中になぜアクティブラーニングと言うものが組み込まれているのかということについて疑問に感じていた。またこの言葉の意味をどのように文部科学省は捉えているのかということについても興味を持っていた。文部科学省に勤めていらっしゃる方のお話の中に、私の知りたいと感じていた点の答えがあり、大変充実したフィールドトリップになったと感じた。普段私たちからはどのような意図で教育に関する諮問や委員会、決議が行われているかということを知る機会は少ない。しかしこの経験から私は文部科学省の方々は日本の教育をより良く向上させるために様々な側面から教育を考えていらっしゃるのだなと強く感じた。また興味のある範囲の教育の意図に

つい知ることができた。文部科学省フィールドトリップは私にとって意義のあるものとなった。（萩原夏花）



畑島様訪問

株式会社　経営共創基盤（IGPI）
冨山和彦様　英綾子様

本 FT を通して、大学にも経営する意識やビジネスの視点が求められるようになっていることを実感した。特に現在のところ、大学市場において偏差値が唯一の価値基準であるが、そこにグローバル／ローカル志向、アカデミック／プロフェッショナル志向という新たな軸を置くことで多様性を増やし、大学を今以上に鮮烈に選ばれる存在として位置づけていくことは非常に合理的であるように思われた。大学進学率が 60%程度になった現在では、確かに各大学が強みや提供する技能を明確にして、目的意識をもった学生を集めた方が、教育の質を維持と向上に繋がるのかもしれない。一方で、この議論をする際には必ずと言っていいほど、教育の機会平等や、学問の意義が問われる。予め多様性を用意し枠組みをつくることが機会を奪うことにならないか、明確な目的や効能が期待しにくい学問は提供する意義が果たして小さいのか、その点について再考したい。（北原祐理）

冨山様 英様訪問

東京都立一橋高等学校
角田仁様　八巻亨様

一橋高校での日本語の補講の見学と、先生方のお話を伺って、日本で暮らしていくために越えなければならない壁の多さを改めて感じた。親の都合で日本にやってくる生徒が多い中、言葉や在留資格が壁となって生きにくくなってしまうのはあまりに酷である。そのような生徒が多く通っている状況で、一橋高校は学校の存在価値が他の高校と大きく異なっていると感じた。一橋高校はもはや教育する場としての役割を超え、居場所づくり、仲間づくりの役割も担っている。ただ基礎学力をつけさせ、大学進学に備えさせることだけが高校の役割ではないと痛感した。自分も中学や高校で自分の居場所

を見つけられず苦しんだ経験があるので、言葉や在留資格によって苦労し、居場所まで失ってしまうような生徒が少しでも減るような環境が整ってほしいと切に願っている。（荻原沙理）

角田様 八巻様訪問

学校法人インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢

少人数精鋭、留学生の積極的な受け入れ、9割の外国籍教師陣、リーダーシップ育成のためのカリキュラムなどの独自の教育方針を実現するISAKのバックボーンには、多様性とリーダーシップの繋がりを重視し、正解のない問いに対して臆せず考える能力を育成するという明確な信念があるように感じた。議論の余地がある点としては、リーダーシップを培った人材は結局いわゆる進んだ国に進出し、同じように優秀な人材が集まる環境で社会に貢献することをよしとする傾向あるいは価値観が存在する点である。特にISAKの子どもたちは、自国を出て日本での教育を選んでいることからも、自国に対する愛着やアイデンティティの形成の上では特殊で少数派の過程を経ているといわざるを得ない。「自分のもつ能力を誰のために使いたいか」という観点や、子どもが自らのアイデンティティの基盤をどこに置くかについても配慮した教育が望まれると考えた。（北原祐理）

◇定例ミーティング

「今日の教育と未来への取り組み」分科会では、それぞれの興味分野を掘り下げながら、教育の本質や共通の問題点に到達することを目指した。スカイプ・対面を使い分け週1回程度の定例MTGを行い、担当者による発表とそれに続いたディスカッションを行い理解を深めた。またアメリカ側の参加者と合流する準備として、アメリカ側の分科会メンバーの論文を一人ひとつ担当し、事前に内容を共有した。フィールドトリップに関しても、各メンバーが積極的に企画したことにより、質・量ともに充実した活動ができた。（矢島ショーン）

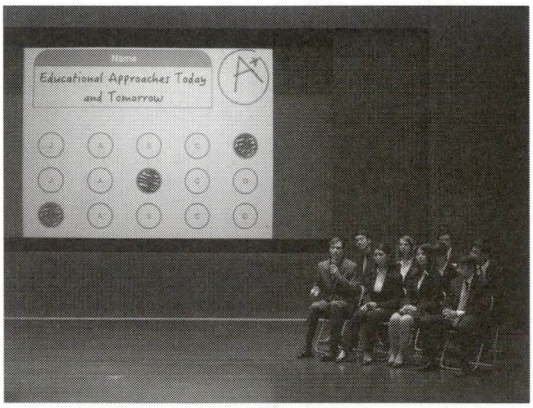
プレゼンテーションの準備

■ファイナルフォーラム

我々の分科会では、教育に対して各自が異なるテーマの問題意識を持っていた。従って、分科会活動の前半ではそれらの問題意識について日米両国の現状の共有を含めた議論を行ったわけであるが、その結果、特に①学校現場において子供たちが自信を持ったり自尊心を高められたりする機会が不足していること、②受動的で一方通行的な授業形式が子供たちの学習意欲を低下させる原因になっていること、③現在のグローバル社会に対応した人材育成において異なる文化やその背景に対する視点が不足していること、の３点を、現在の教育、とりわけ現在の学校教育における重要な問題点として取り上げるに至った。そこで、ファイナルフォーラムにおける我々の発表では、これら３つの課題に対する具体的な改革案(ソリューション)を提示し、更に学校教育が目指すべき１つの人材教育の在り方として、アクティブラーナーの育成という機軸(ビジョン)を打ち出したのである。

ここでソリューションに関しては、学生主体で全員参加型のディスカッション及び発表志向型の授業形式や、所謂反転授業形式の導入、あるいは一層の創造的な評価システム(GPA System)により従来の評定体系では見落とされていた個人の能力や可能性を評価し、個人の価値を幅広く認めて自信の深化や自尊心、学習意欲の向上を促す仕組みの創出、更には近年ますます盛んになるグローバル化に対応した教育として、文化に対する理解を促進することにより異文化や文化的係争問題を理解する素地を養う取り組みなどを挙げ、これらが自律及び相関して学校教育をより良きものとし、それが能動的に自ら学び取る姿勢を備えたアクティブラーナーを育てるとした。

なお、このファイナルフォーラムの発表に向けた準備は、取りも直さず１ヶ月に渡る議論の成果を僅か15分間という短い枠組みに纏め上げる作業であり、その過程は各自の熱い想いがぶつかり合う中で困難を極めた。しかし、議論の本質や分科会として１番発信したい内容を再度明確にすべく議論を尽くしたその過程こそ、あるいは「相互理解」が最も深まった瞬間かも知れないと感じている。(塚本大志)



発表の様子

■分科会感想文

東京大学大学院　北原祐理

教育は全ての人が経験し、理想を追うべきものである。このテーマにかねてより惹かれ、米国の学生と議論し合う場を得たことは知的刺激に溢れる体験だった。

本分科会の誇れる点は各々の関心への尊重である。8人が異なる切り口をもつにもかかわらず、互いの問題意識や教育制度を面白いと感じる態度が、議論の豊かさに繋がった。画一的な偏差値制度への偏りは日本固有の問題なのか。“グローバル人材”の概念はアメリカには存在しないのか。学校への不適応や子どもの自殺にかかわる自尊心の低さをどう扱うか。両国で必要の叫ばれるアクティブラーニングの意義とは……。これらは一見文化に依存する固有の問題に思われるかもしれない。しかし議論を深めると、実は共通して存在する問題も見えてくる。日米両参加者に共通した問題意識とは、裏を返せば、教育に見出す共通の価値・役割なのではないか。

ここで考えたのは、第一に、あるテーマを異なる第一言語をもつ者同士が議論する意義である。母語であれば、多少意見をごまかしても通じることや筋が通っているように聞こえることもある。しかし、言語の壁を超えるには、徹底して言いたいことを明確にし、伝わるように組み立てることが大切である。その積み重ねにより、互いのテーマに対する視座を理解するとともに、自分の意見をより明らかにすることができる。第二に、“constructive compromise”の価値である。8人もいれば最終発表ではどこかしら妥協をせねばならない。建設的な妥協をするには、相手が何に重きを置き、それが自分のものとどう違い、どう納得できるかを共に議論することが不可欠であった。発表は成果発表型にするか政策提言型するかなど、必ずしも正解がない事柄について、立ち止まって互いの意向に真摯に耳を傾け、理解した上で何かを決めて進む。分科会活動の全過程が、まさに「相互理解」の体感であったと今ふり返って思う。

徳島大学　塚本大志

春合宿で分科会の日本側メンバーと初めて顔を合わせた時、自分以外はみな既に専攻や過去の経験、将来希望する進路等において種々の教育問題と深い接点を有している中で、一応は第一希望の分科会であったものの、それまで特段意識することもなく単に与えられる教育を享受してきただけの自分は、設定されたテーマに関して浅薄な見識しか持ち合わせていない自らの状況に大きな焦りを感じた。それゆえ本会議までの約3ヶ月間は、教育に関する様々な文献を読み込むことやフィールドトリップでその分野の当事者や専門家の実際的な話を聞くことを通じて自分の中に新鮮な知識や考えを蓄積させていく作業に、確かな手応えとともに

楽しみをも見出していたのであった。

アメリカ側参加者と合流してからの本会議中の議論について言及すれば、既存の学校教育という枠組みの中でその内容や制度をいかに改善させるかという点に的を絞って話が進んでしまったことについては、より具体的で現実に即した議論を展開する上でやむを得なかったこととはいえ、個人的には些か物足りなさを感じたのも事実である。最終的に学校教育をより良いものにする工夫を議論するにしても、まずは広く社会における教育の位置づけやあり方を規定した上で、そもそも学校という既存の教育装置それ自体の存在意義を問い、それから具体的な議論に進んだ方が、その成果はより深みや創造性を有するものになっていたのではないかというのは今になって思う反省点。それでも、ファイナルフォーラムの発表において、学校教育が担う役割の重要な基軸の一つとしてアクティブラーナーの育成という概念を打ち出せたことは、大いに自負できる成果ではなかろうか。

最後に、あまりに高く分厚くそびえ立った言語の壁を前に、いつも立ちすくんでどうすることもできなかった自分を常に気にかけてくれた心温かい分科会のコーディネーターやメンバーに、深い感謝の意を示したい。

東海大学　萩原夏花

私は本会議を通し分科会のメンバーから大変多くの点について学んだと感じている。まず学ぶ事のできた1点としては英語での議論の仕方と教育の知識であろう。私は英語面に対し不安を感じており議論についていく事で必死であった。しかし、分からないときは分からない旨をしっかりと伝え議論の内容を理解しながら教育について考え、議論する事ができた。議論ではアメリカ側の教育システムと日本側の教育システムの違いについて共有をする議論に始まり、日米双方の議論を基にした将来の理想とする教育像の提言に終わった。分科会活動の報告の場であるファイナルフォーラムにおけるプレゼンテーションでは、理想とする教育像について発表を行う事ができ、大変充実した分科会活動となった。

学ぶ事のできたもう1つの点は、人間関係と衝突であった。長い時間の分科会活動の中では、議論のすれ違いやコミュニケーション不足から生じるメンバー同士の衝突もあった。教育という本質を深く考え議論した故の衝突であると感じた。普段の大学生活において、私は他者と衝突するまで議論をするという経験は今までした事がなかった。”自身の意見を相手に伝えながら相手の意見を認め尊重する”まさにこれは本会議のテーマである相違理解なのではないだろうか。衝突を恐れず議論をした結果、本質的な議論に至る事ができたのだと感じた。私は本分科会に所属する事できて大変良かったと感じ

ている。なぜなら、心の底から自身の意見を言い合う事のできる仲間に出会う事ができたからだ。今後とも参加者間での交流を続けていきたい。また第67回の経験を生かし、来年の第68回会議に向けて実行委員として運営に携わっていきたいと考えている。

慶應義塾大学　矢部真裕子

分科会活動では時間をかけた分、普段では経験できないような深いディスカッションをすることができた。結論を出すことよりもディスカッション中の「寄り道」に重点をおくことにし、個々のテーマをもとに自由なディスカッションに多くの時間を割いた。それぞれの教育環境も経験も異なったが、個々の体験をもとに共通のテーマを抽出した。

その中でも議論が進むにつれてそれぞれの役割を見出すようになり、それぞれがグループのまとまりが出るように考えて役割を見つけ行動することができた。例えば、通訳の役割を訳すだけではなく、議論が促進するように論点を捉え、比較しながら伝えるなど、ディスカッションの場で自分ができることを見つけ実践することができた。時間が経つにつれて他の参加者も言語の壁を越え、自らの役割を見出し、より活発なディスカッションができた。

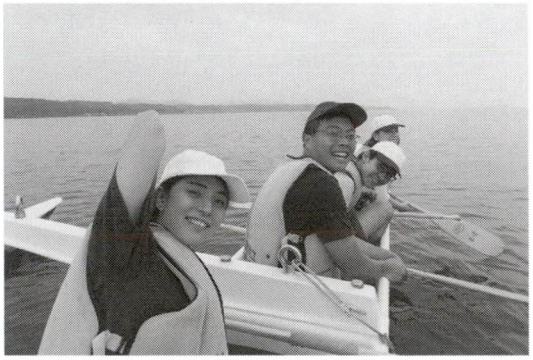
だが、終盤ではファイナルフォーラムに向けてプレゼンテーションを形作る中で議論の衝突を体験した。丸一日かけてお互いが何を考え、どのような点に引っかかっているのかなどを話し合った。相手の背景をすべて理解すること、発信者の意図をすべてくみ取ることは難しい。だが、一つ気付いたのはその行程自体に意味があるということだ。お互いの考えを素直に述べ、ぶつけるということが最も大事である。そこで共通した結論を出すことは必ずしも可能ではないが、お互いの考えを理解すること自体に意義があると感じた。このように他者を理解することは分科会活動だけで通ずるものではなく、実社会においても重要な姿勢である。JASCが終わった今もこの体験をもとにそういった姿勢を持ち続けることが大切だ。

■分科会総括・コーディネータ後記

まずはフィールドトリップやその実現に貴重なお時間をさき、協力してくださった皆様に、心からお礼を申し上げたい。こうした事前準備のおかげで、本会議での議論がとても充実したものになった。

分科会メンバーがそれぞれ興味分野をもち、積極的に取り組んでくれたおかげで充実した分科会活動がおくれた。すべてが順調だったわけではなく、事前準備や本会議中、さらには個々人の中でさまざまな葛藤があったが、それも含め第67回日米学生会議教育分科会だと思う。これからも勉強に遊びにと、末永くつきあ

っていきたい。
（矢島ショーン）



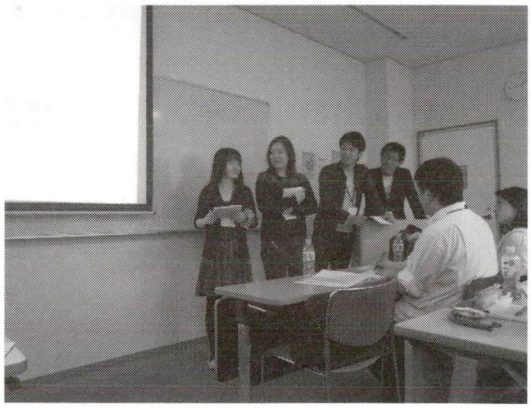
エコハザードと資源の持続可能性

◇日本側コーディネータ
藤井一衆

◇日本側参加者
飯田夏木
大谷慧
菅野緑
白石拓也

◇アメリカ側コーディネータ
Harrison Bade

◇アメリカ側参加者
Yingzhe Fu
Emily Okikawa
Chiao Chun Yang



■事前準備活動

◇FT報告

環境省

自然環境局　清家裕様　橋本和彦様

地球環境局　上翔様　新原修一郎様

「環境政策の現状」を把握するために、環境省を訪問。印象深かったのは、「役所では、政策のために5年から10年スパンで結果を出さなければいけない。」という話である。環境省では短期目標、学者は長期目標での理想環境を提示するので、役所と学者で意見の齟齬が出るということ。また、日本やアメリカでは「どの町でも安定してできる政策」というものが好まれているとのことであった。よって今回、GEARSで都市構想を行う際、どんな場所においての都市構想なのか明らかにすることの必要性を改めて感じることになった。今回のFTにおいて、化石燃料はじめとする資源の持続可能性や、都市構想の理想だけでなく、現在抱えている問題と、社会的・自然的要因を明らかにすることが問題点だと思った。その為、今後のFTでは、企業を訪問し、現在抱えている問題をどのような技術で解決しようとしているのかということを明らかにしたいと考えている。（菅野緑）

環境省訪問

三井物産

大久保雅治様　北澤祥子様

商社という立場からのお話は、前回のフィールドトリップで訪れた環境省でのものとは大きく異なり非常に興味深かった。一企業としての、経済性を追い求めながらのプロジェクトはリスクもある。しかしながら、綿密な計画を元に出来る限りのことを行っていることがうかがい知ることができた。また、三井物産の行うプロジェクトの中には海外の人々の生活をも変えるような影響力があると知り、日本が誇る商社の立場上の重要さが理解できた。エネルギーの分野ではとりわけ多くの国でのプロジェクトがあることを考えると、日本が海外のエネルギー資源に依存しているということが再認識できた。商社は非常に特殊な立場にあり、FTを考える以前は商社がこのように深くエネルギー開発事業に携わっているとは知らなかった。行政の視点から環境につい

て考えることも必要だが、企業という利潤を追求するものの視点から環境を見ていくことの重要さについて FT を通して実感した。（飯田夏木）

NPO Earth Literacy Program
京都造形芸術大学教授　竹村真一様

当分科会での推奨書籍であった「地球の目線」が本訪問の発端である。今後のエネルギー問題を克服するための斬新なアイデアが書かれたこの本を読んで自分は地球エネルギーの明るい未来を垣間見、また同時に本当にこんなこと実現できるのかと竹村様の描く未来像に非現実性をも感じていた。しかし、この日米“学生”会議の分科会活動で夢のある解決策を提言してこそ意味のあるフォーラム発表となると自分も思うようになった。竹村様のお話を聞いてさらにその気持ちが強くなった。できない言い訳の前にできる方法を見つける。本会議での議論の過程でいろんなアイデアが出ると思うが、決して不可能と切り捨てるようなことはせず、あらゆるアイデアを視野に入れながら自分の考えを探っていきたい。
（白石拓也）

独立行政法人国際協力機構
中島洸潤様　楜澤理奈様　大森駿様

今回お話いただいた JICA 職員の御三方、一人一人が携わった発展途上国開発時の大変さについてお話を聞き、開発の大変さを垣間見ることができた。現地の住民のニーズを理解した上で事業案を作成し、環境影響評価を始めとする様々な基準をクリアし、許可が出てから現地住民に事業内容を説明する。そしてそれらが完成するまでに膨大な時間や資源、労力が必要となる。事業案が却下されることだって多々ある。我々も本会議を通して持続可能な都市開発を提案するとなると、もちろん夢を追いかけることも大切だが、あらゆる条件を見据え、現実を踏まえることも重要である。この日は「夢を持とう」と思えた竹村様のお話、「思い通りにはならないことが多い」と感じた JICA 職員のお話を聞くことができた。本当にそのアイデアは社会に貢献するのか、誰がどれくらい、いつまでその恩恵を受けうるのか、多角的な視点を持って、理想と現実のバランスを吟味しながら議論をしたい。（白石拓也）

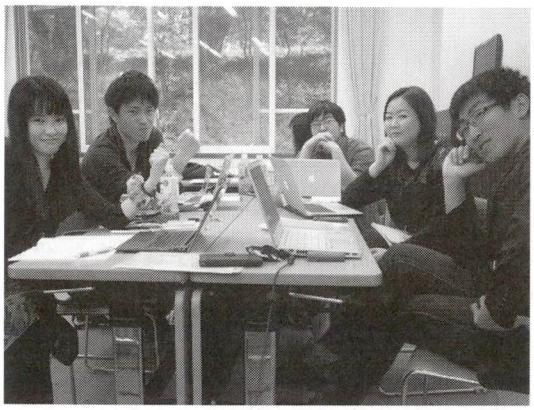
◇定例ミーティング

当分科会は全員関東圏在住者だったため、オンラインの他にも対面によるミーティングが行われた。最初は各自の興味分野を書籍やネットで調査・発表していたが、後に調査範囲を絞り調べた結果を発表し、議論することに時間を割くようになった。こうしてミーティングを重ねるにつれ見出された論点や疑問を次の段階に進めるために、当分科会ではミーティングの内容をまとめた上で専門家を訪

れ、更なるインプットに力を注いだ。アメリカ側とのミーティングでも時差の関係で数は多くないものの、お互いの興味分野について話す機会を設けることができた。上記のような活発な活動が行われる中、個々で独立して興味範囲に情熱を持って取り組んでいたこともあり、最後までどこに焦点を当ててよいのか苦戦していた。だが、最終的にはそれぞれの興味分野がどのようにお互い交わっているのかを探り、相互理解の発展に努めた。

（藤井一衆）

白熱した議論



春合宿にて

■ファイナルフォーラム

「１人１人のライフスタイルを変えていく。」これが私たちの分科会が至った結論である。様々なことを議論していくうちに、私たち自身が色々な環境問題を作り出している原因なのではないかという話になった。そして、自分自身が変わらないといけないという結論に行き着いた。１人１人の力が集まれば、大きなmovementにすることができるのである。私たちの分科会は「why?」という部分にフォーカスした。なぜライフスタイルを変えなくてはいけないのか？なぜ東京なのか？といったことについても分科会のディスカッションで突き詰めていった。

エコハザードと資源の持続可能性という非常に大きいテーマが与えられた中、私たちは地球規模のものから自分達の身近な環境問題まで様々な側面から議論をした。ディスカッションが思うように進まない葛藤もあったが、メンバー全員の社会的にインパクトあるような発表をしたいという強い意志が、私たち分科会のファイナルフォーラム成功へとつながったと感じている。ファイナルフォーラムに行き着くまでは長い道のりであったと思う。限られた時間、そして過密なスケジュールの中の分科会の時間は非常に貴重だということが東京サイトに近づくにつれ身にしみて感じられた。

ファイナルフォーラムではmyMovement という形でライフスタイ

ルの変化をもたらすような運動を発表した。そして、人口過密などの都市部の問題を抱えるが、ポテンシャルも高い東京をモデル都市として提案を行った。具体的には１人１人がすぐに行動できるような、myBag と myBottle という身近なところから提案をした。またリフィル式の自動販売機の設置やエコバックのデポジットシステムの導入といったユニークなポイントも発表した。

私たちがファイナルフォーラムで行ったこの発表でどれほどの社会的影響が与えられたかは分からない。しかしながら、分科会メンバーをはじめとした日米学生会議参加者のライフスタイルを少しではあるが変えられたのではないかと感じている。そして、この分科会自体も１人１人の力が集まって、ファイナルフォーラムで発表を行うことができた。一生心にとめておきたい発表となった。（飯田夏木）

ファイナルフォーラム①

ファイナルフォーラム②

■分科会感想文

東海大学　飯田夏木

日米学生会議の事前準備から始まり本会議までの非常に多くの時間を共にしてきたのが分科会である。分科会メンバーとは葛藤や喜びを分かち合ってきた。そして最終的には、私にとって分科会は何だか居心地の良い場所となっていた。

様々なことを考え、話し合い、私は２つの重要なことを分科会活動から学んだ。分科会活動で私が得た学びは「why?」と「my」の大切さである。「why?」という質問は本質を問うものである。そして、それに対しての答えが最も難しい。なぜ私はこの分科会にいるのか、なぜこのテーマのディスカッションをするのか。「why?」を常に自分の心に刻んでおくことで何か自分の中に芯ができた。「my」はファイナルフォーラムでの分科会発表内容に関係する。自分自身が行動を起こすことで何かが変わるといった「my」である。分科会活動はチームワークである。

しかしながら、最終的には個人個人がインプット・アウトプットをしないことにはチームワークは起こり得ないのである。個人の力が合わさることによって大きな力となることを実感した。

最後に、分科会を支えて頂いた人々に感謝の気持ちを忘れないようにしたい。事前準備のフィールドトリップに協力して頂いた方々には様々なことを教えていただき、非常に感謝している。人々の協力なくして分科会活動は成し得ないものであった。全体を通して、分科会は「エコハザードと資源の持続可能性」というテーマを深く考えるキッカケともなったが、人と人との交流で学んだことが私にとって一番の収穫である。

東京大学　大谷慧

この分科会でなければ、日米学生会議に参加しないと豪語した二次選考の3月から本会議終了までの5カ月間の分科会活動はエコハザードと資源の持続可能性というテーマがどれほど環境問題を考える際に的確で網羅的なものなのかを日増しに実感する日々だった。現代の環境問題は発覚した当初の数十年前に比べ、極めてその政治性が強くなっており複雑さは格段に増している。しかしそれでもなお自然環境が破壊され、そのことが自然環境を利用して生きる自分たちを困らせているという簡単な構造は変っていない。積み重なる議論の末にこの簡潔な構造に再度気付けたときに、日米の壁や各自の関心興味の違いに関係なく、僕らの分科会が一致団結して各人の行動選択こそが環境問題の解決の鍵なのだという想いを持てたことは本会議にとどまらず、今後の自分の在り方・考え方を大きく変えてくれるように思う。準備期間は必ずしも十分な議論を重ねられたわけではなかった、また英語面でもメンバー全員が満足の行く準備が出来ず、本会議では苦労させたことが多かったなど後悔も多いが、最後までやり抜くことで得られた学びも大きい分科会であった。また、僕自身が本会議までの期間を休学して帰省していた時に調べていた汽水域の研究に限らず、環境問題にフォーカスした研究や報告書以外にも様々な分野の考え方が分科会活動の節々で活きたことは複合的な社会問題について考える際の大きな生きた知恵となった。

早稲田大学　白石拓也

この文章で、自分たちがどのような分科会活動を行ったのかを具体的に書くつもりはない。日本側参加者の事前準備期間含めたら120日間の活動、アメリカ側参加者と議論した本会議はたったの3週間弱の活動。この限られた時間の中で、ましてや自分のような“環境問題初心者”がいた中で、どのような環境政策を考えられるかなんて、たかが知れている。そ

んなことよりも、夏の本会議中に自分ともう一人の分科会メンバーとの間で感じた“感情の変化”が最も印象に残る。彼とは初めから性格が合わなかったし、考え方も異なった。第一サイトの広島からずっと「こいつ何言ってるんだ？」の繰り返し。しかし、意見が合わなくとも、議論が深まらなくとも、チームとして前に進んでいく必要がある。そういったプレッシャーを与えてくれたのは、言うまでもなく「ファイナルフォーラム」の存在である。何はともあれ、3週間弱の議論の末には分科会としての総括を公にプレゼンテーションしなくてはならない。この“目的地”の存在が、絶妙な形で、自分と彼の考え方の違いを引き寄せたように思う。もし、日常日本での他者との付き合いなら、考え方が合わない人がいたとしても、無理に相手を理解しようとする必要はない、故にそのまま関係が並行する場合もある（少なくとも面倒くさがり屋な自分はそういうことが多い）。こういった意味で、日米学生会議の本会議の分科会活動は“非日常的”な時間だったように思う。

■分科会総括・コーディネータ後記

当分科会で参加者は準備期間中に自身の学業や課外活動で多忙を極める中、分科会活動にも積極的に参加し、お互いの親睦を深める中で自然や資源について語り尽くし、自ら進んで学習し、専門性の向上を常に努力していた。最初は自分が学習した又は体験したことを頼りにミーティングで発言していたが、回を重ねるごとに議論の内容が深まり、ある点を境に学生だけでは進めない点に到達すると、次の段階に進むために専門家を訪れた。本会議で米国側参加者との合流後は当初順調に思われたが、時間が流れるにつれ状況は一変し、個々の興味対象をどのように融合させていくのか、と議論の対象がシフトしていったため、メンバー間での衝突が多発し、それまでシステマチックだった議論が人間性の見える議論へと変貌を遂げていった。最終的には複雑な分野ではなく、より単純なところからこれまでの疑問を解き明かすことになった。3週間の集大成であるファイナルフォーラムでは聴衆にエコ活動の原点回帰を促し、一人一人がその重要性を認識する必要性を訴えた。

当分科会を一言で表すとすれば「Kinetic（活動的）」だろう。そのフットワークの軽さと思考の柔軟性が当分科会を形成した。議論中の良案は取り込み、折り合わない部分は妥協し、不要になれば排除し、わからない場合は専門家を訪問するというサイクルがあった。当分科会のプラットフォームが創り上がるまでに時間をかなり割き、時折参加者から嘆き声が漏れていたが最後まで諦めずに進めた。メンバー間で自主的に意見を述べ、それに異議を唱え、新たな疑問を生み出し、更に

議論を深め、壁にぶつかれば調べるという姿勢を最後まで崩すことはなかった。こうした姿勢はコーディネータとして心から感銘受けると同時に彼らへ心より賞賛の言葉を贈りたい。今回の会議で多角的に自然を考察し、見出した答えが将来的に彼らの中で生き続けることを願うばかりである。末筆となるが、大変ご多用の中、当分科会のために時間を割いてご協力くださった方々に改めて御礼申し上げたい。

（藤井一衆）

■□第６章

日本側代表団の声

第6章　日本側代表団の声

＊実行委員会＊

実行委員長　松居純平（青山学院大学）

この会議の運営を始めると同時に、私はある決意をしていた。それは、自分と周りに対して、どんなに目を瞑りたくなることも、正面から「向き合う」ことであった。日米実行委員会の毎週の議論は、自分と周りを映す鏡であり、私の光と闇を残酷なほど眩しく映していた。時に自らの不甲斐無さに嘆き苦しみ、また時に仲間への苛立ちに怒り哀しみ、決して順風満帆と言える航海ではなかった。しかし、手探りで前進を続けたこの船旅の先には、思わぬ発見や新しい景色が待っていた。

「参加者のための会議」という目標に向かって過去最高の会議を目指すのであるが、必然的にそのイメージは少しずつ異なる。「なぜ、この会議が必要なのか。なぜ、今、日米なのか。なぜ、自分なのか。」それぞれの問いに対して実行委員会内の認識も違えば参加者の認識も違い、前進には再定義が必要となる。そのため、千差万別の衝突や葛藤が生まれる。この過程で求められたのは、個人ではなく意見を批判し続ける姿勢であった。また、「なぜ？」を追求し行動する目的意識と、相手の土俵に立って考える他者意識は、様々な価値観のメンバーをまとめる中で最大の挑戦であったが、今となっては今後の人生を後押しする財産である。

しかしそれ以上に言及しなければならないのは、生涯本音で語り合える「友情」が芽生えたことである。第6回と第7回会議に参加された宮澤喜一元総理大臣が主役級で登場する城山三郎著「友情 力あり」で語られる、会議終了後も続く友情の意味を噛み締めることになるのは、これからの人生なのであろう。その意味で、私にとってこの会議の本当の意味が問われるのは、むしろこれからの人生なのである。日米学生会議で培った絆と経験と共に、今後の人生を力強く歩んでいきたい。

副実行委員長　森鞠乃（学習院大学）

去年の夏、アメリカで三週間を過ごした自分が、今度は来年の参加者に日本の夏を紹介してあげたいという強い気持ちに押されて私は実行委員に立候補した。

その思いを心の片隅に置きつつ、広島・島根・京都・東京の4開催地にて地域の特色に合わせて日本の文化を紹介できたことは、自分が実行委員になりたいという動機を実行に移すことができ、私にとっても大変有意義な経験であった。特に、京都では当地の歴

史を肌で感じ美しい自然に触れながら、怒涛のスケジュールから一息ついて会議の疲れを癒すことができた開催地となった。様々な困難に直面した京都開催担当としては、皆がリラックスしている表情は、私に安堵をもたらした。

さて、今年のテーマである「過去と向き合い、未来を拓く～衝突と多様性あら生まれる新たな相違理解～」で、殊に私が今年の会議において強調したいと思っていた言葉は「向き合う」だ。本会議で分科会活動やフィールドトリップ等、毎日を忙しく過ごすうちに自分がやりたいことは何か、会議で目指したいことは何か、見失ってしまうことがある。初心にかえり自分と向き合う時間を参加者に少しでも作ってほしい、そして私自身も大切にしたいという願いを込めて、「向き合う」という言葉を大事にしてきた。自分の気持ちに素直になり、弱い私、強い私を見つめることは決して簡単なことではない。しかし、日米学生会議をきっかけに、それを行うことの大切さを伝えることができたら、実行委員としての役割を少しでも果たしたのではないか、と自負している。

支えを頂きつつ協力し合い、一つの会議を作り上げた67回実行委員としての時間はとても濃厚でかけがえのない時間であった。67回会議を支えてくださった多くの方々に感謝の気持ちを伝えたいのと同時に、これからも特別な経験を与えてくれた日米学生会議が受け継がれていくよう、祈念したい。

実行委員　岡崎栞（慶應義塾大学）

昨年のリベンジを果たす1年間。これは私の第67回日米学生会議へかける思いの原動力であった。楽しい思い出よりも悔しい感情が強く残った昨年の第66回会議を経て、後悔のない日米学生会議を経験したい、昨年の自分のように苦しんでいる参加者を救いたい、参加者全員が形ある学びを持ち帰ることのできる会議を作りたい。この3点だけを考え、実行委員として活動してきた。1年間、日米学生会議について考えない日は1日たりともなく、まさに実行委員としての活動が私の生活の中心であり、全てであった。深夜まで続く議論や毎週末のミーティング、授業の合間をぬって行う実行委員としての細かな仕事、思い出せば大変なことは数多くあったが、どこかでそれを楽しんでいる自分がいたように思う。担当した広島サイトでは、戦後70周年という節目の年に、日米両国の学生にいかにして「平和」という大きなテーマを感じてもらうか必死に考えた。第67回日米学生会議広島サイトとしてテーマを掲げ、そのテーマに沿ってあらゆるコンテンツを企画したが、現地の方々をはじめ、アラムナイの皆様や事務局の方々など、数多くの方々の御支援なくしてはどれも実現できなかったことである。ゼロの状態から1つのプログラムを創り上げるという大変貴重な経験をさせて頂き、さらにそれをサポ

ートして下さったこと、この場を借りて、心より御礼申し上げたい。

最後に、共に1年間活動してきた実行委員に感謝を述べたい。どんなに辛い時も、実行委員の顔を思い出すと再び力が湧き上がり、気持ちを新たにすることができた。それは会議が終わった後も変わらない思いである。この先の人生で大変なことがあれば何度も思い出すだろう。一緒に1年間頑張った仲間が世界のどこかで同じように頑張っている。互いに切磋琢磨し合い、時に泣き、共に笑いあった仲間を得たことがなによりも大きな財産である。本会議を終えた今、後悔はなにもない。みんな、本当にありがとう。

実行委員　鈴木良祐（明治大学）

第67回目の日米学生会議が終了した。会議を終えて早1ヶ月。今胸のうちにあるのはなんとも形容しがたい空虚である。これから毎週四ツ谷のプレハブ小屋で実行委員同士激論を交わすこともなければ、連日連夜会議スケジュールの作成に追われることもない。光陰矢のごとし。日米学生会議のために多くのものを犠牲にした1年であった。しかし同時に実行委員に立候補するという、1年前の自分の決断は正しかったと証明した1年でもあった。2014年8月ワシントンD.C.にて。後ろ倒しになる就職活動に不安を感じながらも、手を挙げなければならず後悔すると確信し実行委員選挙に立候補した。あの時決断していなければ私の人生は全く違ったものになっていたであろう。それほど濃密で人生に大きなインパクトを与える経験であった。

自分たちの手で広報し、参加者を選抜。開催資金を集め、会議のプログラムを一から創り上げる。その過程の中で数え切れないほど多くを学んだ。3週間のプログラムのためにどれだけ多くの作業が必要か、どれだけ多くの人々の支えがあって会議が成立しているのかをひしひしと感じた1年であった。

会議の運営の中で忘れられない瞬間が2つある。1つは5月の春合宿で日本側参加者と初めて対面した瞬間。狭き門をくぐりぬけた日本最高峰の28名。彼らが日米学生会議を選んでくれたことへの感謝と、素晴らしい参加者にめぐり合えた感動で言葉にならなかった。もう1つは忘れもしない2015年8月23日。本会議の終了と同時に米国側参加者がバスに乗り宿舎を離れる瞬間。別れを惜しみ、将来の再会を誓い合う参加者を見て、自身の目にも涙が溢れた。私の1年はこのためにあったのだと報われた瞬間だった。

来年の今頃は社会人として新しい挑戦が始まっていることであろう。不安よりも期待が大きい。JASCで得た経験と誇りがあれば乗り越えられると信じているからである。Once a JASCer, always a JASCer. JASCerとしての真価が問われるのはここからであ

る。会議で得た最高のライバルたちとともに、志高く人生を歩んでいきたい。

実行委員　藤井一衆（英国シェフィールド大学大学院）

昨年の8月「私が得られた超絶な経験を次の世代へと継承したい」その一心で実行委員に立候補した。二年目にして運営側に替わった今回の日米学生会議では、新たな挑戦に16人の仲間と臨み、自分は新たな環境で全く新しいスキルを磨くことになった。実行委員に選ばれた学生は自ら会議を創出することが求められている。企画・準備・運営の全てを行うこのプログラムは間違いなく「学生の、学生による、学生のための」会議である。

個性的な学生が集まった実行委員の会議は毎週のように衝突があり、議論が収拾つかなくなる。それでも妥協を許さない姿勢だからこそ、相違理解が達成できたのかもしれない。全く異なる意見が飛び交う中、1%でも共通事項が見つかれば、そこから試行錯誤で最後には皆が納得できる新案を構築した。

実行委員は誰しもが運営上やむを得ず、犠牲にしたモノがある。それでも連日連夜の会議や作業に追われることになっても、逃げ出さずに最後まで自分のタスクに没頭した。それは将来、この日々を振り返った時に実行委員になる決断が間違っていなかったと胸を張って言え、会議や事務作業等に追われていた日々が濃厚でかつかけがえのない時間だったと感じられるようだと今では思う。

選考を終え、狭き門をくぐり抜けた28名の日本側代表団が選抜された時「準備してきた舞台で活躍することになる学生が、自分たちと同等又はそれ以上の充実感を得られるだろうか」等のプレッシャーを感じたこともあったが、今ではこうして巡り会えた一人一人個性的なメンバーへ感謝を述べたい。本会議最後日に涙を浮かべながらも笑顔で別れを惜しみ、将来どこかで交差することを誓うメンバーを見届けているうちに、自分もこの一年間の記憶が蘇ってきた。辛い時や悲しい時、楽しい時も共に過ごした実行委員たちとの日々や分科会メンバーが会議を通して成長していく勇姿など、様々な記憶が走馬灯のように映し出され、私の1年はこのためにあったのだと報われた瞬間でもあった。

実行委員　村井咲絵（国際基督教大学）

一年前の夏、目の前に散らばったバラバラのピースが8人を驚愕させた。あまりのピースの多さに、何をどこにはめてよいのか、見当さえつかなかった。一人の力では完成できないと全員が思い知った。議論を重ね、時に衝突し、共に試行錯誤した。そんな

毎日を1年間繰り返し、第67回日米学生会議というパズルをようやく完成することができた。財務、広報、選考―手のひらから溢れ、こぼれ落ちそうだったあの大量のピースも、今はもう無い。

一瞬も一秒も手探りの毎日。進めど進めど不安が付きまとったが、しかし道は前にしかなかった。参加者にとってJASCが、今までの人生に無い新たな色となることを信じて、ただひたすらに茨をかけ抜けた。

それでも立て続くトラブルや衝突を目の当たりにして、実行委員であることの重圧に何度も押し潰されそうになった。実行委員の在り方に正解などないが、的確な指示・聡明な提案を為す同期の実行委員の姿に、この仕事が自分の身の丈に合っていないとさえ感じた。

しかし参加者の、各々抱えた壁を乗り越えようと励む姿、乗り越えた先の全てを自分のものにしようとする姿を見た時、自分の1年はこのためにあったのだと改めて気づかされた。

実行委員であることは私の生活そのものだった。勿論この1年の数えきれないほどの過ちを正当化するつもりはない。それでもその幾多の過ちでさえも、パズルを完成させるためのかけがえのないヒントだった。

JASCと共にスタートした大学生活に、私は遂に終止符を打つ。残された2年半の大学生活、JASCを超えた学生生活を送ることができるだろうか。次はどこに向かうか。世界は広くて、そして狭くて、どこに向かえばよいのだろうか。今の私には何も分からない。しかしそうであると同時に、初めてこの後の自分の人生を期待させてくれた、そんな2年間だった。この2年間、JASCを通して出会った全ての人へ溢れんばかりの感謝と共に、次の実行委員へとバトンを繋ぐこととする。

実行委員　モンタニョミチェルルイス（京都大学）

今年の会議は去年とは全く異なる面白さがあった。私は、4月からの実際のプログラムよりも、昨年の会議終了後からの時間を含めた約1年間の時間の方を思い起こすのであり、実行委員同士の侃々諤々の議論が懐かしくなってくるのである。より良い運営を目指して徹底的に議論を尽くした1年間だったように思う。

67回会議のメンバーは議論好きな人間が多かったように思う。プロセスを重視する姿勢は人によっては面倒かもしれないが、その事が会議全体の質の底上げに繋がったのだと断言できる。

会議を運営してみて気がついた事を幾つか挙げてみたい。まずは批判空間の維持の難

しさである。議論を通して良いアイデアを磨き上げていく過程を「当たり前」とは思ってはいけない。そのような批判ができる空間を形成・維持する努力は怠ってはならず、空間の維持に失敗した時に行われた「議論」は悲惨なものであった。

次に、その維持の仕方についてである。議論の前に行われる合意形成によってのみ、批判空間が維持されるのが興味深かった。「健全な議論によって物事を決めていこう」という、参加者同士による政治上の合意が必要なのだ。自ら声を上げるなどして、政治力を発揮して批判空間の維持に努めなければ、議論すらまともにできないのは何とも不思議な話である。

最後に、私が強く主張してきた、健康を重視した運営について述べておきたい。個人的な動機により主張してきたものの、組織運営の点からしても、全員の健康状態が向上する事によるメリットは極めて大きいものであった。議論の質だけではなく、業務の効率性もまた飛躍的に向上できた。

批判空間の維持と健康的な運営の二つにより、会議の運営の仕方を改善できたと思うが、これらの考え方が引き継がれるのであれば、実行委員としてやり残した事はもはや無いように思う。改善を繰り返すことにより、日米学生会議がさらなる発展を遂げて欲しいと願うばかりである。

実行委員　矢島ショーン（東京大学）

私にとっての第67回日米学生会議の経験は、一年前の第66回とは大きく異なるものであった。その背景には、開催国の違いや実行委員・参加者という立場の違い、また1年間での自分自身の変化がある。

日本開催とアメリカ開催の違いは、予想以上に大きかった。去年は、初めてのアメリカ長期滞在の中、すべてが新しかった。アメリカの生活習慣や風景、社会問題、アメリカ側参加者の考え方といったものに対して、自分としてどう反応し考えるかというのが経験の軸であった。今年の日本開催はまるで違う。従来から慣れ親しんだ日本の価値観や問題に対して、アメリカ側参加者がどう考えるか、これを吸収するのが中心となる。従来では気がつかなかった視点に触れることができ、今後の糧となった。

また実行委員と参加者という立場の違いも顕著であった。参加者の場合、本会議は夏に突然やってくるし、本会議中もプログラムを消化し、友人を作り、分科会テーマでの議論を楽しむ。多くの側面があるものの、実行委員は参加者であると同時に、対象であると同時に、本会議を企画し、着実に運営する立場にある。分科会に対してもコーディネーターとして振る舞うことになる。こうした立場の違いから、同じものを前にしても

考えていることが違い、とても興味深かった。

最後に本会議に違いをもたらしたのが、この1年での自分自身の成長・変化である。英語力の向上に加え、昨年に比べて物事に対して論理的に考えることができ、自信を持って発言できた。また問題が生じても冷静に対応でき、こうした変化のおかげで会議でのイベントや議論が違ったものになった。

ここまで去年との違いを取り上げてきたが、結局JASCの本質は同じであると思う。それは各学生の背景や立場、現在のレベルに応じて、それぞれが何かを感じ取り、次に繋げていけるということである。これこそが日米学生会議に参加する価値であると、今年あらためて実感することができた。

＊参加者＊

浅倉由香（福島県立医科大学）

大学一年生の時、日米学生会議の存在を知った。「災害復興と社会の再構築」分科会に所属していた日米学生会議参加者の方が私の通う福島県立医科大学で行った、復興セミナーに参加したことがきっかけだ。そのとき、日米学生会議参加者の議論を進める能力やプレゼンテーションの巧さに衝撃を受けた。学生時代に必ず日米学生会議に参加しようと、そのとき決めた。

私の大学生活は、正直に言えば、苦悩の連続だった。大学入学当初は、自分にある可能性を広げていけると信じていた。しかし、人間関係や勉強に苦労する中で、自分はただ頑張ることに自惚れていただけなのではないか、自己主張が強くて集団行動が出来ない人間なのではないかと考えるようになった。自分の成長を目指して他人と関わることが怖くなった。成長していきたいという強い思いが、私の中で止まってしまった。

ただし、そのような状況の中でも、日米学生会議は私の目標であり続けたのだ。大学生活でこれといった成果も残せず、英語力もない私が果たして会議に参加できるのか、それは分からなかった。しかし、ふさぎ込んだ大学生活の中で、もっと広い世界をみてみたい、誰かと深く語り合いたいという気持ちはあふれ出しそうになっていた。そして幸運にも、日米学生会議は私を受け入れてくれた。4月から8月までの5ヶ月間、日米学生会議は私の支えであった。私が住む福島だけではなく、秋田・福井・神奈川・広島・島根・京都・東京など様々な場所へ行き、日本の素晴らしさを発見した。アメリカ側参加者との対話から、アメリカ人と日本人の文化の違いや考え方の違い学んだ。生まれつき聴覚過敏である私に、常に合理的配慮を心がけてくれた日米学生会議メンバーへの感

謝は尽きない。

一歩外に踏み出してみれば、そこには私を理解しようとしてくれる人がいた。もっと挫折して、そこからまた成長していけば良いと、会議が終わった今思う。

飯田夏木（東海大学）

第67回日米学生会議が終わり、私の心の中は何かポカンと穴が空いたような感じがしている。朝起きて周りに仲間がいないということがとても不思議である。たった3週間の本会議であったが、非常に内容は濃く、されど3週間である。日米学生会議は多くの学びを私に与えてくれた。決して学術的な事ばかりではなく、人と人とがコミュニケーションをとり「相違理解」をする難しさを教えてくれた。分科会活動や様々な場所への訪問は私に新しいものの見方を提供してくれた。

しかし何より私に大きな影響を与えたのは「人々」の存在である。日米学生会議が私に与えてくれた宝は仲間である。様々な経験を共有し、3週間共に過ごした仲間はかけがえのないものとなった。そして、私たちの活動をサポートして頂いたアラムナイの方々や、各サイトで日米学生会議の活動に加わって頂いた方々など人と人が繋がるありがたみを感じた。特に島根サイトのホームステイ先の家族には感謝をしたい。この第67回日米学生会議が無事に終わったのも多くの人々の支えがあったからだと改めて思った。

本会議が終わり、時間が少し経った今、私にとって日米学生会議とは何だったのだろうかと改めて考えている。本会議の3週間はあっという間であった。自分が人生で経験した最も短い3週間に感じた。本会議は終わってしまったものの、日米学生会議を通して築いた友情はずっと続いていくことであろう。そして日米学生会議は決して本会議だけではない。私にとっての日米学生会議は始まったばかりである。

今井けい（上智大学）

公式プログラムや、それ以外の場所で"気付き"を多く感じたと思う。ファイナルフォーラムでの発表や実行委員選挙へのサインアップという時間的なプレッシャーに晒された時、真っ先に表に出てくるものは自分自身が抱えている弱い側面であった。そして、ファイナルフォーラムや実行委員選挙という、自分の成してきた事全てが目に見える形で公の場に出た瞬間、周囲から評価され、また自分で振り返るという事で自分の強い側面を知る事ができた。それら自分の強い所/弱い所に"気付く事ができた"という事は極めて大きな事であったと思う。

今年の JASC のテーマは Coming together to confront our past, present, and future であった。ここに、過去、現在、そして未来の 3 つの時間がある。過去は、私にとって JASC が始まる前の全てであった。今まで積み上げてきたもの、そして今まで逃げてきたもの、それら全てが過去であった。そして現在。実行委員の 1 人に「JASC が人生の全てではない」という事を言われた事がある。しかし、2015 年の夏に JASCer と共に過ごした 3 週間は、紛れもなく私の全てであった。過去に培ってきたものの全てが否応無しに自分の表に出てきていたこの時間は、有りのままの自分を見つめるという意味で私にとっての現在であった。冒頭で、気付きについて言及をした。現在という時間の中で、多くのものに気付く事ができた。分科会コーディネーターの 1 人に、私はこう伝えた。"Take one step upward"前に進む事は、時間が過ぎ去れば誰でもできる。しかし、自分の強さ/弱さに気付き、今まで打ち破る事が出来なかったグラスシーリングを破る事は簡単に出来る事ではない。JASC 中に気付く事が出来たものを踏まえて一段高い所へ足をかける、そんなキッカケを、JASC は与えてくれた。

植田真衣（上智大学）

私にとって、JASC とは何であったのだろうか。本会議が終わって 1 週間、毎日考えている。今までの人生とは全く異なる非日常的空間が当たり前だったこの 4 か月が私に与えてくれたものはとてつもなく大きい。70 人のかけがえのない仲間に出会えたこと、英語を使って 3 週間生活したこと。普段なら考えないようなアカデミックな議論を行ったこと。日米学生会議で私が経験した全てのことは私を一歩前に進めてくれた。単純にこの 3 週間が楽しかったし、人生で最高の夏だったことに間違えない。

だからこそ、JASC が終わった今、日常に戻った今、JASC で本当に私が学んだものは何だったのだろう、この経験を無駄にしないように、胸を張って JASCer と言えるように生きていけるのだろうか、と不安に押しつぶされそうに感じることが多々ある。特に、同期の参加者たちはいきいきと輝いていて、既に次のステップへと歩みだしている。そして、アラムナイの方々は JASC での経験が人生を変える夏だったとして、世界の最前線で活躍されている。彼らに見劣りしないように、数十年後も彼らと切磋琢磨していける自分になるにはどうしたらよいのか。これからの人生、この課題が一生付きまとってくるはずだ。

この 3 週間、言ってしまえば春合宿からの 4 か月だけが日米学生会議ではない。この期間だけが “Life Changing Experience” ではない。ここからがもう一つの JASC のスタートなのではないか。春合宿からの 4 カ月間で私はたくさんのチャンスに恵まれた。

かけがえのない友を作ることが出来た。新しい価値観や文化を知ることが出来た。本当の自分を知ることが出来た。これから私はこれらの経験を足掛かりに新たな人生へと舵を切っていくだろう。JASC は人生の分岐点。将来自信を持って、この 3 週間が Life Changing Experience といえるように、努力し続けたい。

梅原彩花（国際基督教大学）

日米学生会議に参加することは、大学生活の目標の一つであった。

そこに参加できたことはとても光栄なことであり、私にとって素晴らしい経験となった。

本会議を通して得たものは数多くあるが、その中でも特に三点について記したい。

一つ目に相違理解をする姿勢である。日米学生会議は”mutual understanding”を大切にしている。この相違理解を達成するためには、お互いがお互いを知ろうとする姿勢を持ち、対話をすることが大切であるということを学んだ。特に宗教分科会の議論において、日本人の価値観とアメリカ人の価値観の根本的な違いがどこにあるのかに気づいたときに沸き上がった感動は今でも忘れられない。

二つ目におもてなしの心である。これは日本人特有の心であり、普段あまり意識していなかったのだが、今会議を通してその心を肌に感じた。それを特に実感したのは島根でのホームステイであった。普段都市部で暮らしている私にとって地方での生活は新鮮であった。地元の伝統文化を体験させてくれたり、食べ物をいただいたり、子どもたちと庭で遊んだり、たったの 2 日間ではあったがとても良い経験となった。ホームステイを通してホストファミリーの温かさ、そして私たち訪問者をもてなす心を感じることができた。

三つ目に今後もずっとつながっているであろう友人である。日本側参加者と初めて顔を合わせたのは 5 月の春合宿で、次に全員が揃ったのは 8 月の直前合宿であった。その間も片手で数えられる程しか会うことがなかったにもかかわらず、ここまでの仲になれたのは不思議でしかない。また、アメリカ側の参加者とも言語の壁があったものの、分科会の時間やフィールドトリップを通してお互いを知ることができ、相違理解が少しずつできるようになった。

この三週間を振り返ると、学んだことがたくさんあり、いくらでも挙げることができる。しかし、上述した三点は特に大きな収穫だった。ここでの経験や出会いを大切に人生を歩んでいきたい。

大蔵嶺冠（慶應義塾大学）

私が第67回日米学生会議を通じて最も強く学んだことは「行動しなければ成長しない」ということだ。これはつまり、自発的に行動し、自分を挑戦させる環境に自分自身を置くことでこそ人間は成長し、今までできなかったことができるようになる、つまり「能力」をあげることができる、ということだ。

私が日米学生会議の参加を決めたのは、自分にとって刺激的であり困難である環境に飛び込むことによって、今まで培ってきた能力を最大限に使ってその環境に挑戦してみたかったからである。

大学も2年目となり授業や定期試験に対する適応力をついてきた。普段の生活の中でも、自分自身の限界に挑戦する機会はなく、自分が何なりとこなせる範囲内での行動を繰り返す毎日であった。自分に足りていないと感じていた発言力を伸ばすために、ゼミ形式の授業や少人数ディスカッションの授業を積極的に履修したが、それでもなお、「より困難な状況において自分を挑戦させたい」という思いが心のどこかにあった。

そんな中、見つけたのが日米学生会議であった。自分とは全く異なったバックグラウンドを持つアメリカの学生と母国語でない英語で深い議論を行う。常に反論が飛び交う中で、自己の意見が説得されるように発言する。このような環境に自分を置くことでこそ、「自分の能力を最大限に活用してこの環境に挑戦してみたい」という思いが強くなり、会議に参加した。

結果的に、会議での困難は想像以上のものであり、自分の能力の限界に気づかされ、様々な経験を通じて成長することができた、と実感している。

このような経験ができたのも、経験を通じて自己を成長させることができたのも、自発的に行動し日米学生会議に参加するというアクションをとったからである。

こうして振り返ると、本会議を通じて「行動しなければ成長しない」ということを強く学んだのだと実感する。

大谷慧（東京大学）

島根県が開催地となり、世界に島根を発信していきたいと思っていた矢先に日米学生会議を知り参加させて貰うことが出来たのは縁という一文字に集約されるように思う。そして、この縁がもたらしてくれた出逢いはいかに自分の世界が主観性に満ちたものなのか、同じくらいの年数でどれほど生き方や個性が多様になるのかということを教えてくれた。また人とのふれあい、交流や対話、はたまた衝突がどれほど日々を豊かで充実したものにしてくれるのかということを再度実感させてくれた。自分自身は帰国子女と

いうこともあり英語で苦労した面は少なくなかったが、そのために尚更英語で苦労している日本側参加者の姿が気になった。四月に代表団に選ばれてから、仲を深め意見を交換してきた彼らがどれほど貴重な意見や熱い思いを持っているのか知っているから極めて勿体ない想いで一杯だった。日本を代表する学生が 36 名揃っていて優秀な 36 名のアメリカ側の学生と交流出来たからこそだが、国際化がもたらす革新やその中での日本の将来の在り方、即ち優れた意見を持つ日本人が台頭に英語で世界と渡り合うことの重要性を強く感じ、その様なプログラムに日米学生会議が今後もなればという想いで一杯になった。日本という小さな国でのみ、ましてや島根でのみ物事を考えることが困難だということを改めて知らされた。本当に個性的なメンバーで彼らとの相互理解は自分自身を理解すること、彼らとの相対化から導き出される自分の像にも近づくことが出来た。ここまで記して、改めてこのような経験をもたらしてくれた日米学生会議がどれほど稀有な存在なのかということを改めて感じている次第である。

荻原沙理（明治大学）

今回の会議のテーマであった“Confront”。3 週間にわたって過去、現在、未来と向き合い、参加者、実行委員関係なく様々な問題と向き合ってきた。だが、実はなにより自分と向き合う時間であったのではないか感じている。

例えば、4 サイトの訪問を通して、自分の中にある“日本人”に強く気付かされたことだ。アメリカ側参加者と日本各地を回ることで、あたりまえだと思っていた自分の行動や思考が、いかに日本的なものに規定されていたのか、比較を通して実感することとができた。一人で日本中を旅行するだけでは絶対に気付けなかった視点である。

また、いろんな意見と向き合うことで、自分の思考を整理できたことも大きかった。自分の感じたことを人に伝えようとしたり、レスポンスを受けることで、頭の中でただよう雲のような存在だったものが、言葉や文字という形で表に現れる。あいまいな点、主張の穴に気が付き、それを補強するためにどんなものが必要か、考えるきっかけとなった。人と関わっているように見えて、実は自分の考えと向き合っていたのである。

そしてもう一つ、大きなキーワードだったのは“Comfort Zone”だ。日本側参加者が、アメリカ側参加者がいる前でも日本語を使いがちになっている現状を、ある実行委員が「居心地のいい空間から飛び出す勇気を持ってほしい（＝英語で積極的にコミュニケーションしてほしい）」と指摘した。だが私は、JASC という環境そのものが私にとってすでに Comfort Zone になっていると感じている。こんなにも自分の考えをストレートに人に伝えることを正当化され、衝突を恐れないコミュニティーは他に存在しないから

だ。大学、社会に戻れば、それを好まない人々、良しとしない空気が私を待っているだろう。その中で、いかに自分らしさをなくさずにコミュニティーの中でうまく折り合いをつけていくことができるのか。JASC が終わった今、Comfort Zone から飛び出す第一歩を踏み出していきたい。

加藤優一（東京大学大学院）

日米学生会議は、絶え間なき対話の日々であった。対話の相手は三者いる。まずは日本側参加者である。彼らとの対話は、自分の思考を柔軟に保つための貴重な機会であった。所属大学・学部・出身地・年齢など全く異なる参加者が、本音の対話を通した相違理解を目指すという共通認識の下、本会議に向けて準備を進めていった。自分の意見が最大限尊重される安心感と、それを咀嚼し新たな視点を提示してくれる受け皿の多様さこそが、日本側参加者との対話の醍醐味であった。本会議前の事前学習では、日本の安全保障や原子力発電所、都市部と地方の格差などを取り上げ、日本や世界の行く末を忌憚なく語り合った。また、各々のこれまでの生い立ちや将来の夢を語らう中で、日本人同士での相互・相違理解が果たせたように思う。

次は米国側参加者である。彼らとの対話は、相手の発言の裏にある複雑な事情や譲れない信念を汲み取り、それを尊重した上でコミュニケーションを取ることの難しさを実感させられた。本会議中、個々人の価値観が色濃く反映されるテーマについてじっくりと話す場面が多くあった。憲法 9 条解釈変更と日本の平和主義の整合性、日中韓歴史認識問題、格差を生み出す社会構造、何気なく使用している言葉や概念が内包する差別意識など、枚挙に暇がない。感情的にならず理性的に話をすることは高度な知的訓練であった。この対話を可能にしたのが信頼関係の醸成にあったと思う。他愛のない会話を楽しむために準備した成果が発揮できた。

最後の対話の相手は、自分自身である。71 名の参加者の中で、私は如何なる貢献ができるのかを常に意識してきた。この自己との対話から得られた結論は至ってシンプルなものであった。一度失った信用は容易に取り戻せないこと、自分の気持ちに正直であること、そして苦しい時こそユーモアが必要なことである。豊かな人生を過ごすために必要なことの多くを共同生活を通じて再確認することができた。

河島慧美（筑波大学大学院）

We do not learn from experience…we learn from reflecting on experience. (John Dewey) 今年に入って出会ったこの言葉は、まさに JASC の文化ともいえるリフレクシ

ョンの意義を簡潔に説明している。JASC で経験したことを今の時点で振り返ってみると、それは「個と個のぶつかり合いを通した相異理解(mutual understanding)」という一言に尽きる。この相異理解というのは、なにもアメリカ人と日本人の間だけで行われていたものではない。この 1 ヶ月という凝縮した時間の中ではアメリカ人や日本人というラベルは簡単に剥がれ落ち、参加者同士の間で時には価値観の相違が原因となり衝突が起きていた。こういった衝突をどう受け止め、当事者が今後の自分の思考や行動にどう反映させるかという点が大事なのだろう。

また、個人的に本会議中に気づいたのは、自分の思考パターンを客観的に観察することが議論に役立つということだ。少々時間がかかって退屈だが、自分の判断基準（価値基準）を意識的に一つ一つ取り出して確認する作業をすると自分の立場がクリアになる。すると、周囲に無意識に同調しようとしている自分に歯止めをかけることができる。周囲の顔色を伺いながら発言する空気を読み過ぎる日本人になるのは避けたい。

日米学生会議で夜通し話し合った平和論、ジェンダー論、メディア論、国家とアイデンティティ、地方創生などに関する有意義な議論やお腹を抱えて笑った他愛もない会話はこれからも記憶に残るだろう。この経験を今後振り返るたびに自分に対してどう違ったものとして映るのか楽しみだ。最後に、私たちに貴重な場を提供してくださった関係者の方々、実行委員のみんなに感謝したいと思う。そして、鋭い切り口で議論を展開させ会議を盛り上げてくれた参加者のみんなに敬意を表したい。これからもこの縁を大切に。だって私たちは縁結びの神が宿る島根を一緒に訪れた仲だから。

川端明日香（徳島大学）

JASC が終わってからというもの、毎日のように本会議中に撮った写真を見返している。3 週間にわたる 71 人の参加者との集団生活。喜び・諦め・憤り・達成感。色々な感情が交錯し、その一つ一つをじっくり反芻する時間もなく過ぎ去っていった。本会議が終わり、会議中の出来事を思い出しながら、思い出に耽っている。会議が終了してから 2 週間も経っていないというのに、もうあの日々が懐かしい。

楽しい事ばかりの 3 週間ではなかったが、まるで夢のような日々だったな、と思う。今まで殆ど関心を持たなかったトピックについて、慣れない英語でディスカッションをするということは、自分にとって終始大きなストレスとなり、思わず感情が噴き出してしまうこともあった。ディスカッションの進路に自分の思考回路が追い付かず、意見やアイデアが全く浮かんでこない自分に募る焦りや苛立ち。でも、そんな状況に苦しむ私を励まし、引っ張っていってくれる仲間がいつも傍にいてくれた。もがき続ける中で沢

山の仲間に助けられ過ごした夏は、決して他人に誇れるようなものではないが、一つ一つの出来事がその時の私の感情と共に心に刻み込まれている。

又、多種多様なバックグラウンドや価値観を持つ参加者達と会話をすることは多くの刺激となると同時に、自分自身を深く、客観的に見つめ直す機会にもなった。自分とは何者か？集団の中の自分はどんな存在で、どんな役割を果たすべきなのか？今まで一人で悩み続け、漠然とした答えさえ出なかったこの問いに、仲間との会話は多くのヒントを与えてくれた。

人との出会いが自分を変え、様々な経験が自信を築くのだとしたら、春合宿に始まり本会議に終わったこの 4 か月間の JASC での経験は、自分の人生に大きな影響を与えてくれたと思う。”Life Changing Experience”　絶対的な答えなど存在しない問いに仲間と共に向き合い、衝突を重ねながらも歩んできた日々は、これから先、人生の壁にぶつかった時も私を鼓舞し続けてくれるだろう。

川部好輝（京都大学大学院）

JASC はただの学生会議ではなかった。全く異なる人生を歩んできた 71 人が一挙に集まり、同じ理念を共有し、3 週間を共に過ごした。言葉や考え方の違いという次元を超え、アタマが、体力が、そして 1 人 1 人のこれまでの経験すべてがぶつかり合ってこの 3 週間は作られていった。JASC を、そのときの感情を、言葉で何と表現したらよいのかわからない。JASCer ならば一度は同様の経験があるのではないか。71 人の人生がぶつかり合った本会議を上手く言語化することは容易ではない。私はこの 3 週間を通じて全く新しい何かを得たわけではない。しかし本会議を通じて大切なことを再確認できた。それは言葉にすれば至ってシンプルなものである。

分科会活動の章でも触れたが、1 つは準備である。各人の準備とその努力次第で会議はいくらでも豊かになる。JASC は本当に多くのチャンスに溢れていた。普段会えない人に会い、行けないところへ行く。本会議ではそのような非日常が普通のことになってしまう。いかに目の前にあるものをチャンスと捉え、それに向かって準備をし、掴みにいけるかが重要になったように思う。連日のタイトなスケジュールに加え、個々の自由時間は極めて少なかった。その一方で JASCer に与えられるものは多く、頻繁にパフォーマンスも求められる。従って、十分な準備なしには忙しい毎日を淡々とこなすだけになってしまう。参加者としてではなく、挑戦者としての姿勢が本会議中は常に求められていたように思う。

次に信頼である。会ったばかりの人が真摯に自分の意見に耳を傾け、衝突を恐れず本音

で立ち向かって来てくれる。そのような環境が以前どれほどあっただろうか。違いを歓迎する文化がここにはあった。その土壌を創り上げていたのは参加者同士の他愛もない会話であり、冗談であり、同じ時間を共有することで構築されてきた互いへの信頼であった。

最後に、第67回日米学生会議を支えて下さったすべての方々に御礼申し上げます。

北原祐理（東京大学大学院）

3週間は一言で表せば葛藤の連続だった。しかし葛藤があったからこそ、物事の見方が深まり、変化も生じた。

まず「専門か教養か」の葛藤である。specialist か generalist かの葛藤とも言え、自分が狭く専門的な知識・考え方に偏りがちであるのを痛感した。大学院生として参加するからには、的を絞った議論ができる強みを活かしたいと考えていた。ところが各地で与えられる議題は、マクロで分野横断的な視点を求め、社会の広範囲に貢献するアイディアを期待するものが多かった。その度に、集う学生の知識の幅広さに感銘を受け、米国学生の自国の発想を他国の問題解決のために転換する力にも刺激を受けた。葛藤の末残ったのは「専門か教養か」の二項対立に自らを当てはめるのではなく、広く深い知見から思考できる人間になりたいという動機である。

次に「言語力か性格か」の葛藤である。議論でも日常生活でも、果たして言語力が足りずに話に切り込めないのか、日本語でも外向的になることに抵抗を感じるのかは常なる葛藤だった。性格のせいで相手のことを知らずに、さらには自分が感じ考えたことを知られずに終わるほど、悔しいことはない。纏まっていなくとも、発信すれば必ず拾ってくれる仲間に囲まれ、まずは何事も言語化することを徐々に自分に課せた。これはこの先続く私の課題でもある。

そして「自己か他者か」の葛藤である。心身ともに疲れがたまり、時間の制約も厳しくなると、自己が中心になりやすい。自分の意見や苦労は自覚できても、他者の努力や辛さに気づきにくくなる。そのときこそ他者を見ることが真に大切なのだろう。「1人でも欠いて進めるのは絶対やめよう。相互理解のためのJASCだから。」と。この言葉は、他者に心を向けることで可能になる、ひとりの目線と懸命さの共有と受容を教えてくれた。

この体験を与えてくれたJASCで関わった全ての方に心より感謝したい。

窄口修兵（創価大学）

日米学生会議、このプログラムに入ることが大学 1 年生の時からの私の一つの夢となっていた。まさに本会議での三週間は夢のようなひと時であった。ある時は楽しく皆で笑いあい、ある時は夜通しお互いの人生について語り合った。その中に人種や信条の違いなどまったく関係ないことを実感した。この報告書で何度も述べている通り、私は JASCer である前に一人の創大生であり、創価学会員である。それがこの会議に参加するうえで誇りでもあり、またネックでもあった。しかし、真剣の対話と最高の仲間の前ではそのような次元など当に超えていくこと、相違理解は図ることができるのだということを感じることができた。私はこの本会議での人種や教義を超える相違理解のプロセスこそ日米学生会議の本質であり、それこそ私にとっての life changing experience であったと思う。

私のこの夢のような日米学生会議での生活は終わってしまった。しかし、これは終わりではない、新たな始まりである。“once a JASCer, always a JASCer” である。これからもこの 67 回日米学生会議での日々を片時も忘れず、一人の JASCer として自分には何ができるのかを常に考え、行動していきたいと思う。

そして最後に、私は 67 回日米学生会議が始まった当初に、「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」との原点の理念を死ぬまで掲げていくことを誓った。アラムナイとなった今こそ、さらなる力を付け、飛躍し、世界平和の一翼を担っていきたいと思う。

佐藤陽太朗（東京外国語大学）

「JASC での経験は” Life-changing experience ” だった」。これは去年の会議に参加した親友に言われた言葉で、これがきっかけで JASC に申し込むことを決めた。しかし、正直初めは” Life-changing experience” になるのかは半信半疑であった。

4 月に日米学生会議の日本側として自分が選ばれた時は大きな喜びとともに不安が生じたが、幼少期に海外で過ごした経験を持つ自分としては、ある程度英語にも自信があり、アメリカの学生も自分と同じ年代の学生であることも踏まえ、本会議中はそこまで苦労することはなく、上手くやっていけると考えていた。しかし、広島でアメリカ側参加者と対面し、ディスカッションを始めてみると、自分の無力さから根拠のない自信はすぐさまに消え去り、一気に不安を感じて自責の念にかられた。その後も分科会に貢献できていない自分を責め、負けたくないという気持ちから他の参加者と比較してしまい、自分の不甲斐なさを嫌という程知らされることになる。しかし、このような状況の中で

も常に周りの仲間からの支えがあったおかげで、徐々に自分を取りもどし、参加者との相互理解を深めることができた。

本会議が終わって 10 日経った今、JASC での数ヶ月を振り返ってみると本当に有意義な時間だったと感じる。一言で表す言葉は思い当たらないが、間違いなく今までの人生で味わったことのない感情や葛藤と戦った。しかし、今後も支え合える「最高の仲間」を手に入れることができ、仲間たちと過ごした 3 週間の経験は自分の中で一生生き続けると断言できる。JASC を通して今まで持っていた根拠のない自信は完全に崩され、今まで知らなかった「自分」と向き合うことができ、初めて親友が言っていた「”Life-changing Experience” だった」という言葉の意味がわかった。私は、JASC をスタートだと思っているので、JASC を支えてくださったすべての方々に感謝し、「自分」を大事にして、この経験を踏まえて次のステップへつなげていきたい。本当にありがとうございました。

澤晃太郎（岡山大学）

第 67 回日米学生会議に参加し、学んだことは「相互理解」の難しさだ。正直、日米学生会議（以下 JASC）に参加するまで、ここまで人のことを理解することが難しいと思ったことがなかった。今までの生活では、家族との関係を除きいわば表面上の付き合いがほとんどだったと思う。特に大学生活では、選択次第では一緒にいたいと思える人、自分を受け入れてくれる人と多くの時間を過ごすことができ、常に自分の comfort zone に居続けることができる環境と言えるのではないだろうか。だからこそ、大学生活における人間関係は、隠したいことは隠すことができ、適度に言いたいことを表現できる「安全な人間関係」だともいえる。しかし、JASC は 3 週間寝食を共にし、日本人側参加者には、言語的なプレッシャーもかかる厳しいスケジュールの中、強制的にプログラムを消化することを余儀なくされる。どれだけ議論を拒んでも分科会活動は毎日あり、3 週間ともに生活する以上、気が合わないからといって人間関係を完全に切り捨てるわけにはいかない。頭の中で「正解」をひねり出しては行動に移し、結果理解し合えないまま。結果、人に話しかけるのが怖くなった。そんな、混沌とした時間も短くなかったように思う。そんな中で、「相互理解」において、いくら崇高な解決策、熱意を有していたとしても、時としてそれらが無意味であるということに気が付くことができた。つまり、「相互理解」において、それらを発揮する舞台、環境、受け手側の心情を配慮できなければ、それらは逆効果でしかないということに気が付くことができた。そう思えただけでも、今回 JASC に参加できてよかったと思う。

これから、来年の夏に向けて、実行委員として、新たなコミュニティーでの「相互理解」を図るために、いかなる状況であっても真摯に努力を続けようと思う。そして、JASCに対する感謝の気持ちを、第68回日米学生会議を素晴らしい会議にすることで体現しようと思う。

庄司玲菜（立命館大学）

私は3回目の応募でようやく日米学生会議に合格することができた。2回目の応募までは正直、国際交流という「楽しそう」という気持ちだけで応募してきたのだが、今回の分科会には「格差と社会」というものがあり、自分の育ってきたバックグラウンドと強く結びつく内容だったために、絶対に参加して議論していきたいという内容だった。「希望の分科会以外に入れない場合、日米学生会議自体にも参加しない」と提出書類に記入するほど、この分科会に絶対に参加したいという思いがあった。なので、合格通知を受け取った時は、本当に嬉しかった。

本会議中は、分科会はもちろんだが、そのほかにもたくさんのイベントがあり、1日1日が目まぐるしい速さで終わっていった。1日のイベントを乗り切るだけで精一杯で、自分のRTでのタスク、JASCの外でのタスクなど、ほかにも終わらせなければいけないものがあるということはわかっているものの、なかなか体が追いつかず、気が付いたら寝てしまっていたということも多々あった。そのようなスケジュールのなかでも、深夜の自由時間などを利用して、ほかの参加者たちとたわいもないことで笑ったり、将来のことについて話したりした経験は忘れられない。様々な公式なイベントに参加し、それぞれが日常生活では必ず見ることのできない場所や人を知る機会であった。しかしそれでも、一番の貴重な経験は、選ばれた71人の参加者に会い、彼らと3週間生活を共に過ごしたということではないかと思う。この日米学生会議に、本当に諦めずに応募し続けてよかったと感じるし、この第67回会議こそが、自分の参加すべき会議であったのだと今になっては思う。これまで応募しても機会がなかった人たちにも、ぜひこの会議にもう一度チャレンジしてほしい。

白石拓也（早稲田大学）

“自分の力はどこまで通用するのだろうか”

親の仕事の関係で幼い頃から海外生活が長く、インターナショナルスクールに通っていた。欧米人の友達は多く、自分は常にグループのドンみたいな子供だった。アメリカ人に議論で負けるなんてことはありえなかったが、それはもう10年以上前の話。第67

回日米学生会議で、いざトップレベルのアメリカ人大学生と対論するとなると、本会議前から楽しみで仕方なく、なんだかこれから闘いに行くような気持ちを抱いていた。正直、自分の英語力、議論する力がどこまで通用するのか不安はあった。それでも試したかった、日本人は強いと証明したかった。自分が日本に帰国してから長年使用されていなかった英語の引き出しは本会議が進むにつれて昔の柔軟さを取り戻し、分科会議論でも初めは少し緊張があったが、徐々に堂々と自分の考えを伝えられるようになっていった。まだまだ世界のトップレベルは計り知れない、だが、本会議を終えて自分は大きな「自信」を得た。アメリカ人と1ヶ月間弱、寝食を共にしながらたくさんの議論をしていく中で、何度も彼らの考え方や習慣、人生に対する主体的な姿勢に圧倒されることはあったが、自分もアメリカ人相手に十分に闘える、そんな感覚を持った。日米学生会議に参加して得られたものは、時が経つにつれて消化され、徐々に気づいていくだろう。それだけ本会議は非日常的な時間だったし、本当に楽しかった、充実していたと今になって言える。

杉本夏来（慶應義塾大学）

私が第67回日米学生会議に参加したことで得た1番の学びは、「相互理解とはここまで難しいものである」ことを身を以て実感できたことである。個人的に人の話を聞いて理解しようとする力に関しては自信があり、適切な努力と時間をかければ100%理解し合うことができると信じていたが、JASCで集まったメンバーはその意識を見事に裏切る一筋縄で行かない人ばかりだった。私たちが共に過ごした時間は決して短いものではない。今年の5月に初めて出会い、春合宿、防衛大学校研修、勉強会、自主研修、直前合宿と様々なイベントを経て、本会議の3週間を迎えた。これに加え分科会のメンバーは日々のミーティング、フィールドトリップと倍以上の時間を共有している。これだけの時間をかけても、本会議に入っていざ議論や共同生活を始めてみると、お互いが何を考え、どうしてこの意見を述べるのか理解に苦しむ瞬間が度々あった。怒りに震えたり涙を流した記憶も数え切れない。その時には不思議でたまらず、なぜ分かり合えないのだろうともどかしく感じてばかりいたが、終わってみるとこのことはJASCが真の人間交流の場を提供していることの証明に他ならないと思うようになった。今年のテーマが表すように「相違理解」は相互理解において重要な要素である。私とあなたは違うのだ、どう違うのか、なぜ違うのかということを認識して初めて相互理解の第一歩が踏み出せるのであって、これまで考えていた「理解」は相手と自分の同じ部分を探し出して満足していただけなのだと感じた。JASCがここまで人間的な側面を深掘りするプログラム

であることは予想外であったが、個性あふれる日米の優秀な学生と3週間支え合いながらぶつかりあえたことは大きな糧となった。3週間はあまりに過密で数え切れないほどの感情と経験に溢れており、まだ整理には時間がかかりそうである。

鷲見まどか（京都大学）

あっという間に過ぎた3週間、日米学生会議は一体なんだったのだろう。春にオリンピックセンターで、36名の日本側参加者が集結したのが昨日のことのように鮮明によみがえる。あの時は日米学生会議が、自分にとってこんなにも大きな存在になるとは思っていなかった。あれから4ヶ月間、頭の片隅には常にJASCがあった。学校で授業を受けている時、部活中、友人と過ごしている時。本会議が終わってしばらくたった今でも、日米学生会議を一言で表すことは難しい。強いて言うならば、それはlife-changingな人々との出会いであったと感じる。アメリカ側を含めた総勢70名の参加者、研修やFT先、各サイトで出会った人々、そしてアラムナイ。「人」を変えられるのは「人」なのだと強く認識した。

3週間に及んだ本会議で特に印象に残っているのは、広島サイトでの平和記念式典だ。アメリカの学生と共に平和について考えることができたのは貴重な経験であった。日米学生会議が日米関係に直接的な影響を与えるのか、と聞かれれば答えはノーだ。しかし、学生間での相互理解は、両国そして世界の明るい未来をより確実なものにしている、と確信が持てた3週間であった。2015年の夏はわたしにとって忘れられない特別な夏となった。ここで得た経験は、今後の私の人生において何らかの形で輝き続けるに違いない。第67回日米学生会議に参加する機会を与えてくださった実行委員の皆さん、運営に携わってくださった関係者の方々にお礼申し上げます。

竹下友貴（大阪大学）

私が日米学生会議に申し込んだきっかけは2つあって、自分の専攻している国以外の国について勉強する必要があると思ったからである。もう一つは、私は将来外務省で勤務することを進路の一つと考えており、それにはアメリカについて知ることが不可欠だと考えたからである。

5月に学生会議への参加が決まってから分科会の準備に追われた。「現代の安全保障」分科会では経験よりも知識が重視されるため、本を読んだり、新聞をスクラップしたりした。なかでも分科会メンバーには日頃のミーティングでわからないところを丁寧に教えてもらったり、東京に行って会えたときなどは黒板を使って担当箇所を解説し合った

りした。しかし、日米学生会議の魅力は分科会だけではない。それは日本を知り、体験し、出会えることである。第67回は広島・島根・京都・東京サイトであるが、それぞれの地で本当に貴重な経験を積ませて頂いた。広島での原爆記念式典出席、県庁訪問、島根ではホームステイ、京都では裏千家やとらや、東京ではアメリカ公使公館や外務省を訪ねることができた。どれも、個人ではなかなか行くことのできない場所だ。また、日本人にとって日本開催の利点はアクティビティの一つ一つにじっくり取り組めることだと思う。毎日、出身地ではない日本の地域で仲間と寝食を共にし、楽しさや苦しさを味わった経験は貴重だ。今はまだ終わったばかりで、きっと年が経つごとにその気持ちは増していくだろう。

さて、日米学生会議を終えて参加者はこれからどう行動するのだろう。本会議中は卒業後の進路について話すことが多かった。だから、会議が終わった今、みんなは日常の生活に戻ってそれぞれ希望の進路に向かって努力をしているのだろう。いつかOB会に参加し、第67回参加者ひとりひとりと向き合うことができたらいいなと思う。

伊達佳内子（慶應義塾大学）

私にとっての第67回日米学生会議の3週間は、他者との交流の中で自分を見つめ直すかけがえのない日々となった。高校卒業前の3月に第一次選考に挑戦して参加者中最年少でこの会議に参加した事の事実は、ハンデとも利点とも捉えることができる。

最大のハンデといえば、とにかく専門知識が不足している点だ。ほかの分科会メンバーは米国側、日本側ともに国際政治専攻で深い知識と幅広い経験を持っておられた。知識面での貢献も創造的提案も皆目出来ずに劣等感と焦燥感に苛まれ、泣きそうになったことは一度や二度ではない。では、利点とは何だったのか。私は春合宿で“3つの全力”を誓った。一つ目に、全力で「頼る」こと。二つ目に、全力で「吸収」すること。三つ目に、全力で「貢献」することだ。本会議開始当初は、つい目の前の議論への目先の貢献にばかり気を取られ、頼ることをとまどい、吸収することを怠りそうになっていた。しかし、毎日の議論の中で分科会メンバーや実行委員のみなさんに支えて頂いているうちに、次のことに気付いた。

「“3つの全力”は“3つのステップ”でもあり、一側飛ばしに成功はない。」

「焦らずに一段ずつ上ってゆこう。」

多様な視点と考え方がぶつかり合う非常に高度な議論の場にいられる貴重なチャンスを無駄にしないためにも最年少らしく全力で頼らせていただこうと心に決めたその時から、自分の成長を少しずつ感じられるようになっていった。臆することなく「吸収」

に徹する事が出来たこと、これが最大の利点であった。

この素晴らしい出会いと学びのチャンスを頂けましたことに、心より御礼申し上げます。

塚本大志（徳島大学）

あの圧倒的な夏の終焉から多少の時間経過を見た今、幾らかは冷静にJASCについて書くことができようか。

さて、本報告書に収められた他の参加者の文章に目をやれば、蓋し多くの者がこのひと夏を振り返っては”Life-changing Experience”であったと叫び、充実感に満ち満ちた筆致でその素晴らしい経験について語っているに違いない。確かに、私に新たな知識と価値観、特別な経験、素晴らしい友人たちとの邂逅をもたらしてくれた点において、それはまさにかけがえのない時間であった。同時に、私にとってのJASCは必ずしもポジティブな言葉だけで総括できるものではなく、むしろ苦い記憶として回顧されるひと時でもある。

語学力。JASCを通じて顕著になった、今の自分に最も欠けている能力である。ただし、それは自らの英語力不足を反省したなどという次元の話ではない。言語は単に意見の伝達手段であるのみか、個人の思考や行動の幅、立ち居振る舞いを規定し、その人の存在意義すらも決定づける要素であることを、痛切に実感したのである。正直、日米の優秀な仲間たちとの議論において自らの知識や論理力に恃む局面を迎えても、その点における自分の能力に対しては必ずしも常に劣等を感じるばかりではなかった(それは手応えでもあった)。一方、実際の討論では、忽ち私の乏しい英語力で表現できる内容は限られ、ゆえに議論への貢献度は明らかに低下し、その現実に対する焦りを自覚すればするほど自信は失われ口数は減った。そして自らの考えを自分の言葉で伝えられなければ、自分がその場に存在する意義すらも見出せないことに気付いた時には、もはやJASCが目指す相互理解に勤しむ余裕は些かも残っていなかったのである。

語学力を鍛えて自在な表現力を身につけ、その言語が支配する空間における自らの価値と存在意義を明らかにする。これこそ、表層的ながら実に本質的だと思えた能力の不足によりJASCを心から楽しむこと能わなかった後悔に滲む決意だ。

野澤知亜（大阪大学）

4月、合格通知を手にしたとき、第67回日米学生会議がこんなにも貴重なものになるとは思いもよらなかった。私の3週間の経験は“勇気”と“忍耐”というこの2つの

言葉に表される。

まず1つ目については、本会議中私は勇気を必要とする場面に数多く遭遇した。例えば、アメリカ側の参加者に初対面で話しかけにいくときやディスカッションの発表をするときなどだ。私は、できるだけ様々なことに挑戦することを目標としていた。結果的に、ディスカッションのときにその他の参加者の積極性や優秀さに圧倒され、発言することを諦めてしまったこともあったが、一方では分科会活動で積極的に質問・発言をすることができた。3週間を通して気づいたのが勇気を出して行動した後、必ず誰かがそれに反応してくれたということだった。それが私の自信へとつながっていった。

2つ目は、本会議を通じて得られた忍耐力である。過密なプログラムや慣れない共同生活によって想像を超えた精神的・肉体的疲労が常に自分に襲い掛かった。特に言語面での負担は大きかった。通訳などがあったもののすべてのプログラムが英語で行われ、一日の最後には「もう英語をききたくない」というような心境になっていたことが多々あった。また他者と過ごす時間が増え、時には相手を傷つけまた自分も傷つくことで、自分以外の相手を理解すること、自分の思いを相手に正確に伝えることの難しさを知った。理解に苦しんだ後、相手のことが理解できたときは本当にうれしかった。この状況を乗り越えられた主な2つの理由は、他の参加者も私と同じような心境にあり、彼らの頑張る姿を見て自分も負けていられないと思えたからだった。加えて、困っているときに手を差し延べてくれた仲間の存在があったからである。3週間で学んだことは数えきれないが、これはあくまでも通過点であり、今後の人生の糧として精進していきたい。

萩原夏花（東海大学）

日米学生会議の選考に合格してから4ヶ月。この4ヶ月間は今まで私が送ってきたどの時期の学生生活よりも密度の濃く、多くの事を学び吸収する事のできた時間であった。日米学生会議は私にとって憧れの舞台であり、またそれと同時に人生最大の学びの場であった。

中学受験をした私は大学の付属校に在籍していたため、同じ境遇の友人が多いコミュニティーに属していた。大学に進学し中学高校時代に類似した環境に自身の身を置いているということに気づき、様々なバックグラウンドを持つ人とも関わってみたいといと感じ日米学生会議に応募することを決めた。

私は自身の体験から教育に興味を持ち教育分科会のメンバーとして会議に臨んだ。アメリカ側参加者から学ぶ点が非常に多く、大変勉強になった。また日本の教育について様々な視点から考えることができたことも、大変意義のあるものとなった。会議の中、

時には自身の能力不足から苦しく辛い場面にも遭遇した。しかし周りの参加者に支えられ困難な場面も乗り越えることができた。会議を通して最高の 70 人のメンバーに出会うことができた。彼らとはこの会議だけの繋がりではなく、今後とも交流していきたいと感じている。会議を通し私は参加することができ本当に良かったと感じている。

この会議での経験から、私は第 68 回日米学生会議の実行委員に立候補した。来年の参加者が最大限、第 68 回日米学生会議を通して学ぶことのできるよう、また参加して良かったと思ってもらうことの出来るよう運営面からのサポートをしていきたいと考えている。今後も様々な分野について学びを深め広げていきたいと思う。日米学生会議という舞台を経験することができたことだけに満足せず今後も学び続けていきたい。

矢部真裕子（慶應義塾大学）

私は JASC で様々なレベルでの「他者理解」を体験し、これを機に自分の考える「他者理解」の定義も変わった。本会議では広島、島根、京都、東京を巡り、様々な社会問題や文化にふれることができた。ディスカッションを通しての「他者理解」や、日常生活を共にして体験した「他者理解」などレベルは様々であるが、同じものを見聞きした上で相手を理解しようとした三週間は他にない。

私は当初「他者理解」を「価値観の異なる相手に耳を傾け、自分との考えとの間に応え（＝妥協点）を見出すこと」だと考えていた。相手との間に何か共通のものを見いだせたとき、それが真の「他者理解」であると信じ、本会議に臨んだ。だが、実際に異なる価値観のぶつかり合いを目の当たりにし、「価値観の異なる相手の考えの根底を「理解」する行程そのもの」が「他者理解」であるという基本的なことに改めて気づかされ、またその難しさをも体験した。

現在世界中で起きている社会問題をとっても、文化や価値観はそれぞれの環境で育まれたものであり、そこに妥協点を見出すことは難しい。だが、それぞれの価値観や文化を発信し理解することに意義がある。分科会では特に議論において相手を理解するのに苦しんだ部分もあったが、相手の考えの根底に流れる価値観や背景に触れることができただけでなく、自己の考え方に改めてフォーカスし、根底にあるものを洗い出すことができた。正直他者理解の限界を感じた部分もあったが、そういった「他者理解」の姿勢はどのような環境下でも通ずるところがあると感じた。それは個人レベル、国レベル、など様々であるが、JASC 本会議が終了後も参加者のそれぞれの環境で「他者理解」は求められている。それを各々の環境で心得、実践することにこそ今後の本会議のより深い意味見出される。

湯川利和（東京大学）

日米学生会議に参加した動機は、直感的にやりたいと思ったからだが、それを言語化すれば、違うバックグラウンドを持つアメリカの学生と英語で専門的・学術的な議論をする中で、視野を広げ、自分に今足りないものを知りたかったからである。この会議を通じてそれを達成できたとともに、自分が予想していた以上のものを得ることができた。

一つ目はこの会議の掲げる相互理解の難しさを実感したこと。これは主に言語による壁や3週間という時間的制約が大きかったと思う。英語やジェスチャーを使って意思疎通を図れた反面、聞き取れない英語も多く、より深い相互理解のためには言語能力をもっと磨かないといけないと感じた。

二つ目は日本の様々な面を見ることができたこと。首都圏にずっと住んできた自分は、日本の様々な地方の持つ魅力や課題に触れる機会が少ないのが現状だった。今回事前研修で福井、本会議で広島・島根・京都を実際に訪問して現地の方々と交流して、その地域に愛着が湧くと同時に日本の持つ多様性に改めて気づかされた。また、アメリカの学生とともに、自分も日本の文化や伝統について多くを学んだ。グローバル化が叫ばれる今日、海外について学ぶだけでなく、自分の国を学ぶことも重要なのではないか。

三つめはインプットとアウトプット双方の重要性。知識はただ知っている状態では価値がなく、それを活用して初めて価値があると考える自分は、自分の学びを発揮できる場を探していた。学生会議に参加して分科会に貢献するという目標ができてから、自分の専門を主体的に楽しく学ぶようになったのを実感した。学生会議が終わった今、次に自分が学ぶべき知識とそれを発揮する場を新たに考えようと思う。

最後に、この会議を実現するにあたって支えてくださった多くの方に心からの感謝を伝えたいと思う。

■□第７章

第68回日米学生会議 概要

第 68 回日米学生会議　概要

■テーマ・説明文

- Addressing Our Changing Future: From Self and Community to the World-

個人として、一員として、変わりゆく未来に立ち向かえ

～終わりなき対話と自己理解・相互理解～

学生同士の対話、これは次代を担う者たちの「共育」であり、日米学生会議が果たしてきた「教育」である。創設されてから既に 80 年余りが経ち、数々の実績と伝統がある日米学生会議は今、未来に目を向けている。72 人もの学生が目まぐるしく変化する未来を傍観するのではなく、自立した個人として自ら切り拓いていこうと弛みなく努力する。その勇姿がここにはある。

「個人として、一員として、変わりゆく未来に立ち向かえ」

日米学生会議創設から 80 余年が経った現代でも、テロリズムや深刻な環境問題など多くの世界的な課題が存在し、解決策が見つかっていない。そうした中、社会に新たな息吹をもたらす学生の活力は不可欠である。学生も解決のための方策を真剣に考え、それを実行する情熱と行動力が重要なのである。変わりゆく未来に、道が険しくとも、一個人として立ち向かって行かなければならないのだ。

「終わりなき対話と自己理解・相互理解」

しかし同時に、未来に立ち向かう中で課題を解決するためには、志を同じくする他者と腹蔵のない対話を重ねることが必要不可欠である。膝と膝を突き合わせて議論を続けることで双方の想いや人となりが見えてくる。こうした対話の中で時には考えの違いから、衝突し、決裂しそうな場面もある。だが、決裂の危機を乗り越えてこそ、それまでの誤解が解けた上で互いの考えや想いは理解され、さらには相手との違いにより自分の独自性にも気付けるのである。

自分と相手が持つ熱い想いを確認し合い、お互いが出来ることを探し出すことにより、問題解決への道筋が見えてくる。自己理解と相互理解の実現のためには、自分自身及び他者との終わりなき対話が必要である。参加者は 3 週間に亘る対話を通じて、この過程の重要性と効果に気付く。日米学生会議では、価値観や文化的背景の異なる 72 人が、このように対話を通じて国境を越えた自己理解・相互理解を実現させる。これこそが、今後も引き継いでいくべき本会議の伝統であり、価値である。

■事業概要

【主催】

一般財団法人国際教育振興会

【企画・運営】

第 68 回日米学生会議実行委員会

【会議開催期間】

2016 年 8 月 3 日～2016 年 8 月 25 日（帰国日含む）

【事業実施期間】

2016 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日

【開催地】

ボストン、ワシントン D.C.
ミズーラ、サンフランシスコ

■本会議における主な活動

◇分科会（RoundTable, RT）

本会議において活動の中心となる分科会は 7 つ設けられており、日米各 5 名の学生（実行委員各 1 名を含む）が、本会議期間中に議論を重ねることとなる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪問するなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。第 68 回日米学生会議における分科会は以下の通りである。

(1) Cultural Shifts in the Modernizing World
文化の普遍的価値と社会の変化

(2) Democracy and Ideal Government
現代民主主義の課題

(3) Developing the Future through Science
科学と未来

(4) Future of Education and Cyberspace Usage
教育とサイバースペース

(5) Globalization and Economic Development
グローバル化と経済発展

(6) Identity: Self and Nation
個人とナショナルアイデンティティ

(7) Law, Society and the Changing Future
法と社会

◇フィールドトリップ

分科会の議題や各開催地についての理解を深めるため、政府機関、国連機関、企業、大学、NGO、NPOおよび研究所などへ訪問研修を実施する。事前活動における訪問研修と同様に、問題の対象となっている現場や現状を実際に体感できる貴重な機会であり、議論に必要な具体的視点を得るために重要な活動である。

◇スペシャルトピック

同年代の学生である参加者が、個々の関心に沿った議題を自由に設定し、多角的な議論を行うことを目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見能力や議題設定能力を養うばかりでなく、参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想を得ることで、会議をより充実させることも求められる。

◇リフレクション

参加者が一同に集い、3週間の共同生活で、分科会における議論の対立や人間関係の葛藤から生まれる悩みなどを自由に話し合う。参加者自身が心を開き、自ら思うことを率直に語り合うことにより、参加者間に相互理解が生まれ、信頼構築の一助となることを期待している。また、他者の思いを理解することにより、参加者に会議の充実や円滑な運営のために努力していく姿勢が生まれることを目的としている。

◇フォーラム

第68回日米学生会議の各開催地で、サイトテーマに関する問題や日米両国に深く関わるトピックについて、一般公開のフォーラムを開催し、第一線で活躍する専門家、有識者の講演や学生を交えたパネルディスカッションなどを行う。これにより、参加者が各開催地で学んだ知見を深め、新たな問題意識や興味を持つ機会になることを期待する。

◇ファイナルフォーラム

最終開催地で行われるファイナルフォーラムでは、3週間の総まとめを行う。主として分科会における議論の内容や活動を発表することにより、現代社会が抱える問題とそれに対する学生なりの見解や視点を第68回日米学生会議において得られた会議の成果として社会に発信する。

■□第８章

ご協力頂いた方々

第８章　ご協力頂いた方々

【主催者】

一般財団法人国際教育振興会

理事長　大井孝

代表理事　伊部正信

参与　稲田脩

事務局　後藤明子

国際教育振興会賛助会

名誉会長　高円宮妃殿下

会長　南原晃

事務局長　伊部正信

事務局　川島裕子

International Student Conference, Inc

理事長　Kristy Holch

事務局長　Peter Beck

事務局　Minjun Chen

【後援団体】

外務省

国際交流審議官 新美潤

大臣官房人物交流室 課長補佐

三浦恵子

文部科学省

国際統括官 山脇良雄

大臣官房国際課長 今里譲

大臣官房国際課総務係長 高田安隆

米国大使館

首席公使　Jason P. Hyland

広報・文化交流部　落合安代

ユース・アウトリーチ・コーディネーター 三橋乃佑里

一般財団法人日米協会

会長 藤崎一郎

専務理事 渡辺隆

日米文化センター

日本代表 伊部正信

【広報活動】

青山学院大学 国際政治経済学部

准教授 武田興欣

米国大使館

広報・文化交流部 ユース・アウトリーチ・コーディネーター 三橋乃佑里

京都大学

国際交流推進機構長

国際企画連携部門長 教授 森純一

研究国際部 国際学生交流課

交流支援掛 上村健

立命館大学
国際部 事務部長 大島英穂
BKC 国際教育センター 国際部
BKC 国際課 課長補佐 丸山加奈子

同志社大学
大学院グローバル・スタディーズ研究科・アメリカ研究所
事務局長 采野正明
事務室 勇元信彦

大阪大学
グローバルコラボレーションセンター
特任准教授 敦賀和外

大阪府立大学
国際交流推進機構 教授
国際交流センター長 寺迫正廣
国際交流課 主査(国際交流総括)栗林知美

東北大学
副理事長(国際交流担当)総長特別補佐
グローバルラーニングセンター長
山口昌弘
高度教養教育学生支援機構 グローバルラーニングセンター 水松巳奈

【選考活動】
立命館大学 客員教授 今井義典
国際ウェールズ環境総研 代表 竹本秀人
東京学芸大学 名誉教授 金谷憲
公認会計士 丹羽秀夫

日本女子大学 文学部 日本文学科
教授 田辺和子
国際医療福祉大学大学院
医療経営管理分野教授 医学博士 髙橋奏
日米学生会議同窓会
森田正英

京都大学
国際交流推進機構長
国際企画連携機構長 教授 森純一
国際交流推進機構 教授 長山浩章
研究国際部 国際学生交流課
交流支援掛 上村健

広島大学
教授 達川奎三

【防衛大学校研修】
防衛大学校
学校長 國分良成
准教授 加藤健
総務部総務課 佐伯竜介
一等陸佐 大久保英樹
二等海佐 大井昌靖
二等陸佐 中野昌英
112 小隊 畠山尚己

【原発研修】
敦賀市
企画政策部原子力安全対策課
主事 北川尚希
係長 加藤二義

国立研究開発法人 日本原子力研究開発機構
敦賀事業本部 国際産学連携センター
国際協力室 室長 入江勤
関西電力株式会社
広報室エネルギー広報グループ
リーダー 濱野敦史

福井新聞社
編集局 政治部長 兼 論説委員 加藤祐一
政治部 副部長 新屋安弘

敦賀市議会議員 今大地はるみ

大飯・高浜運転差止仮処分の会
事務局長 松田正

【サイト活動】
(1)直前合宿・広島サイト
≪後援≫
広島日米協会
広島県
広島市
広島大学
広島経済大学
中国新聞社
日本放送協会(NHK)広島放送局

≪協賛≫
第 67 回日米学生会議 in 広島
サポート委員会
会長(広島日米協会会長) 山本一隆
副会長(中国経済連合会会長) 山下隆
副会長(広島商工会議所会頭) 深山英樹
副会長(広島経済同友会代表幹事) 森信秀樹
副会長(広島県経営者協会会長) 西川正洋
顧問(広島県知事) 湯崎英彦
顧問(広島市長) 松井一實
委員(広島大学学長) 越智光夫
委員(広島経済大学学長) 前川功一
委員(広島修道大学学長) 市川太一
委員(広島女学院学長) 湊晶子
委員(広島市立大学学長) 青木信之
監事(広島日米協会経営企画監事) 北村浩司
事務局長(広島大学教授) 達川奎三
事務局担当委員(広島経済大学教授)
川村健一
事務局担当委員(広島日米協会事務局長)
山中裕文

≪賛助≫
広島日米協会、広島エフエム放送株式会社、広島電鉄株式会社、株式会社中国新聞広告社、広島日米協会会員(有志)、株式会社広島東洋カープ、株式会社中国新聞サービスセンター、広島修道大学、久野島産業株式会社、平口ひろし後援会、医療法人ワカサ会ワカサ・リハビリ病院、広島市立大学、学校法人鶴学園、株式会社大野石油店、広島経済大学、広島経済同友会・森信秀樹代表幹事、広島修道大学・大津章参事、マツダ株式会社、株式会社中電工、広島女学院大学、県立広島大学、ブレーン株式会社、広島ガス株式会社、株式会社中国放送、広島大学、北辰映電株式会社、株式会社リーガロイヤ

ルホテル広島、広島銀行、山本一隆、達川奎三、山中裕文、川村健一、池田和恵、角田實行、上田みどり、五十嵐二郎、ヒナダセイシ、ミサコ、シャクダエリコ、馬本勉

≪協力≫
広島大学 教授 達川奎三
広島経済大学 教授 川村健一
広島女学院高等学校
　教頭 渡辺信一
　教諭 高見知伸
　教諭 ジェリー＝オサラバン
広島市立本川小学校
株式会社広島東洋カープ
広島東洋カープ OB 長谷部稔
特定非営利活動法人 ワールドフレンドシップセンター
アクアネット広島 倉田郁士
株式会社オタフクソース
　代表取締役社長 佐々木栄司
マツダ株式会社
　商品戦略本部 技術企画部
　部長 本橋真之
中国新聞社
広島県庁
　県知事 湯崎英彦
　　串岡勝明
　　松田敦子
　　中野隆裕
広島市
　広島市長 松井一實
国連訓練調査研究所
　所長 隈元美穂子
広島市立大学平和研究所
　副所長 水本和実
広島市平和記念資料館
被爆者語り部 山本和男
通訳 河野洋子

ボランティア学生
西野凜也
松川純
児玉佳奈美
木村典政
中西万由花
木村友美
岡村桜
平井千尋

(2)島根サイト
≪後援≫
一般社団法人島根県経営者協会
島根県
松江市
島根大学

≪協賛≫
第67回日米学生会議in島根サポート委員会
会長(島根県商工会議所連合会会頭 島根県経営者協会特別顧問) 古瀬誠
顧問(島根県知事) 溝口善兵衛
顧問(前島根大学長) 小林祥泰
副会長(松江市長) 松浦正敬
副会長(島根大学長) 服部泰直

委員(海士町長) 山内道雄
委員(出雲市長) 長岡秀人
委員(しまね国際センター理事長)
有馬毅一郎
委員(島根県立大学長) 本田雄一
委員(山陰合同銀行取締役会長) 久保田一朗
委員(島根銀行取締役会長) 田頭基典
委員(島根県中小企業団体中央会会長)
杉谷雅祥
委員(島根経済同友会代表幹事) 宮脇和秀
監事(中村法律事務所) 中村寿夫
事務局担当委員(松江商工会議所専務理事)
木村和夫
事務局担当委員(島根県経営者協会専務理事) 森脇建二
事務局担当委員(島根県環境生活部文化国際課長) 坂本偉健
事務局担当委員(松江市産業観光部観光事業部長) 錦織裕司
事務局担当委員(島根大学国際交流センター長) 出口顕

≪賛助≫

株式会社山陰合同銀行、中村ブレイス株式会社、松江土建株式会社、カナツ技建工業株式会社、山陰クボタ水道用材株式会社、株式会社島根銀行、島根県合板協同組合、島根電工株式会社、中国電力株式会社島根支社、西日本旅客鉄道株式会社米子支社、株式会社ミック、一畑電気鉄道株式会社、株式会社今井書店、株式会社エブリプラン、株式会社佐藤組、山陰総合リース株式会社、株式会社山陰中央新報社、島根県農業協同組合、島根県農業協同組合中央会、島根トヨタ自動車株式会社、島根日産自動車株式会社、中村法律事務所、ホシザキ電機株式会社、松江商工会議所、有限会社まつえファーマシー、今井産業株式会社、雲南建設株式会社、山陰中央テレビジョン放送株式会社、株式会社山陰放送、島根経済同友会、一般社団法人島根県経営者協会、島根県中小企業団体中央会、株式会社日産サティオ島根、日本生命保険相互会社松江支社、しまね信用金庫、島根大学教育学部同窓会、日産部品山陰販売株式会社、有限会社福島造船鉄工所、株式会社松永牧場、和幸株式会社、アースサポート株式会社、浅利観光株式会社、熱田・廣澤法律事務所、株式会社イズコン、株式会社一畑百貨店、株式会社イトハラ水産、今岡工業株式会社、株式会社岩多屋、医療法人社団内海皮フ科医院、大田生コンクリート株式会社、大野法律事務所、医療法人佼真会岡本整形外科医院、ごうぎんスタッフサービス株式会社、合銀ビジネスサービス株式会社、国際ソロプチミスト松江、コマツ山陰株式会社、有限会社さくら薬局、株式会社山陰オフィスサービス、山陰水道工業株式会社、株式会社産機、株式会社さんびる、サンペ電気株式会社、株式会社シーズ総合政策研究所、JR西日本山陰開発株式会社、株式会社JTB中国四国松江支店、信太内科医院、島根イーグル株式会社、島根県医師会、島根県信用農業協同組合連合会、島根県民共済生活協同

組合、島根大学生物資源科学部後援会、島根大学生物資源科学部同窓会、島根大学法文学部同窓会会長、島根大学法文学部・総合理工学部後援会会長、島根中央マルヰ株式会社、島根トヨペット株式会社、シマネ益田電子株式会社、島根マツダ有限会社、株式会社ジュンテンドー、杉原司法書士事務所、セコム山陰株式会社、損害保険ジャパン日本興亜株式会社、株式会社太陽電機製作所、株式会社大隆設計、株式会社田部、株式会社長楽園、有限会社土江本店、妻波法律事務所、東京海上日動火災保険株式会社山陰支店、中浦食品株式会社、山陰債権回収株式会社、株式会社中筋組、株式会社中村水産、西日本電信電話株式会社島根支店、日本海信用金庫、日本銀行松江支店、株式会社日本政策投資銀行松江事務所、株式会社博愛社、浜田港運株式会社、浜田マルヰ株式会社、原守中法律事務所、有限会社風流堂、福間商事株式会社、株式会社藤忠、株式会社ホテル一畑、堀江耳鼻咽喉科医院、益田タクシー株式会社、松江一畑交通株式会社、松江京店商店街協同組合、松江工業高等専門学校、松江ロータリークラブ、丸永建設株式会社、株式会社メイワ、森下建設株式会社、山代電気工業株式会社、株式会社やまもと、株式会社ユニコン、株式会社渡部製鋼所、服部泰直、石田徹
小林祥泰、増原久子、森脇建二

≪協力≫

中村ブレイス株式会社
　代表取締役社長 中村俊郎

一般財団法人 Ruby アソシエーション
　まつもとゆきひろ

株式会社ネットワーク応用通信研究所
　瀬崎愛美

出雲大志社
　権宮司 千家和比古
　権禰宜 石村智也

島根大学
　教授 工学博士 国際交流センター長
　安藤安則
　学術国際部国際交流課 藤原高博

島根県立青少年の家
　古澤俊司

島根県経営者協会
　主任 福間淳司

邑南町
　町長 石橋良治
　定住促進課 課長補佐 田村哲
　商工観光課 課長補佐 口羽正彦
　定住促進課 主任主事 吉田祐基

松江コンベンションビューロー 一般材残法人 くにびきメッセ

誘致支援課 課長 木下剛夫

JR 西日本山陰開発株式会社 内山興
山陰合同銀行 天野郁夫

公立邑智病院
院長 荘田恭仁

島根県
地域振興部しまね暮らし推進課
島根県 教育庁教育指導課
教育魅力化特命官 岩本悠

環境生活部文化国際課国際交流グループ
津森仁
石倉真由美
野津悦子
Sondey Olaseum

教育庁文化財課 世界遺産室
田原淳史

環境生活部長
新田英夫
里山イタリアン AJIKURA

ふるさと案内人 出雲神話ガイド
島根県登録会員 鎌田勝

島根県観光連盟
教育旅行勧誘コーディネーター 早川正樹

(ホームステイにご協力頂いた方々)
戸山裕一、山根浩之、太田啓二、岩浅郁子、堀良子、松本直子、景山益延、福間千恵子、河原由実、高木誠司、高尾麻甫、金山裕、入江恵理子、並河裕子、原田拓人、坂根範之、伊藤慶幸、中谷祐子、平野未貴、長島哲郎、竹山真理子、大谷みどり、高木広明、小山繁樹、内田アキ胡、伊藤一男、山崎誠、北尾洋子、川瀬浩二、門脇進、藤井徹、村上光言、錦織武央

(3)京都サイト
≪協力≫
京都市総合企画局
市長公室長 山本亘
総合政策室 大学政策部長 古瀬ゆかり
大学政策課長 矢内克志

京都大学
国際交流推進機構 教授 長山浩章
研究国際部 国際学生交流課
交流支援掛 上村健

同志社大学
大学院グローバル・スタディーズ研究科・アメリカ研究所
事務局長 采野正明
事務室 勇元信彦

京都文教大学
総合社会学部総合社会学科 教授
図書館長 島本晴一郎

公益財団法人 稲盛財団
理事・顧問 忽那武範
事務局次長 博士 田中治雄

裏千家
一般社団法人 茶道裏千家淡交会総本部
国際部 課長 宮崎雅臣
運営企画部 主査 有田外喜彦

株式会社 虎屋
京都管理部 取締役 黒川光晴
文化事業課 長谷川愛美

本願寺国際センター
外国語専門職 主管 桐林三巳

京都市歴史資料館 研究室
歴史調査担当係長 宇野日出生

株式会社 龍村美術織物
取締役 総務部長 粟津久雄
総務部 次長 岩本武

(4) 東京サイト
≪協力≫
自由民主党
副幹事長 衆議院議員 三原朝彦
衆議院議員 三原朝彦 政策担当秘書
中村正義

日本空港ビルデング株式会社
専務取締役 執行役員 那波史郎
執行役員 経営企画本部 経営企画部長
小山陽子
経営企画本部 事業企画部 事業企画課
課長代理 髙橋祐一
経営企画本部 事業企画部 事業企画課長
志水潤一
経営企画本部 事業企画部 事業企画課
中島悠太

日本航空株式会社
事業創造戦略部 マネージャー 森田健士
事業創造戦略部
アシスタントマネージャー 志賀健司
経営企画本部 経営戦略部 業務グループ
マネージャー 上野和孝

全日本空輸株式会社
総務・CSR 部長 原雄三
総務・CSR 部 総務チーム
リーダー 野口貴史
企画室 企画部 経営企画チーム
航空政策担当 課長補佐 乾元英

日本電気株式会社
海外ビジネスユニット
グローバルセーフティ部 主任 守村範子
広報部長 飾森亜樹子

国土交通省
総合政策局 政策課 (併)参事官(社会資本整備)付 課長補佐 近藤陽介
総合政策局 参事官(社会資本整備)付 企

画専門官 辻陽子

文部科学省
国際統括官 日本ユネスコ国内委員会事務総長 山脇良雄

公益財団法人 米日カウンシル･ジャパン
事務局長 マークラスマン

外務省
大臣官房人物交流室 課長補佐 三浦恵子

青山学院大学
学長 仙波憲一

米国大使館
首席公使 ジョンソンハイランド
広報・文化交流担当公使
マルゴキャリントン
広報・文化交流部 三橋乃佑里

近藤文化・外交研究所 代表 近藤誠一

【分科会活動】
≪現代の安全保障≫
東京大学教授 川島真

外務省 総合外交政策局
海上安全保障政策室 川口耕一朗

Human Rights Watch Tokyo 吉岡利代
近藤文化・外交研究所 代表 近藤誠一

≪企業の社会的責任とリーダーシップ≫
株式会社資生堂
CSR 部 CSR 企画グループグループリーダー 尾上真由美

トヨタ自動車株式会社
社会貢献推進部総括室総括１グループ長
担当課長 橋本勝也
社会貢献推進部総括室総括１グループ長
係長 三輪麻衣

株式会社電通
法務マネジメント局 CSR 推進部 係長
木下浩二
CSR 推進部 アソシエイト･スーパーアドバイザー 伊貝幸大

株式会社国際社会経済研究所
代表取締役社長 鈴木均

≪宗教の意義とその役割≫
東京トルコ・ディヤーナト・ジャーミイ
トルコ文化センター 下山茂

福島わらじまつり実行委員会
企画検討部長 小口直孝

衆議院議員 中野洋昌

学校法人皇學館 常務理事
皇學館館友会専任常務理事 山口建史

皇學館大学 研究開発推進センター
佐川記念神道博物館 教授
学芸員 岡田芳幸

日本ナレッジ・マネジメント学会
理事長 花堂靖仁

≪格差と社会≫
横浜市立綱島東小学校 校長 荻原規彦

明治大学副学長 政治経済学部教授 勝悦子

横浜市役所 健康福祉局生活支援課
山田公久

横浜市鶴見区福祉保健センター
生活支援課生活支援係長 伊藤泰毅

認定 NPO 法人日本難民協会 野津美由紀

≪21 世紀におけるメディア≫
日本放送協会(NHK) 元副会長 今井義典

日本経済新聞社 編集委員 関口和一

≪今日の教育とこれからの取り組み≫
玉川聖学院 中等部・高等部
中等部長 水口洋

文部科学省 高等教育局 高等教育企画課
法規係長 畑島 晃貴

株式会社経営共創基盤(IGPI)
パートナー 代表取締役 CEO 冨山和彦
広報・マーケティング担当マネージャー
英綾子

東京都立一橋高等学校
主任教諭 角田仁
主任教諭 八巻亨

学校法人インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢
ファイナンス 中野生子

≪エコハザードと資源の持続可能性≫
環境省
自然環境局 総務課課長補佐 清家裕
自然環境局自然環境計画課生物多様性戦略企画室生物多様性評価専門官
橋本和彦
地球環境局地球温暖化対策課係長
田上翔
地球環境局総務課低炭素社会推進室
新原修一郎

三井物産株式会社
エネルギー業務部長 大久保雅治
エネルギー第二本部天然ガス第四部再生可能・新エネルギー事業室マネージャー
北澤祥子

NPO 法人 Earth Literacy Program
京都造形芸術大学教授 竹村真一

独立行政法人国際協力機構
民間連携事業部海外投融資第一課
中島洸潤
総務部総合調整課 兼 総務課 棚澤理奈
東南アジア・大洋州部東南アジア第二課
大森駿

■その他
日米学生会議同窓会事務局

日米学生会議常任幹事会
秋間修、天野順一、飯田智紀、伊丹吉彦
今井義典、岩崎洋一郎、梅崎渉、岡本実
大高巽、大塚雄三、加藤道子、金井隆
岸田守、木ノ上高章、グレン・S・フクシマ
小林規威、橘・フクシマ・咲江、竹内幸美
竹本秀人、辻喜久子、寺田恭子、冨川秀二
西田尚弘、乗竹亮治、橋本徹、平竹雅人
福谷尚久、降旗健人、細野恭平、山田勝
大和亜基、山室勇臣、山本東生、和田昭穂

日米学生会議同窓会
荒木尊士、飯島千咲、板倉美聡、市毛裕史
井上裕太、大西由起、大沼雄貴、奥谷紘子
兼子莉李那、川口耕一朗、川野さりあ
川邊拓也、菅家万里江、木村光太郎
木村優吾、小林勇貴、小松崎遥平
小宮山宗、古村大和、近藤直佑
島本晴一郎、須賀川朋美、杉岡昌太
杉本友里、鈴木健司、関口響、竹内智洋
竹内友里、武田尚樹、竹中智、千代明弘
辻村志帆、野口ゆかり、野間雄大
浜田りん、原田有理子、東影喜子
松本秀也、森下麻衣子、森田修弘
八木澤龍大、安川皓一郎、山田晃永
横田真彩

【YFJ】
Youth Forum Japan 会長
国際海洋法裁判所所長 柳井俊二
Youth Forum Japan
代表理事 山本東生
Youth Forum Japan
特別顧問 愛知和男
津田塾大学理事長 島田誠一
東京財団上席研究員 渡部恒雄
青山学院大学国際政治経済学部教授
羽場久美子

■賛助
≪賛助財団≫
公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団
公益財団法人 双日国際交流財団
公益財団法人 平和中島財団
一般財団法人 日米協会
大阪日米協会
京都日米協会
マイナー財団
日米学生会議同窓会

≪賛助企業≫
＊国際教育振興会賛助会(順不同)
アサヒグループホールディングス株式会社

伊藤忠商事株式会社
株式会社オリエンタルランド
オリックス株式会社
キッコーマン株式会社
キャノン株式会社
JX ホールディングス株式会社
新日鐵住金株式会社
株式会社セブン＆アイ・ホールディングス
禅林寺
デルタ航空会社
株式会社電通
東京海上日動火災保険株式会社
東京ガス株式会社
トヨタ自動車株式会社
中辻産業株式会社
株式会社ニコン
日産自動車株式会社
株式会社日本政策投資銀行
日本生命保険相互会社
日本電信電話株式会社
野村ホールディングス株式会社
パナソニック株式会社
富士ゼロックス株式会社
富士通株式会社
丸紅株式会社
株式会社みずほフィナンシャルグループ
株式会社三井住友銀行
三井物産株式会社
三井不動産株式会社
三菱地所株式会社
三菱重工業株式会社
三菱商事株式会社
株式会社三菱東京 UFJ 銀行
三菱 UFJ リース株式会社
メリックス株式会社

＊日米学生会議賛助企業（順不同）
株式会社原田武夫国際戦略情報研究所
日本たばこ産業株式会社
ANA ホールディングス株式会社
住友商事株式会社
日本郵船株式会社
日本航空株式会社
日本空港ビルデング株式会社
東日本旅客鉄道株式会社
協和発酵キリン株式会社
楽天株式会社
オタフクソース株式会社
株式会社アプレッソ
株式会社アゴラ・ステーション
株式会社ホワース・アジア・パシフィック・ジャパン
≪賛助者(順不同)≫
大髙巽
市川比呂也
松居眞司・有香
伊部正信

ご賛助頂いた企業・団体様（順不同）

国際教育振興会賛助会　会員企業様

三井住友銀行
SMBC

都市に豊かさと潤いを
三井不動産

三菱地所

三菱商事

MUFG
三菱東京UFJ銀行

MUFG
三菱UFJリース

メリックス株式会社
MERYX

Canon

DBJ

DELTA

dentsu

FUJITSU

HITACHI
Inspire the Next

エネルギー・資源・素材のXを。
JXグループ

Marubeni

MITSUI&CO.

MIZUHO

Nikon

NISSAN MOTOR CORPORATION

NISSAY

Panasonic

TOYOTA

日米学生会議　賛助企業・団体様

住友商事株式会社

日本郵船

AGORA station

ANA

APPRESSO

Horwath HTL
Hotel, Tourism and Leisure

IISIA 株式会社原田武夫国際戦略情報研究所

JAL
JAPAN AIRLINES

Big
JAPAN AIRPORT TERMINAL

JR東日本

JT

KYOWA KIRIN

MINER FOUNDATION

NEC

Rakuten

■□第９章
メディアへの掲載

第９章メディアへの掲載

■新聞

福井新聞社『学生 30 人 原発課題は 日米会議向け 敦賀で現状学ぶ』2015 年 6 月 19 日

学生30人 原発課題は

日米会議向け 敦賀で現状学ぶ

原発をめぐる問題を学ぼうと、第67回日米学生会議に参加している学生約30人が27日、敦賀市を訪れ、原発停止による地元商店街の現状や課題などを考えた。

同会議は国際教育振興会（東京）が1934年から行っている学生交流プログラムで、日米関係の理解に開かれている。

8月3日から23日まで開かれる今年の会議を前に、勉強会の位置付けで本県を26日から訪れている。国内最多の原発を抱える地元住民らの声を聞き、原発の課題に関する知識を深めるのが狙い。

27日は敦賀駅前商店街振興組合の田保英二理事長(61)らから駅前商店街の現状を聞いた。田保さんらは「原発の今後の動きにかかわらず、雇用をつくるためにも観光を含めた新しい産業を模索する必要がある」と話した。

学生たちは関西電力美浜原子力PRセンターなども見学した。徳島大医学部2年の塚本大志さんは「原発を生活の一部とし、問題を打開策的に捉えてきた大人たちのもどかしさを感じた」とも感想になったと話していた。

学生たちは同市役所に先立ち福井新聞本社を訪れ、同社記者から原発の現状などを学んだ。（西田光）

敦賀駅前商店街の現状を学ぶ日米学生会議の学生たち＝27日、敦賀市白銀町

山陰中央新報 朝刊『統一イメージで観光 PR 日米学生 島根の振興策提案 松江で地方創生フォーラム』2015 年 8 月 14 日

2015年（平成27年）8月14日（金曜日） 山陰中央

統一イメージで観光PR

日米学生 島根の振興策提案

松江で地方創生フォーラム

日米の学生が、人口減少が進む島根の活性化策を議論する「地方創生フォーラム」が13日、松江市内で開かれた。観光と産業、教育という三つの観点から、島根観光に特化したイメージを戦略的に発信して知名度を上げるアイデアが提案された。

国際教育振興会（東京都）が毎年手掛けている国際交流プログラムで、「学生が企画・運営する」日米学生会議の一環。今年の会議には日本30人、米国側から15人の合わせて45人が参加し、3日から約3週間の日程で広島、島根、京都、東京を巡る。

一行は8日に島根入りし、出雲大社（出雲市大社町杵築東）などの観光地や、義肢装具メーカーの中村ブレイス（大田市大森町）を訪問。職業訓練校（海士町福井）の魅力を学んでいる。

フォーラムでは、日米の有志それぞれ1人が、滞在中の体験と国際的な視点をもとに、いかに魅力を引き出して世界に訴えるかを討論。観光のグループは、熱心の観光地の意識が国内外で低いと指摘し、「神々が集う島根の国」という統一イメージで島根を内外問わずの観光資源をアピールして、島根の特長を伝えるアイデアを出した。

観光グループに加わった東海大学観光学部1年の峯尾花さん(20)は「観光情報のホームページは英語版の内容が少しいなく、米国の学生の意見が参考になり、多角的に考えられた」と話した。（山口孝紘）

島根県の活性化策を発表する日米学生会議の参加者＝松江市殿町、島根県民会館

日本経済新聞 地方経済面 中国

『日米学生が島根創生案　観光や教育、松江で披露』2015 年 8 月 18 日

日米学生が島根創生案

観光や教育、松江で披露

日米の大学生による交「会議」の参加者が松江市流プログラム「日米学生」で島根県の地方創生をテーマにフォーラムを開いた。参加学生は地元の経済界や教育者、学生らと活発に意見を交換。「人が集まる島根を考える」という観点から、観光、産業、教育の活性化策を提案した。

米ノースイースタン大3年のジョアンナ・グナワンさんは「外国から観光客を呼ぶには、島根の統一イメージの確立が有効だ」と提案した。温泉、出雲大社、宍道湖などの観光資源を「神々の集う地」という言葉で表現するのが一例だとした。

教育分野でも他県の学生や保護者をひき付けることができれば、人集めにつながる。米カリフォルニア大バークレー校3年のテレサ・アンセルモさんは、日本で数が少ない全寮制の中学・高校の運営を提案した。「授業料や生活費を抑え、収入による教育格差の解消をアピールすれば学生が集まりやすい」と訴えた。

日米学生会議は悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志が第2次世界大戦前に創設した。

■HP

明治大学広報第 676 号『「日米学生会議」に明大生が参加　「価値観の相違を乗り越えて」鈴木　良祐（商学部 4 年）』2015 年 2 月 1 日

http://www.meiji.ac.jp/koho/meidaikouhou/201502/p07_01.html

中国新聞 『経済や安保　議題を議論　日米学生会議が開幕』2015 年 8 月 5 日

http://www.chugoku-np.co.jp/column/article/article.php?comment_id=175993&comment_sub_id=0&category_id=637

NHK World 『Peace Building 80 years of Japan-America Student Conference 』2014 年 12 月

http://www3.nhk.or.jp/nhkworld/english/tv/special/201412.html

■雑誌

AGU NEWS 第676『「第66回日米学生会議」に法学部の松居純平さんと藤井一衆さんが参加。次年度の実行委員にも選出されました。』2014年11月~12月

「第66回日米学生会議」に法学部の松居純平さんと藤井一衆さんが参加。次年度の実行委員にも選出されました。

松居 純平さん
法学部法学科4年

日米学生会議は、1934年に創設された日本初の国際的な学生交流団体で第1回会議は青山学院で開催されました。創設80周年を迎えた今年の会議は、8月2日(土)～25日(月)にかけて米国(アイオワ、カリフォルニア、ニューヨーク、ワシントンD.C.)で行われ、日米の学生36名ずつ、合計72名が参加し、7つの分科会に分かれ、それぞれのテーマについて発表を行いました。本会議中は、さまざまな企業や専門家との意見交換をはじめ、外務省や大使館、米国議会等でのハイレベルな討論への参加の機会がありました。

会議で自分の英語力や説得力を試したいと考えていましたが、逆に自分自身の未熟さを痛感。また、リーダーシップについても、自分では"先導型"のリーダー像を描いて臨んだのですが、実際は"調整型"だったように思います。"調整型"は分科会を一つにまとめあげる点で有効でしたが、仲間を巻き込んで先導するリーダーもいて、状況に合わせて上手く使いこなすリーダーシップを今後身に付けたいと感じました。

以前から日米学生会議の存在は知っていましたが、前実行委員長や実行委員の方の熱意をもって考え、行動する姿に心を打たれ応募しました。そして、想像を上回った日米学生会議の魅力に心を動かされ、来年開催される第67回日米学生会議の実行委員長に立候補し、選出されました。新しい日米学生会議を創る過程で、自分の長所をさらに伸ばし、短所を克服することができるように常に意識していきたいと思います。"参加して良かった"と思える最高の会議を用意しますので、ぜひ、皆さんのご応募をお待ちしています!

藤井 一衆さん
法学部法学科4年

米国大使館主催のイベントでチラシを見て興味をもち、参加しました。語学力向上や文化交流とは一味違う、学生主催だからこそ自由に議論を最後まで追求できる点に大いに惹かれました。8月の本会議に先立ち、日本で合宿や研修、勉強会などを通して、多くの知識を吸収しながら他の参加者や専門家の方々と議論を重ねました。

渡米後はアメリカ側の参加者と合流して、それまでに蓄えた専門知識のアウトプットをメインに議論し、ファイナルフォーラムの準備を進めました。また、先住民が住む地域への訪問やホームステイ先での交流など多様な経験もできました。私が選択した分科会は「日米関係におけるスマートパワー」。国際関係、特に安全保障分野に興味があり、アメリカ人と徹底的に議論したいと考えていましたが、意見の対立などから議論が進展せず苦労しました。何度も話し合いを重ねて克服。ファイナルフォーラムでのプレゼン後、在米日本大使館職員の方からぜひプレゼン内容を外務省で参考にしたいと言われたときは、本当に努力したかいがあったと感じました。

「自分で考え、決断し、行動すること」を学んだ本会議では、貴重な体験と見聞で得た知識、ここでしか出会えない仲間たち、交流を通して構築したネットワークなど多くの収穫がありました。さらに、自分の夢・目標の達成のため、それらをどう活かすかを考えることが大切だと考えています。来年は実行委員会メンバーとして松居実行委員長と共に会議の運営に携わり、将来は国際公務員になることを目指しています。

慶應塾生新聞会 『第67回日米学生会議 議論を通じて絆を深める』2015年1月23日

国境を越えた交流を

第67回日米学生会議

議論を通じて絆を深める

岡崎さん（左から1番目）と会議に参加した学生たち

国際化が叫ばれて久しい昨今、国際交流に興味を持つ慶大生も多いのではないか。そんな慶大生に注目してほしいイベントがある。日本とアメリカの学生間の交流が図れる第67回日米学生会議だ。

日米学生会議は、1934年に日米関係の悪化を憂慮した4人の日本人学生が、日米双方の学生の議論を通して相互 [illegible]

螢雪時代　『日米学生会議　1934 年に第一回が開催された日本最古の学生自身による国際交流団体　3 週間にわたる会議で相互理解を推進』2015 年 9 月

財界　『日本空港ビルデング 「グローバル化」と「人材育成」がキーワードの『UHHA』(ユニバーシティ・ハブ・ハネダ・エアポート)とは？ 羽田空港で「日米学生会議」を開催』2015 年 9 月 22 日

日本空港ビルデング

「グローバル化」と「人材育成」がキーワードの『UHHA』(ユニバーシティ・ハブ・ハネダ・エアポート)とは？ 羽田空港で「日米学生会議」を開催

「グローバル化」と「人材育成」のキーワードをもつ『UHHA』とは「University Hub Haneda Airport」(ユニバーシティ・ハブ・ハネダ・エアポート)の略称で、充実した航空ネットワークを持つ羽田空港から、日本の高等教育の国際化を促し、グローバル感覚を持つ人材の育成を支援するプロジェクトである。

『UHHA』の設立目的は、「羽田空港を拠点とした国際標準の人材育成・交流のための大学ハブの機能確定」。国家の喫緊の課題に対しスピード感をもって解決するためには産官学が連携して具体的施策を検討することが必要で、その拠点として羽田空港を活用しようとするもの。さらには、航空業界の発展、ひいては日本再生の原動力にもつながる。

では、なぜ羽田空港なのか？ 変化の速いグローバル社会において、変化に対応するスピード感が求められる現代。「時間軸」で見た場合、羽田空港は、国内各地はもとより海外とも最短時間で結ぶ場所として、『UHHA』のビジョンに最適である。また、現在、国内49空港、海外27空港と直結され、アクセス性の良さは拠点としての大きなメリットであり、さらに世界第4位の航空利用客へのアナウンスメント効果も大きい。スピード感やアナウンス効果、アクセス性といった優位性が羽田空港には存在し、高等教育のグローバル化を目指すプロジェクトに適しているからである。

『UHHA』の具体的な活動には、オープンキャンパスの開催、各種ビジネスセミナー、シンポジウム、国際会議などの開催、留学のための情報センター的な機能の設置などがあり、次の時代を見据えたマーチャンダイジングともいえる。

先月8月18日には羽田空港第一旅客ターミナルで「第67回日米学生会議」(主催・一般財団法人国際教育振興会)が開催され、東京オリンピック後の日本を想像する“インフラ未来会議”が行われた。本会議は、日米の学生が1934年に創設した日本最古の学生会議で、隔年で相互の母国に会場を設け、世界平和の実現に貢献するという理念のもと、相互理解を通じたグローバルなリーダシップの育成や日米関係の維持発展を目的としている。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催を控え、その玄関となる羽田空港を舞台に、今後の日本の成長と未来のインフラのあり方について、第一線で活躍するインフラ関連事業の実務者(国土交通省、観光庁、ANAホールディングス、日本航空、NEC、日本空港ビルデング)と未来を担う日米71名の学生が討議を行った。また、オブザーバーとして「トビタテ！留学JAPAN」等、海外留学の促進キャンペーンを行う文部科学省高等教育局学生・留学生課の企画官である初井氏や、米日カウンシル・ジャパン(TOMODACHIイニシアチブ事務局長)マーク・ラスマン氏も参加し、羽田を舞台とする国際交流に対する関心の高さが伺えた。

羽田空港国内線旅客ターミナルを建設・管理運営する日本空港ビルデングは『UHHA』プロジェクトを通して、留学促進や学生の国際交流など、「高等教育のグローバル化」に資する取り組みへの支援協力を行っている。

今後の新たな展開に、ますます期待は大きい。

日米学生会議　第67回日本側参加者

AGU NEWS 2015 No.79 『「第 67 回日米学生会議」に実行委員長として法学部出身の松居純平さんが参加』2015 年 11 月~2016 年 1 月

「第67回日米学生会議」に実行委員長として法学部出身の松居純平さんが参加

松居 純平さん
法学部 法学科卒業 私立国際基督教大学高等学校出身

2014年は日本側参加者、2015年は実行委員長という立場で2度参加しました。日米学生会議を知ったきっかけは、本学で開催された説明会でした。ポータルサイトで配信されていた情報が気になり足を運んだところ、同年代の実行委員の勇姿と、会議の創設81年の歴史に心が打たれ応募しました。ハーバード大学を含む様々な大学の学生が、日本と米国の多様な地域から72名も参加する会議は、日米学生会議しかいまだ知りません。

日米学生会議は、毎年夏に約1カ月間、日米両国で交互に開催されており、日米の参加者は心からの相互理解に挑戦します。参加者は7つの分科会に所属し、4都市を巡る中で、分科会とその土地特有のテーマについて議論します。また、夏の本会議に向けた準備としては、6月に防衛大学校研修として、将来日本の防衛を担う幹部候補生と共に日米同盟や安全保障のあり方について議論する機会もあります。私が参加者だったときの分科会のテーマは「移民の功罪と展望」でした。分科会メンバーとは毎週オンラインで調べたことを英語で発表・議論する工夫や準備を重ね、米国側の学生との会議をスムーズに始めることができました。

私が実行委員長になってからは、前年度の会議の選挙で選ばれた日米の実行委員会を一つにまとめ、会議を成功させるために努力し、多くのかけがえのない経験をしました。価値観の違いが生む議論上の衝突からいつも亀裂が生じましたが、個人にではなく意見に対して批判をし続けたことが会議の成功につながりました。日本側の参加者は文系・理系を問わず、出身地も関東・関西をはじめ、福島県や岡山県、徳島県などの学生も参加しており、価値観や思考の違いにいつも驚かされました。また、米国側の学生との考え方の違いも日々感じました。その場の雰囲気や他者への配慮を重んじて話を進める日本と、ロジックありきで議論を進める米国では、議論の仕方が異なりました。しかし本会議の運営では、両国の良いところを取り入れ、効率的かつ質の良い運営ができました。

私が会議を通じて得たものは、まず「一生モノの友情」です。城山三郎氏の著書『友情 力あり』の中で、元総理大臣で第6回と7回の日米学生会議に参加した宮澤喜一氏が述べていますが、日米学生会議には、求める者には心からの「友情」を育むことができる環境があります。次に、多くの議論を重ねることで、「本音で意見をぶつける対話力と、相手を心から理解しようとする傾聴の姿勢」を得ることができました。卒業後も日米学生会議で出会った仲間と共に過ごした日々は、私や仲間を一生支え続けていくものだと今から確信しています。

本学で開催されたファイナルフォーラム

外務省主催のレセプション

青山学報 250 号 『「日米学生会議」～80 年の歩み～』2015 Winter

「日米学生会議」～80年の歩み～

第67回日米学生会議実行委員長／法学部４年 松居 純平

２０１４年11月15日、日米学生会議の設立80周年を記念した祝賀会が開催されました。日米学生会議は１９３４年、満州事変以降失われつつあった日米相互の信頼回復を目指した４人の日本人大学生たちにより創設された、日本初の国際学生交流プログラムです。日米学生会議は青山学院とも縁が深く、その会議創設者のうちの一人である中山公威氏は本学の出身者であり、また、日米学生会議の第１回会議も１９３４年に青山学院大学で開催されています。

日米学生会議は、「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という創立当時の理念に基づき、戦争による会議中断を含め様々な困難を乗り越え現代まで継承されてきました。日米学生会議は創設以来、学生の相互理解と友情、信頼関係を醸成し続けており、毎夏、日米交互で開催される約１カ月の会議は、すべて学生の手で企画・運営されています。また、日米学生会議には過去、米国からはヘンリー・キッシンジャー元米国務長官がハーバード大学の学生であった１９５１年に参加、日本からは故宮澤喜一元首相が、東京帝国大学の学生時代、１９３９年と１９４０年に参加しているなど、これまで数多くの著名なＯＢ・ＯＧを輩出しています。

日米学生会議は誕生から80年という歳月を経て日米共同声明にも「不可欠なものである」と明記されました。日米の外交関係も今や歴史上最も成熟した二国間関係と言われており、日米学生会議創設当時とは隔世の感があります。しかし、日米学生会議の掲げる先述の理念は果たして本当に達成されたと言えるでしょうか。我々を取り巻く世界に目を向けると、テロリズム、債務危機、教育格差、気候変動など、現代社会には解決されなければいけない課題が山積しています。また企業活動の国際化や情報の過多、或いは宗教対立などの様々な要因によって世界情勢は日々劇的に変化しています。このような現代において、世界の平和とは何か。日米はその中でどのような役割を担うのか。そして学生はその実現のために何ができるのか。日米学生会議は、参加者一人一人がこの壮大な問いに対して自分なりの答えを見つけ出す絶好の場なのです。

来夏日本で開催される第67回日米学生会議では「過去と向き合い未来を拓く～衝突と多様性から生まれる新たな相違理解～」というテーマを掲げ、広島、島根、京都、東京の４つの会議開催地をめぐる中で、分科会活動における討論のほか、政府機関や企業への訪問、或いは専門家との対話の場を提供します。広島や島根では開催地特有の議題を設定し、平和フォーラムや地方創生フォーラムを開催します。会議終盤のファイナルフォーラムでは会議全体の成果を社会発信していきます。参加者は多様な価値観が交錯する中、異文化接触により自己との葛藤や相手との衝突を繰り返しながら過去を振り返り、改めて自己と向き合うでしょう。日米学生会議で得られた経験はそれぞれの参加者を成長させ、特定の利害に拘束されず率直に議論をする中で、参加者相互の信頼と絆が築かれます。このような信頼と絆こそが、私は今後様々な問題を解決する一助となり、それが世界に平和をもたらすための礎になると信じています。

第66回日米学生会議 ワシントンD.C.にて（2014年8月23日）

第67回日米学生会議 日本側報告書

発行日　2016年3月

編集者　松居純平　森鞠乃
岡崎栞　鈴木良祐
藤井一衆　村井咲絵
モンタニョミチェルルイス　矢島ショーン

発行　日米学生会議報告書編集委員会
〒160-0004
東京都新宿区四ツ谷 1-50 一般財団法人国際教育振興会内
日米学生会議事務局

印刷　北新印刷㈱

Japan-America Student Conference
Since 1934

主　　催：一般財団法人国際教育振興会

企画・運営：第 67 回日米学生会議実行委員会